鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（150）

中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅵ）

上水流遺跡４

かみづる

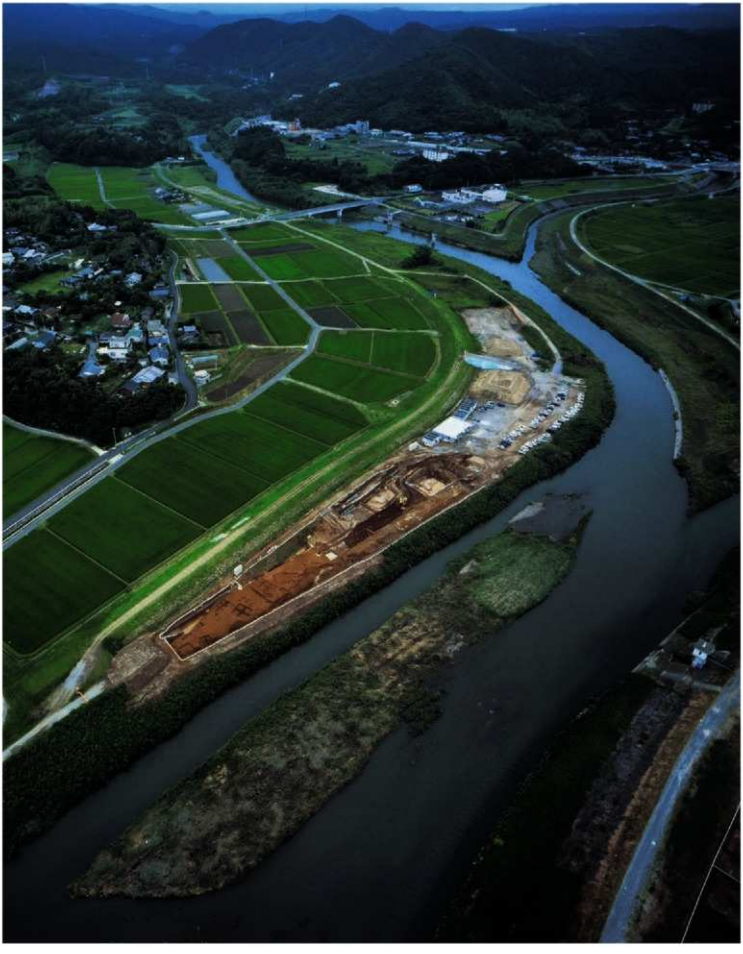
縄文時代前期末から中期前半・補遺編

【第Ⅰ分冊】

（南さつま市金峰町）

２０１０年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



上空から見た上水流遺跡（万之瀬川上流方向をみる）

序　文

この報告書は，万之瀬川の河川改修事業に伴って，平成12年度及び15年度から17年度にかけて実施した南さつま市金峰町（旧日置郡金峰町）花瀬に所在する上水流遺跡の発掘調査の記録（縄文時代前期末から中期前半編）です。

上水流遺跡は調査の結果，縄文時代から近世までの長期にわたる期間の遺構・遺物が発見された遺跡です。発掘調査の成果報告書として時代毎に計画的に進めており，これまでに3冊を刊行しています。本報告書は4冊目であり，これで本遺跡のすべてが報告されることになります。

今回の報告書は，深浦式土器（縄文時代前期末～中期初頭）と春日式土器（縄文時代中期前半）の時期を中心としたものです。

深浦式土器の時期では，多くの深浦式土器・中期条痕文土器が出土しています。一箇所からこれほど深浦式土器と条痕文土器が出土した例は他になく，注目されています。

春日式土器の時代でも，他に類をみないほど数多くの春日式土器とともに，大型の集石が9基発見されています。この大型の集石についても，本県ではこれまで検出例がなく注目されています。

これらの資料は，県内でも重要な資料の一つです。今後の県内における調査・研究に大きな役割を果たすものとなるでしょう。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査にあたりご協力をいただいた南薩地域振興局（旧伊集院土木事務所），南さつま市教育委員会，関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　山下　吉美

報告書抄録

ふりがな	かみづる　いせき
書名	上水流遺跡　4
副書名	中小河川改修事業(万之瀬川)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅵ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	150
編集者名	溝口　学・小林晋也・日高勝博・上床　真
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号　TEL 0995-48-5811
発行年月日	西暦2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
かみづるいせき 上水流遺跡	みなみさつましきんぽうちょう 南さつま市金峰町 はなぜあざかみづる 花瀬字上水流・ もりやま 森山	462209	35-98	31° 25′ 02″	130° 20′ 22″	20000424 ～ 20010329 20030809 ～ 20040319 20040514 ～ 20050204 20050509 ～ 20050928	15,500	中小河川改修事業 (万之瀬川)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上水流遺跡	散布地	縄文時代前期末～中期初頭	集石　9基 石材集積　5基 土坑　5基 焼土　5基	深浦式土器（日本山段階・石峰段階・鞍谷段階）・条痕文土器・鷹島式土器・船元Ⅱ式土器・石鏃・石匙・スクレイパー・石核・二次加工剥片・石斧・磨石・石皿・石錘	
		縄文時代中期前半	大型集石　9基 集石　25基 土坑　4基 焼土遺構　123基 焼土炭化物集中域 ピット　97基	春日式土器・中尾田Ⅲ類土器・石鏃・石匙・スクレイパー・石錐・楔形石器・石核・二次加工剥片・石斧・磨石・石皿・石錘・玦状耳飾・軽石製品	
	集落遺跡	縄文時代中期後半 中・近世	集石　2基 焼土　3基 大型土坑 土坑	南福寺式土器 鉄滓・輪の羽口	これまでの補遺

遺跡の概要

上水流遺跡では,縄文時代前期から近世にかけての遺構・遺物が発見されている。今回は,縄文時代前期から中期前半について報告する。併せて,これまでの補足も行う。

縄文時代前期末～中期初頭では,多くの深浦式土器と中期条痕文土器が出土している。一箇所でこれほど深浦式土器が出土した例は他になく,注目される。

縄文時代中期前半では,大型の集石が9基発見された。この大型の集石については本県では他に例がなく注目される。また,多くの春日式土器が出土した。深浦式土器と同様に,一箇所でこれほど春日式土器が出土した例は他になく,注目される。石器についても,石鏃や石匙,石皿などが数多く出土しており,当該時期における生活の様相を検討するための重要な資料のひとつとなった。

東シナ海

(1/50,000)

上水流遺跡の位置図

例　言

1　本書は，中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う上水流遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は，鹿児島県南さつま市金峰町（旧日置郡金峰町）花瀬字上水流・森山に所在する。

3　発掘調査及び報告書作成（整理作業）は，県土木部河川課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。

4　発掘調査は，平成 12 年 4 月 24 日～平成 13 年 3 月 29 日，平成 15 年 8 月 9 日～平成 16 年 3 月 19 日，平成 16 年 5 月 14 日～平成 17 年 2 月 4 日，平成 17 年 5 月 9 日～ 9 月 28 日にかけて実施し，整理作業・報告書作成は平成 17 ～ 21 年度に実施した。

5　遺物番号は，時代別・遺構・遺物の種類順にそれぞれ通し番号とし，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。

6　挿図の縮尺は，各図面に示した。

7　本書で用いたレベル数値は，県土木部が提示した工事計画図面に基づく海抜絶対高である。

8　発掘調査における図面の作成，写真の撮影は，各年度の調査担当者が行った。空中写真撮影は，有限会社ふじた，有限会社スカイサーベイ九州に委託した。

9　遺構実測図の一部は，株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し，トレースは上床真が中心となって行った。

10　土器の実測・トレースは，整理作業員の協力を得て木之下悦郎・上床が行った。

11　石器の実測・トレースの一部は，整理作業員の協力を得て上床が行い，一部は，株式会社埋蔵文化財サポートシステム，株式会社九州文化財研究所，株式会社アイシン精機，株式会社パスコ，大成エンジニアリングに委託し，監修は溝口学・森雄二・廣栄次・黒川忠広・上床が行った。

12　自然科学分析は，株式会社パリノ・サーヴェイ，株式会社パレオ・ラボ，株式会社加速器年代研究所に委託した。

13　遺物の写真撮影は，吉岡康弘・西園勝彦・辻明啓・上床が行った。

14　本書の編集は上床が行った。執筆の分担は以下のとおりである。

第１章・第２章…… 日高勝博・上床　真
第３章…… 廣　栄次・上床　真
第４章…… 佐藤義明・森　雄二・上床　真
第５章…… 小林晋也・永濱功治・日高勝博・上床　真
第６章…… （各文頭に記載）
第７章…… （各文末に記載）

15　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，上水流遺跡の遺物注記の略号は「ＫＭＺ」，「ＫＺ」である。

総　目　次

本文目次

【第一分冊】（本書掲載分）

巻頭図版
序文
報告書抄録
上水流遺跡の位置図
例言
総目次
第１章　調査の経緯……１
第２章　層位と調査の概要……２
第３章　縄文時代前期末～中期初頭の調査……１２
　第１節　調査の概要……１２
　第２節　遺構……１３
　第３節　遺物……３４
　　１　土器……３４
　　２　石器……１６８

【第二分冊】（別書掲載分）

総目次
第４章　縄文時代中期前半の調査……１
　第１節　調査の概要……１
　第２節　遺構……１
　第３節　遺物……６８
　　１　土器……６８
　　２　石器……１７５
　　３　石製品、その他……２５６
第５章　補遺……２６４
　第１節　概要……２６４
　第２節　遺構……２６４
　第３節　遺物……２６４
　第４節　鉄関連遺物……２７４
第６章　科学分析……３０３
第７章　まとめ……３３３
遺物観察表……３５３
図版……３８３

第一分冊　目　次（本書掲載分）

挿図目次

第１図　調査範囲……３
第２図　調査後の状況……３
第３図　西個土層断面図（１）……４
第４図　西個土層断面図（２）……５
第５図　北個土層断面図……６
第６図　遺構配置図（１）……１２
第７図　遺構配置図（２）……１３
第８図　Ｕ～Ｙ区の遺構配置図……１４
第９図　Ｎ～Ｒ区の遺構配置図……１５
第10図　集石（１）……１６
第11図　集石（２）……１７
第12図　集石（３）……１８
第13図　集石出土遺物実測図……１９
第14図　土坑（１）……２１
第15図　土坑出土遺物実測図（１）……２２
第16図　土坑（２）……２３
第17図　土坑出土遺物実測図（２）……２３
第18図　石材集積……２５
第19図　石材集積１出土遺物実測図（１）……２５
第20図　石材集積１出土遺物実測図（２）……２６
第21図　石材集積２出土遺物実測図……２７
第22図　石材集積３出土遺物実測図（１）……２８
第23図　石材集積３出土遺物実測図（２）……２９
第24図　石材集積４出土遺物実測図……３０
第25図　石材集積５出土遺物実測図……３１
第26図　集中出土土器遺構（１）－１……３２
第27図　集中出土土器遺構（１）－２……３３
第28図　集中出土土器遺構出土遺物実測図……３３
第29図　集中出土土器遺構（２）……３３
第30図　分類別土器出土状況図（１）……３５
第31図　分類別土器出土状況図（２）……３６
第32図　分類別土器出土状況図（３）……３７
第33図　分類別土器出土状況図（４）……３８
第34図　土器詳細出土状況図（１）……３９
第35図　土器詳細出土状況図（２）……４０
第36図　土器詳細出土状況図（３）……４１
第37図　土器詳細出土状況図（４）……４２
第38図　Ｉａ・ｂ類土器出土状況図（１）……４３
第39図　Ｉａ・ｂ類土器出土状況図（２）……４４
第40図　Ｉｃ・ｄ・ｅ類土器出土状況図（１）……４５
第41図　Ｉｃ・ｄ・ｅ類土器出土状況図（２）……４６
第42図　Ｉｆ・ｇ類土器出土状況図（１）……４７
第43図　Ｉｆ・ｇ類土器出土状況図（２）……４８
第44図　Ⅱ類土器出土状況図（１）……４９
第45図　Ⅱ類土器出土状況図（２）……５０
第46図　Ⅱ類土器出土状況図（３）……５１
第47図　Ⅲ類土器出土状況図……５２
第48図　Ⅰ類土器実測図（１）……５３
第49図　Ⅰ類土器実測図（２）……５４
第50図　Ⅰ類土器実測図（３）……５５
第51図　Ⅰ類土器実測図（４）……５６
第52図　Ⅰ類土器実測図（５）……５７
第53図　Ⅰ類土器実測図（６）……５８
第54図　Ⅰ類土器実測図（７）……５９
第55図　Ⅰ類土器実測図（８）……６０
第56図　Ⅰ類土器実測図（９）……６１
第57図　Ⅰ類土器実測図（１０）……６２
第58図　Ⅰ類土器実測図（１１）……６３
第59図　Ⅰ類土器実測図（１２）……６４
第60図　Ⅰ類土器実測図（１３）……６５
第61図　Ⅰ類土器実測図（１４）……６６
第62図　Ⅰ類土器実測図（１５）……６７
第63図　Ⅰ類土器実測図（１６）……６８
第64図　Ⅰ類土器実測図（１７）……６９
第65図　Ⅰ類土器実測図（１８）……７０
第66図　Ⅰ類土器実測図（１９）……７１
第67図　Ⅰ類土器実測図（２０）……７２
第68図　Ⅰ類土器実測図（２１）……７３
第69図　Ⅰ類土器実測図（２２）……７４
第70図　Ⅰ類土器実測図（２３）……７５
第71図　Ⅰ類土器実測図（２４）……７６
第72図　Ⅰ類土器実測図（２５）……７７
第73図　Ⅰ類土器実測図（２６）……７８
第74図　Ⅰ類土器実測図（２７）……７９
第75図　Ⅰ類土器実測図（２８）……８０
第76図　Ⅰ類土器実測図（２９）……８１

第77図　Ⅰ類土器実測図（30）…… 82
第78図　Ⅰ類土器実測図（31）…… 83
第79図　Ⅰ類土器実測図（32）…… 84
第80図　Ⅰ類土器実測図（33）…… 85
第81図　Ⅰ類土器実測図（34）…… 86
第82図　Ⅰ類土器実測図（35）…… 87
第83図　Ⅰ類土器実測図（36）…… 88
第84図　Ⅰ類土器実測図（37）…… 89
第85図　Ⅰ類土器実測図（38）…… 90
第86図　Ⅰ類土器実測図（39）…… 91
第87図　Ⅰ類土器実測図（40）…… 92
第88図　Ⅰ類土器実測図（41）…… 93
第89図　Ⅰ類土器実測図（42）…… 94
第90図　Ⅰ類土器実測図（43）…… 95
第91図　Ⅰ類土器実測図（44）…… 96
第92図　Ⅰ類土器実測図（45）…… 97
第93図　Ⅰ類土器実測図（46）…… 98
第94図　Ⅰ類土器実測図（47）…… 99
第95図　Ⅰ類土器実測図（48）…… 100
第96図　Ⅰ類土器実測図（49）…… 101
第97図　Ⅰ類土器実測図（50）…… 102
第98図　Ⅰ類土器実測図（51）…… 103
第99図　Ⅰ類土器実測図（52）…… 104
第100図　Ⅰ類土器実測図（53）…… 105
第101図　Ⅰ類土器実測図（54）…… 106
第102図　Ⅰ類土器実測図（55）…… 107
第103図　Ⅰ類土器実測図（56）…… 108
第104図　Ⅰ類土器実測図（57）…… 109
第105図　Ⅰ類土器実測図（58）…… 110
第106図　Ⅰ類土器実測図（59）…… 111
第107図　Ⅰ類土器実測図（60）…… 112
第108図　Ⅰ類土器実測図（61）…… 113
第109図　Ⅰ類土器実測図（62）…… 114
第110図　Ⅰ類土器実測図（63）…… 115
第111図　Ⅰ類土器実測図（64）…… 116
第112図　Ⅰ類土器実測図（65）…… 117
第113図　Ⅰ類土器実測図（66）…… 118
第114図　Ⅰ類土器実測図（67）…… 119
第115図　Ⅰ類土器実測図（68）…… 120
第116図　Ⅰ類土器実測図（69）…… 121
第117図　Ⅰ類土器実測図（70）…… 122
第118図　Ⅱ類土器実測図（1）…… 124
第119図　Ⅱ類土器実測図（2）…… 125
第120図　Ⅱ類土器実測図（3）…… 126
第121図　Ⅱ類土器実測図（4）…… 127
第122図　Ⅱ類土器実測図（5）…… 128
第123図　Ⅱ類土器実測図（6）…… 129
第124図　Ⅱ類土器実測図（7）…… 130
第125図　Ⅱ類土器実測図（8）…… 131
第126図　Ⅱ類土器実測図（9）…… 132
第127図　Ⅱ類土器実測図（10）…… 133
第128図　Ⅱ類土器実測図（11）…… 134
第129図　Ⅱ類土器実測図（12）…… 135
第130図　Ⅱ類土器実測図（13）…… 136
第131図　Ⅱ類土器実測図（14）…… 137
第132図　Ⅱ類土器実測図（15）…… 138
第133図　Ⅱ類土器実測図（16）…… 139
第134図　Ⅱ類土器実測図（17）…… 140
第135図　Ⅱ類土器実測図（18）…… 141
第136図　Ⅱ類土器実測図（19）…… 142
第137図　Ⅱ類土器実測図（20）…… 143
第138図　Ⅱ類土器実測図（21）…… 144
第139図　Ⅱ類土器実測図（22）…… 145
第140図　Ⅱ類土器実測図（23）…… 146
第141図　Ⅱ類土器実測図（24）…… 147
第142図　Ⅱ類土器実測図（25）…… 148
第143図　Ⅱ類土器実測図（26）…… 149
第144図　Ⅲ類土器実測図（1）…… 150
第145図　Ⅲ類土器実測図（2）…… 151
第146図　Ⅲ類土器実測図（3）…… 152
第147図　Ⅲ類土器実測図（4）…… 153
第148図　Ⅲ類土器実測図（5）…… 154
第149図　Ⅲ類土器実測図（6）…… 155
第150図　Ⅲ類土器実測図（7）…… 156
第151図　Ⅲ類土器実測図（8）…… 157
第152図　Ⅲ類土器実測図（9）…… 158
第153図　Ⅰ類土器垂直分布図（1）…… 159
第154図　Ⅰ類土器垂直分布図（2）…… 160
第155図　Ⅰ類土器垂直分布図（3）…… 161
第156図　Ⅰ類土器垂直分布図（4）…… 162
第157図　Ⅰ類土器垂直分布図（5）…… 163
第158図　Ⅰ類土器垂直分布図（6）…… 164
第159図　Ⅰ類土器垂直分布図（7）…… 165
第160図　Ⅰ類土器垂直分布図（8）…… 166
第161図　Ⅰ類土器垂直分布図（9）…… 167
第162図　石材別出土状況図（1）…… 169
第163図　石材別出土状況図（2）…… 170
第164図　石材別出土状況図（3）…… 171
第165図　石材別出土状況図（4）…… 172
第166図　石材別出土状況図（5）…… 173
第167図　石材別出土状況図（6）…… 174
第168図　器種別出土状況図（1）…… 175
第169図　器種別出土状況図（2）…… 176
第170図　器種別出土状況図（3）…… 177
第171図　器種別出土状況図（4）…… 178
第172図　器種別出土状況図（5）…… 179
第173図　器種別出土状況図（6）…… 180
第174図　石器詳細出土状況図（1）…… 181
第175図　石器詳細出土状況図（2）…… 182
第176図　石器詳細出土状況図（3）…… 183
第177図　石器詳細出土状況図（4）…… 184
第178図　石器詳細出土状況図（5）…… 185
第179図　石器実測図（1）石鏃・石匙①…… 186
第180図　石器実測図（2）石匙②・石錐…… 187
第181図　石器実測図（3）スクレイパー①…… 188
第182図　石器実測図（4）スクレイパー②…… 189
第183図　石器実測図（5）スクレイパー③…… 190
第184図　石器実測図（6）二次加工剥片・楔形石器…… 191
第185図　石器実測図（7）石核…… 192
第186図　石器実測図（8）磨製石斧①…… 193
第187図　石器実測図（9）磨製石斧②
・礫器・磨石敲石①…… 194
第188図　石器実測図（10）磨石敲石②…… 195
第189図　石器実測図（11）磨石敲石③…… 196
第190図　石器実測図（12）磨石敲石④・石錘…… 197
第191図　石器実測図（13）石皿①…… 198
第192図　石器実測図（14）石皿②…… 199
第193図　石器実測図（15）砥石…… 200

表目次

表1　石材分類表…… 7
表2　石器分類表（1）…… 8
表3　石器分類表（2）…… 9
表4　深浦期集石一覧…… 17
表5　深浦期焼土一覧…… 20
表6　深浦期土坑一覧…… 23
表7　石材集石一覧…… 24
表8　深浦期集中出土土器一覧…… 29
表9　Ⅰ類土器文様分類（1）…… 57
表10　Ⅰ類土器文様分類（2）…… 69

写真・図版目次

巻頭図版　上空から見た上水流遺跡……巻頭
写真１　石材分類写真（１）……１０
写真２　石材分類写真（２）……１１
写真３　Ｐ－５区検出の焼土域……２０
写真４　土坑２内出土滑石片……２１
写真５　集中出土土器１……３３
写真６　土器793の内面に残る指紋の痕跡……１５４

第二分冊　目　次（別書掲載分）

本文目次

第１図　Ｖ層コンター図及び遺構配置図（１）……２
第２図　Ｖ層コンター図及び遺構配置図（２）……３
第３図　遺構配置図（１）……４
第４図　遺構配置図（２）……５
第５図　遺構配置図（３）……６
第６図　遺構配置図（４）……７
第７図　遺構配置図（５）……８
第８図　遺構配置図（６）……９
第９図　遺構配置図（７）……１０
第10図　遺構配置図（８）……１１
第11図　遺構配置図（９）……１２
第12図　遺構配置図（１０）……１３
第13図　大型集石１……１４
第14図　大型集石１内検出の集石（１）……１６
第15図　大型集石１内検出の集石（２）……１７
第16図　大型集石１内検出の集石（３）……１８
第17図　遺構内集石４出土遺物実測図……１８
第18図　大型集石１検出面での散石と焼土（１）　１９
第19図　大型集石１検出面での散石と焼土（２）　２０
第20図　大型集石２
・大型集石２内出土遺物実測図……２１
第21図　大型集石３……２２
第22図　大型集石３内検出の集石……２３
第23図　大型集石４……２４
第24図　大型集石４内出土遺物実測図……２５
第25図　大型集石５……２６
第26図　大型集石５内出土土器実測図（１）……２７
第27図　大型集石３内出土土器の接合展開図……２７
第28図　大型集石５内出土土器の出土状況図……２８
第29図　大型集石５内出土遺物実測図（２）……２９
第30図　大型集石５内出土遺物実測図（３）……３０
第31図　大型集石５・６内出土遺物実測図……３１
第32図　大型集石６……３２
第33図　大型集石７……３３
第34図　大型集石８……３４
第35図　大型集石８・９内出土遺物実測図……３５
第36図　大型集石９……３６
第37図　集石（１）……３７
第38図　集石（２）……３８
第39図　集石（３）……３９
第40図　集石（４）……４０
第41図　集石（５）及び棒状礫集積
・集石出土遺物……４１
第42図　土坑……４３
第43図　石皿遺構……４５
第44図　石皿遺構出土石皿実測図（１）……４５
第45図　石皿遺構出土石皿実測図（２）……４６
第46図　石皿遺構出土石皿実測図（３）……４７
第47図　焼土（１）……４８
第48図　焼土出土遺物実測図……４８
第49図　焼土（２）……４９
第50図　石器集中部分布図（１）……５１
第51図　石器集中部分布図（２）……５２
第52図　石器集中部分布図（３）……５３
第53図　石器集中部分布図（４）……５４
第54図　石器集中部分布図（５）……５５
第55図　石器集中部分布図（６）……５６
第56図　石器集中部分布図（７）……５７
第57図　石器集中部分布図（８）……５８
第58図　集中出土土器検出状況図（１）……５９
第59図　集中出土土器出土遺物（１）実測図……６０
第60図　集中出土土器検出状況図（２）……６１
第61図　集中出土土器出土遺物（２）実測図……６１
第62図　集中出土土器検出状況図（３）……６２
第63図　集中出土土器出土遺物（３）実測図……６２
第64図　集中出土土器検出状況図（４）……６３
第65図　集中出土土器検出状況図（５）……６４
第66図　集中出土土器検出状況図（６）……６５
第67図　石製品出土状況図……６５
第68図　集中出土土器出土遺物（４）……６６
第69図　集中出土土器出土遺物（５）……６７
第70図　集中出土土器検出状況図（７）……６８
第71図　分類別土器出土状況図（１）……６９
第72図　分類別土器出土状況図（２）……７０
第73図　土器詳細出土状況図（１）……７１
第74図　土器詳細出土状況図（２）……７２
第75図　土器詳細出土状況図（３）……７３
第76図　土器詳細出土状況図（４）……７４
第77図　土器詳細出土状況図（５）……７５
第78図　土器詳細出土状況図（６）……７６
第79図　土器詳細出土状況図（７）……７７
第80図　土器詳細出土状況図（８）……７８
第81図　土器詳細出土状況図（９）……７９
第82図　土器詳細出土状況図（１０）……８０
第83図　土器詳細出土状況図（１１）……８１
第84図　Ⅰａ類土器実測図（１）……８２
第85図　Ⅰａ類土器実測図（２）……８３
第86図　Ⅰａ類土器実測図（３）……８４
第87図　Ⅰａ類土器実測図（４）……８５
第88図　Ⅰａ類土器実測図（５）……８６
第89図　Ⅰａ類土器実測図（６）……８７
第90図　Ⅰａ類土器実測図（７）……８８
第91図　Ⅰａ類土器実測図（８）……８９
第92図　Ⅰａ類土器実測図（９）……９０
第93図　Ⅰａ類土器実測図（１０）……９１
第94図　Ⅰａ類土器実測図（１１）……９２
第95図　Ⅰａ類土器実測図（１２）……９３
第96図　Ⅰａ類土器実測図（１３）……９４
第97図　Ⅰａ類土器実測図（１４）……９５
第98図　Ⅰａ類土器実測図（１５）……９６
第99図　Ⅰａ類土器実測図（１６）……９７
第100図　Ⅰａ類土器実測図（１７）……９８
第101図　Ⅰａ類土器実測図（１８）……９９
第102図　Ⅰａ類土器実測図（１９）……１００
第103図　Ⅰａ類土器実測図（２０）……１０１
第104図　Ⅰａ類土器実測図（２１）……１０２
第105図　Ⅰａ類土器実測図（２２）……１０３
第106図　Ⅰａ類土器実測図（２３）……１０４
第107図　Ⅰａ類土器実測図（２４）……１０５
第108図　Ⅰａ類土器実測図（２５）……１０６

第109図　Ⅰa類土器実測図（26）……107
第110図　Ⅰa類土器実測図（27）……108
第111図　Ⅰa類土器実測図（28）……109
第112図　Ⅰa類土器実測図（29）……110
第113図　Ⅰa類土器実測図（30）……111
第114図　Ⅰa類土器実測図（31）……112
第115図　Ⅰb類土器実測図（1）……113
第116図　Ⅰb類土器実測図（2）……114
第117図　Ⅰb類土器実測図（3）……115
第118図　Ⅰb類土器実測図（4）……116
第119図　Ⅰb類土器実測図（5）……117
第120図　Ⅰb類土器実側図（6）……118
第121図　Ⅰb類土器実測図（7）……119
第122図　Ⅰb類土器実測図（8）……120
第123図　Ⅰb類土器実測図（9）……121
第124図　Ⅰb類土器実測図（10）……122
第125図　Ⅰb類土器実測図（11）……123
第126図　Ⅰb類土器実測図（12）……124
第127図　Ⅰb類土器実測図（13）……125
第128図　Ⅰb類土器実測図（14）……126
第129図　Ⅰb類土器実測図（15）……127
第130図　Ⅰc類土器実測図（1）……128
第131図　Ⅰc類土器実測図（2）……129
第132図　Ⅰc類土器実測図（3）……130
第133図　Ⅰc類土器実測図（4）……131
第134図　Ⅰc類土器実測図（5）……132
第135図　Ⅱ類土器実測図（1）……133
第136図　Ⅱ類土器実測図（2）……134
第137図　Ⅱ類土器実測図（3）……135
第138図　Ⅱ類土器実測図（4）……136
第139図　Ⅱ類土器実測図（5）……137
第140図　Ⅱ類土器実測図（6）……138
第141図　Ⅱ類土器実測図（7）……139
第142図　Ⅱ類土器実測図（8）……140
第143図　Ⅱ類土器実測図（9）……141
第144図　Ⅱ類土器実測図（10）……142
第145図　Ⅱ類土器実測図（11）……143
第146図　Ⅱ類土器実測図（12）……144
第147図　Ⅲa類土器実測図（1）……145
第148図　Ⅲa類土器実測図（2）……146
第149図　Ⅲa類土器実測図（3）……147
第150図　Ⅲa類土器実測図（4）……148
第151図　Ⅲa類土器実測図（5）……149
第152図　Ⅲa類土器実測図（6）……150
第153図　Ⅲa類土器実測図（7）……151
第154図　Ⅲa類土器実測図（8）……152
第155図　Ⅲa類土器実測図（9）……153
第156図　Ⅲb類土器実測図……154
第157図　Ⅳ類土器実測図（1）……155
第158図　Ⅳ類土器実測図（2）……156
第159図　Ⅳ類土器実測図（3）……157
第160図　Ⅳ類土器実測図（4）・Ⅴ類土器実測図（1）158
第161図　Ⅴ類土器実測図（2）……159
第162図　Ⅴ類土器実測図（3）……160
第163図　Ⅴ類土器実測図（4）……161
第164図　Ⅴ類土器実測図（5）……162
第165図　Ⅴ類土器実測図（6）……163
第166図　Ⅵ類土器実測図（1）……164
第167図　Ⅵ類土器実測図（2）……165
第168図　1−2A・2B群土器垂直分布図（1）…166
第169図　1−2A・2B群土器垂直分布図（2）…167
第170図　1−2A・2B群土器垂直分布図（3）…168
第171図　1−2A・2B群土器垂直分布図（4）…169
第172図　1−2A・2B群土器垂直分布図（5）…170
第173図　1−2A・2B群土器垂直分布図（6）…171
第174図　1−2A・2B群土器垂直分布図（7）…172
第175図　1−2A・2B群土器垂直分布図（8）…173
第176図　1−2A・2B群土器垂直分布図（9）…174
第177図　石材別出土状況図（1）……176
第178図　石材別出土状況図（2）……177
第179図　石材別出土状況図（3）……178
第180図　石材別出土状況図（4）……179
第181図　石材別出土状況図（5）……180
第182図　石材別出土状況図（6）……181
第183図　石材別出土状況図（7）……182
第184図　石材別出土状況図（8）……183
第185図　石材別出土状況図（9）……184
第186図　石材別出土状況図（10）……185
第187図　石材別出土状況図（11）……186
第188図　器種別出土状況図（1）……187
第189図　器種別出土状況図（2）……188
第190図　器種別出土状況図（3）……189
第191図　器種別出土状況図（4）……190
第192図　器種別出土状況図（5）……191
第193図　器種別出土状況図（6）……192
第194図　器種別出土状況図（7）……193
第195図　石器詳細出土状況図（1）……194
第196図　石器詳細出土状況図（2）……195
第197図　石器詳細出土状況図（3）……196
第198図　石器詳細出土状況図（4）……197
第199図　石器詳細出土状況図（5）……198
第200図　石器詳細出土状況図（6）……199
第201図　石器詳細出土状況図（7）……200
第202図　石器詳細出土状況図（8）……201
第203図　石器詳細出土状況図（9）……202
第204図　石器詳細出土状況図（10）……203
第205図　石器詳細出土状況図（11）……204
第206図　石器実測図（1）石鏃①……205
第207図　石器実測図（2）石鏃②……206
第208図　石器実測図（3）石鏃③……207
第209図　石器実測図（4）石鏃④……208
第210図　石器実測図（5）石鏃⑤……209
第211図　石器実測図（6）石鏃⑥……210
第212図　石器実測図（7）石鏃⑦・石匙①……212
第213図　石器実測図（8）石匙②……213
第214図　石器実測図（9）石匙③……214
第215図　石器実測図（10）石匙④……215
第216図　石器実測図（11）石匙⑤……216
第217図　石器実測図（12）石匙⑥……217
第218図　石器実測図（13）石匙⑦……218
第219図　石器実測図（14）石匙⑧……219
第220図　石器実測図（15）石匙⑨……220
第221図　石器実測図（16）石匙⑩……221
第222図　石器実測図（17）スクレイパー①…222
第223図　石器実測図（18）スクレイパー②…223
第224図　石器実測図（19）スクレイパー③…224
第225図　石器実測図（20）スクレイパー④…225
第226図　石器実測図（21）スクレイパー⑤…226
第227図　石器実測図（22）スクレイパー⑥…227
第228図　石器実測図（23）楔形石器
・鋸歯状加工石器……228
第229図　石器実測図（24）石錐……229
第230図　石器実測図（25）石核①……230
第231図　石器実測図（26）石核②……231
第232図　石器実測図（27）石核③……232
第233図　石器実測図（28）石核④……233
第234図　石器実測図（29）磨製石斧①……235
第235図　石器実測図（30）磨製石斧②……236
第236図　石器実測図（31）磨製石斧③……237
第237図　石器実測図（32）磨製石斧④……238
第238図　石器実測図（33）磨製石斧⑤……239
第239図　磨製石斧刃部片出土状況図……239
第240図　石器実測図（34）磨製石斧⑥……240
第241図　石器実測図（35）磨製石斧⑦
・礫器①……241
第242図　石器実測図（36）礫器②……242

第243図　石器実測図（３７）側面に線状の使用痕のある石器……２４３
第244図　石器実測図（３８）磨石敲石①……２４５
第245図　石器実測図（３９）磨石敲石②……２４６
第246図　石器実測図（４０）磨石敲石③……２４７
第247図　石器実測図（４１）磨石敲石④……２４９
第248図　石器実測図（４２）磨石敲石⑤……２５０
第249図　石器実測図（４３）磨石敲石⑥……２５１
第250図　石器実測図（４４）磨石敲石⑦……２５２
第251図　石器実測図（４５）磨石敲石⑧……２５３
第252図　石器実測図（４６）磨石敲石⑨……２５４
第253図　石器実測図（４７）石皿①……２５５
第254図　石器実測図（４８）石皿②……２５６
第255図　石器実測図（４９）石皿③……２５７
第256図　石器実測図（５０）石皿④……２５８
第257図　石器実測図（５１）石皿⑤……２５９
第258図　石器実測図（５２）石皿⑥……２６０
第259図　石器実測図（５３）砥石・石錘……２６１
第260図　石器実測図（５４）玦状耳飾・軽石製品……２６２
第261図　石器実測図（５５）石製品……２６３
第262図　Ⅳ層検出集石……２６５
第263図　Ⅳ層遺構配置図（追加分）……２６６
第264図　Ⅳ層検出集石出土遺物実測図……２６７
第265図　１～Ⅳ層出土遺物実測図（１）……２６８
第266図　１～Ⅳ層出土遺物実測図（２）……２６９
第267図　１～Ⅳ層出土遺物実測図（３）……２７０
第268図　中近世の遺構配置図・地形図（左）…２７２
第269図　中近世の遺構配置図・地形図（右）…２７３
第270図　１～Ⅳ層出土遺物実測図（４）……２７４
第271図　１～Ⅳ層出土遺物実測図（５）……２７５
第272図　１～Ⅳ層出土遺物実測図（６）……２７６
第273図　１～Ⅳ層出土遺物実測図（７）……２７７
第274図　１～Ⅳ層出土遺物実測図（８）……２７８
第275図　１～Ⅳ層出土遺物実測図（９）……２７９
第276図　１～Ⅳ層出土遺物実測図（１０）……２８０
第277図　鉄製品・鞴の羽口実測図……２８１
第278図　大型土坑１
・大型土坑１出土鉄関連遺物（１）…２８２
第279図　大型土坑１出土鉄関連遺物（２）……２８３
第280図　大型土坑２
・大型土坑２出土鉄関連遺物……２８４
第281図　大型土坑５……２８５
第282図　大型土坑５出土鉄関連遺物（１）……２８６
第283図　大型土坑５出土鉄関連遺物（２）……２８７
第284図　大型土坑５出土鉄関連遺物（３）……２８８
第285図　大型土坑６
・大型土坑６出土鉄関連遺物（１）……２８９
第286図　大型土坑６出土鉄関連遺物（２）……２９０
第287図　大型土坑６出土鉄関連遺物（３）……２９１
第288図　大型土坑６出土鉄関連遺物（４）……２９２
第289図　土坑Ａ－３
・土坑Ａ－３出土鉄関連遺物……２９３
第290図　土坑Ａ－４
・土坑Ａ－４出土鉄関連遺物（１）…２９４
第291図　土坑Ａ－４出土鉄関連遺物（２）……２９５
第292図　中近世集石Ｃ
・中近世集石Ｃ出土鉄関連遺物（１）…２９６
第293図　中近世集石Ｃ出土鉄関連遺物（２）及び大溝出土鉄関連遺物……２９７
第294図　溝１５・１７出土鉄関連遺物……２９８
第295図　溝２１・２２出土鉄関連遺物……２９９
第296図　鉄関連遺物（１）……３００
第297図　鉄関連遺物（２）……３０１
第298図　鉄関連遺物（３）……３０２
第299図　分析データ（１）……３０５
第300図　分析データ（２）……３０８
第301図　分析データ（３）……３０９
第302図　分析データ（４）……３１０
第303図　赤色顔料分析結果……３１６
第304図　上水流遺跡周辺地図……３１７
第305図　上水流遺跡出土赤色粒子ＸＲＤ分析…３１７
第306図　メスバウアー分光法……３１７
第307図　分析結果（１）……３２１
第308図　分析結果（２）……３２２
第309図　鹿児島県下の製鉄遺跡出土砂鉄・精錬滓の化学組成……３３１
第310図　中九州地域の製鉄遺跡（竪形炉）出土砂鉄・精錬滓の化学組成……３３１
第311図　木遺跡出土の石製品と類似する石製品　３３６
第312図　上水流遺跡各時代の石器組成……３４１
第313図　条痕文土器……３４６
第314図　器形分類……３４７
第315図　土器型式（文様形態）と器－割合（上水流）……３４８
第316図　土器型式（文様形態）と器形－点数（上水流）……３４８
第317図　土器型式（文様形態）と条痕－割合（上水流）……３４８
第318図　土器型式（文様形態）と条痕－点数（上水流）……３４８
第319図　花の木遺跡出土の深浦式土器（日本山段階）……３４９

表目次

表１　大型集石一覧……１８
表２　遺構内集石一覧……１９
表３　春日期集石一覧……４２
表４　春日期土坑一覧……４２
表５　ピット一覧……４４
表６　焼土一覧……５０
表７　春日期集中出土土器一覧……６０
表８　Ⅳ層検出集石・焼土一覧……２６５
表９　放射性炭素年代測定結果（１）……３０３
表１０　暦年較正結果……３０３
表１１　測定試料及び処理……３０４
表１２　放射性炭素年代測定結果及び暦年較正結果　３０４
表１３　放射性炭素年代測定結果（２）……３０７
表１４　植物遺体同定表……３１１
表１５　出土遺構と結果……３１１
表１６　炭化材及び炭化草本類の種類……３１１
表１７　分析結果（樹種・年代）……３１１
表１８　樹種同定結果……３１３
表１９　鹿児島県内出土赤色顔料観察表……３１８
表２０　鹿児島県内遺跡出土土器の分析データ……３２２
表２１　供試材の履歴と調査項目……３２４
表２２　供試材の化学組成……３２４
表２３　出土遺物の調査結果のまとめ……３２４
表２４　鹿児島県内出土の耳飾り・垂飾品関係一覧……３３７
表２５　春日期の石器と石材の比率……３４２
表２６　石皿出土遺跡一覧表……３４３
表２７　舶元Ⅰ式とⅡ式の施文の違い……３４４
表２８　鹿児島県内出土の瀬戸内系土器……３４５
表２９　調査結果の概要……３５１
表３０　鉄生産工程の流れ……３５１
表３１　深浦期遺構内土器観察表……３５３
表３２　深浦期遺構内石器観察表……３５３
表３３　深浦期土器観察表（１）……３５４

表34　深浦期土器観察表（2）…… 355
表35　深浦期土器観察表（3）…… 356
表36　深浦期土器観察表（4）…… 357
表37　深浦期土器観察表（5）…… 358
表38　深浦期土器観察表（6）…… 359
表39　深浦期土器観察表（7）…… 360
表40　深浦期土器観察表（8）…… 361
表41　条痕文土器観察表（1）…… 362
表42　条痕文土器観察表（2）…… 363
表43　条痕文土器観察表（3）…… 364
表44　船元式系土器観察表（1）…… 364
表45　船元式系土器観察表（2）…… 365
表46　深浦期石器観察表（1）…… 365
表47　深浦期石器観察表（2）…… 366
表48　春日期遺構内土器観察表…… 367
表49　春日期遺構内石器観察表…… 367
表50　春日式土器観察表（1）…… 367
表51　春日式土器観察表（2）…… 368
表52　春日式土器観察表（3）…… 369
表53　春日式土器観察表（4）…… 370
表54　春日式土器観察表（5）…… 371
表55　春日式土器観察表（6）…… 372
表56　春日式土器観察表（7）…… 373
表57　春日式土器観察表（8）…… 374
表58　春日期石器観察表（1）…… 374
表59　春日期石器観察表（2）…… 375
表60　春日期石器観察表（3）…… 376
表61　春日期石器観察表（4）…… 377
表62　春日期石器観察表（5）…… 378
表63　春日期石器観察表（6）…… 379
表64　春日期石器観察表（7）…… 380
表65　補遺編土器観察表…… 380
表66　補遺編陶磁器観察表（1）…… 380
表67　補遺編陶磁器観察表（2）…… 381
表68　補遺編石器・石製品・その他観察表…… 381
表69　中近世の金属製品…… 382
表70　鉄滓観察表…… 382

写真・図版目次

写真1　石製品…… 66
写真2　ベンガラ付着の磨石・敲石…… 248
写真3　被熱のみられる哺乳類骨片…… 280
写真4　大型土坑6出土の滴下淳…… 291
写真5　ムクロジの種子…… 311
写真6　木材または植物遺体の顕微鏡写真…… 312
写真7　炭化材（1）…… 313
写真8　炭化材（2）…… 314
写真9　上水流遺跡出土赤色粒子SEM像…… 317
写真10　上水流遺跡出土赤色粒子TEM像…… 317
写真11　上水流遺跡出土赤色粒子
TEM－ED分析…… 317
写真12　上水流遺跡周辺採取鉄バクテリアSEM像
…… 317
写真13　砂鉄焼結塊の顕微鏡組織
・EPMA調査結果 …… 325
写真14　炉内滓・炉外流出滓の顕微鏡組織…… 326
写真15　炉外流出滓・含鉄鉄滓の顕微鏡組織…… 328
写真16　羽口（滓付着）
・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織…… 329
写真17　椀形鍛冶滓・鉄製品の顕微鏡組織…… 330
写真18　大型集石（1）…… 338
写真19　大型集石（2）…… 338
写真20　大型集石（3）…… 338
写真21　大型集石（4）…… 338
図版1　深浦期遺構（1）…… 383
図版2　深浦期遺構（2）…… 384
図版3　深浦期遺構（3）…… 385
図版4　春日期遺構（1）…… 386
図版5　春日期遺構（2）…… 387
図版6　春日期遺構（3）…… 388
図版7　春日期遺構（4）…… 389
図版8　春日期遺構（5）…… 390
図版9　春日期遺構（6）…… 391
図版10　春日期遺構（7）…… 392
図版11　春日期遺構（8）…… 393
図版12　春日期遺構（9）…… 394
図版13　春日期遺構（10）…… 395
図版14　春日期遺構（11）…… 396
図版15　春日期遺物出土状況（1）…… 397
図版16　春日期遺物出土状況（2）…… 398
図版17　春日期遺物出土状況（3）・土層断面 … 399
図版18　調査の様子と航空写真…… 400
図版19　深浦期の遺構出土の石皿…… 401
図版20　深浦式土器日木山段階（1）…… 402
図版21　深浦式土器日木山段階（2）…… 403
図版22　深浦式土器日木山段階（3）…… 404
図版23　深浦式土器石峰段階（1）…… 405
図版24　深浦式土器石峰段階（2）…… 406
図版25　深浦式土器石峰段階（3）…… 407
図版26　深浦式土器石峰段階（4）…… 408
図版27　深浦式土器石峰段階（5）…… 409
図版28　深浦式土器石峰段階（6）・鞍谷段階 … 410
図版29　条痕文土器（1）…… 411
図版30　条痕文土器（2）…… 412
図版31　条痕文土器（3）…… 413
図版32　条痕文土器（4）…… 414
図版33　鷹島・船元系土器…… 415
図版34　深浦期の石器（1）
石鏃・石匙・二次加工剥片・楔形石器… 416
図版35　深浦期の石器（2）石核…… 417
図版36　深浦期の石器（3）磨製石斧…… 418
図版37　深浦期の石器（4）磨石…… 419
図版38　深浦期の石器（5）石皿…… 420
図版39　春日期の大型土坑5出土土器…… 421
図版40　春日期の遺構出土土器…… 422
図版41　春日式土器前谷段階（1）…… 423
図版42　春日式土器前谷段階（2）…… 424
図版43　春日式土器前谷段階（3）…… 425
図版44　春日式土器前谷段階（4）…… 426
図版45　春日式土器前谷段階（5）…… 427
図版46　春日式土器前谷段階（6）…… 428
図版47　春日式土器前谷段階（7）…… 429
図版48　春日式土器前谷段階（8）…… 430
図版49　春日式土器前谷段階（9）
・轟木ヶ迫段階…… 431
図版50　春日式土器南宮鳥段階…… 432
図版51　春日期の石器（1）石鏃…… 433
図版52　春日期の石器（2）石匙①…… 434
図版53　春日期の石器（3）石匙②…… 435
図版54　春日期の石器（4）磨製石斧①…… 436
図版55　春日期の石器（5）磨製石斧②…… 437
図版56　春日期の石器（6）石核 …… 438
図版57　春日期の石器（7）スクレイパー
・礫器…… 439
図版58　春日期の石器（8）磨石敲石…… 440
図版59　春日期の石器（10）石製品…… 441
図版60　中世～近世の遺物…… 442

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護と活用を図るため，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて各開発関係機関との間で協議し，諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき，鹿児島県土木部河川課（以下，県土木部）は，中小河川改修工事（万之瀬川）の日置郡金峰町内（現南さつま市）における事業計画実施に先立って，対象地内における埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育委員会文化課（現文化財課，以下県文化財課）に照会した。これを受けて県文化財課，金峰町教育委員会が平成５年度に分布調査を実施したところ，事業区域内に万之瀬川川底遺跡，松ヶ鼻遺跡，持躰松遺跡，渡畑遺跡，芝原遺跡，上水流遺跡の６遺跡の所在が判明した。この結果を受けて，県土木部・県文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下，県理文センター）の３者で協議した結果，対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとし，上水流遺跡の調査は金峰町教育委員会が担当した。

確認調査は，平成７年８月１日から12月15日の期間に実施した。その結果，予定地において約13,000㎡の範囲に遺跡が残存していることが確認された。この分についての報告書は，金峰町教育委員会で刊行済である。

これを受けて，12年度（新築堤防部分）・15年度（旧堤防と新築堤防の間）・16～17年度（新築堤防部分以外の部分・旧堤防部分）の本調査を実施した。

なお，平成16年度には調査対象範囲についての協議を県土木部・県文化財課・県理文センターの３者で行った。その結果，調査範囲の拡大が判明し，調査期間は平成17年度の上半期までとした。

整理作業は，平成17年度の発掘調査終了後に取りかかり，平成21年度まで実施した。平成20年度までの成果として，『上水流遺跡１（縄文時代中期後半～弥生時代編）』『上水流遺跡２（古墳時代～中近世遺構編）』『上水流遺跡３（縄文時代前期編・中近世遺物編）』を刊行している。今回の『上水流遺跡４』で上水流遺跡の全ての報告が完結する。

第２節　調査の組織

１　平成２１年度

起因事業主体　鹿児島県土木部河川課
（鹿児島地域振興局）
作成主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　山下　古美
作成企画　次長兼総務課長　齊藤　守重
次長　青崎　和憲
調査第一課長　中村　耕治
主任文化財主事兼
調査第一課第二調査係長
宮田　栄二
作成担当　文化財主事　溝口　学
文化財主事　小林　晋也
文化財主事　日高　勝博
文化財研究員　上床　真
事務担当　主査　高崎　智博
整理指導・助言　財団法人滋賀県文化財保護協会
主任　瀬口　眞司
鹿児島県歴史資料センター黎明館主任学芸専門員兼
学芸課企画資料係長　東　和幸
志布志市教育委員会
主事　相美伊久雄
企画担当　文化財主事　前迫　亮一
文化財主事　黒川　忠広

２　報告書作成指導委員会
平成21年12月４日　次長ほか６名

３　報告書作成検討委員会
平成21年12月11日　所長ほか11名

第３節　調査の経緯

調査の経緯については，平成18年度刊行した『上水流遺跡１』に掲載済みであるので，今回は割愛した。

第４節　整理作業の概要

上水流遺跡の整理作業は，平成12年度から平成17年度の発掘調査中に，遺物の水洗・注記作業を並行して行い，本格的な整理作業を平成17年度から実施した。作業は，県立埋蔵文化財センターで，他の万之瀬川流域の遺跡群と同時進行の形で行った。刊行については，『縄文時代中期後半～弥生時代編』，『古墳時代～中近世遺構編』，『縄文時代前期・中近世遺物編』，『縄文時代前期末～縄文時代中期前半・補遺編』の４分冊を年次毎に計画的に刊行することとした。今回はその４分冊目の『縄文時代前期末～縄文時代中期前半・補遺編』であり，本報告書をもって上水流遺跡の報告書が完結することになる。

第２章　層位と調査の概要

第１節　層位（第３図～５図）

上水流遺跡は，万之瀬川の中流の右岸の自然堤防上に立地する遺跡である。本遺跡の地層は，河川堆積物及びそれらの上に堆積する腐植土である。砂質の土壌については，「砂質土」と「砂」に分類した。河川による氾濫堆積層などを含んでいるので，遺跡内において必ずしも安定している状況ではなかった。例えば，Ⅴａ層では同一包含層の中で黄褐色砂質土層（粘質土）と灰白色砂層とが何層にもわたって互い違いに堆積している様子が観察される地点もみられた。また，他の堆積土（砂）についても，ほとんどが数回にわたるとみられる沖積土（砂）であるので下に示す層位と若干異なる様相を呈する地点もある。火山灰に関しては，Ⅲｂ層中に開聞岳起源とされる「灰ゴラ」（南九州市頴娃町水成川での^{14}Ｃ年代分析結果では3620 ± 140年ＢＰ）がみられるほかには，明確な火山灰層はみられない。なお，この灰ゴラに関しては晩期土器の編年に関わる重要な鍵層となる。しかし，安定的には堆積しておらず，土器型式を上下で区別するだけの様相ではなかった。いずれにせよ，灰ゴラが万之瀬川下流域まで降灰していたことが判明した点は今後の調査を考える上で重要な事項となる。

今回の報告書では，Ⅴ層（Ⅴａ層・Ⅴｂ層）が対象となる。ただし，一部についてはⅣ層及びⅥ層にも入り込んでいる遺物もみられたが，これらの遺物についても今回の報告の対象とした。層位は以下の通りである。

Ⅰ	層	水田耕作土及び近世・近代の盛土 （旧堤防の造成盛土も含む）	
Ⅱ	層	暗褐色腐植土	古代～近世
Ⅲａ′	層	明黄褐色土	弥生時代～古墳時代
Ⅲａ	層	黄褐色土	縄文時代晩期
Ⅲｂ	層	暗茶褐色土 （ブロック状の灰ゴラを含む。）	縄文時代晩期
Ⅳ	層	赤（黄）褐色土	縄文時代中期後半～後期
Ⅴａ	層	黄褐色砂質土 （粘質土～灰色砂との互層となる地点あり）	縄文時代中期前半
Ⅴｂ	層	黄白色砂質土	縄文時代前期後半 ～縄文時代中期初頭
Ⅵ	層	淡白色砂質土	縄文時代前期

第２節　遺物の分類について

１　土器

土器は，各時代にわたり幅広い時代のものが出土している。報告書作成では，これらを時代毎に複数年計画で刊行することとしたため，本来は全体を通して類別作業を行うべきところが分断される形となってしまっている。そこで，便宜上類別の上に以下のように『群』を設定した。

１群：縄文時代前期から中期前半までの土器
２群：縄文時代中期後半から後期終末までの土器
３群：縄文時代晩期から弥生時代後期までの土器
４群：弥生時代終末から古墳時代までの土器

今回報告する分は，後半部分にあたる縄文時代前期末～中期前半であるので１群の後半部分にあたる。ここでは，編集の都合上１－２群とした。さらに今回報告する土器については，Ⅴｂ層とⅤａ層のものに大別されるため，これらをそれぞれ１－２Ａ群と１－２Ｂ群とした。各群内の土器の特徴に関しては，各々の章で紹介していきたい。

２　石器

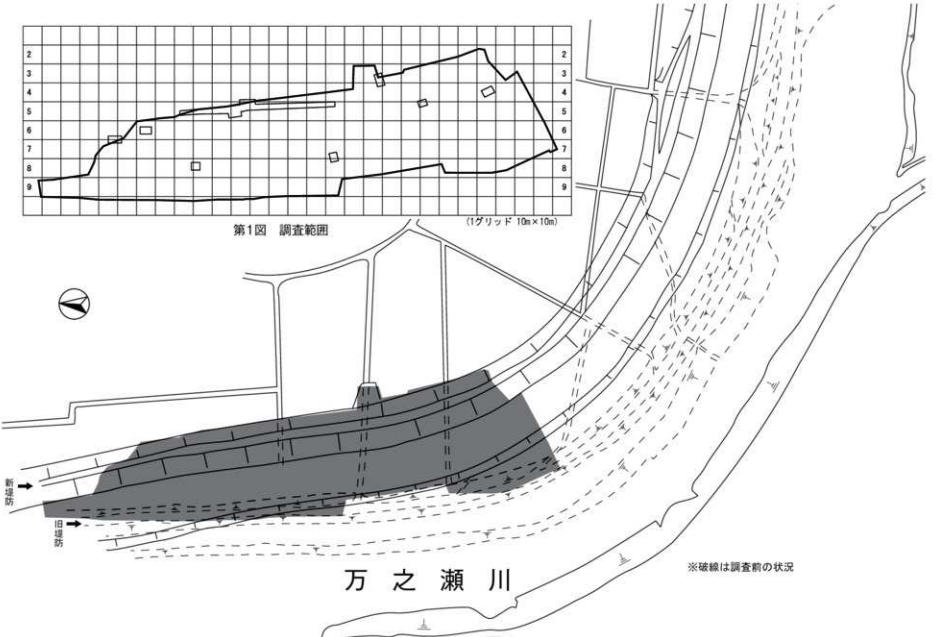
本遺跡では，縄文時代前期末～中期前半に比定されるⅤ層（Ⅴａ層及びⅤｂ層）から，土器同様石器類が多数出土した。この中で石器として認識出来た点数は2,945点である。主な器種は，石鏃，石匙，スクレイパー，二次加工剥片，楔形石器，石錐，石核，磨製石斧，打製石斧，礫器類，磨石・敲石・凹石類，石錘，石皿・台石類，砥石，石製品などで，多岐にわたっている。剥片類は24,304点である。

石器の石材及び器種については『上水流遺跡１』において示した分類表を基準とした。

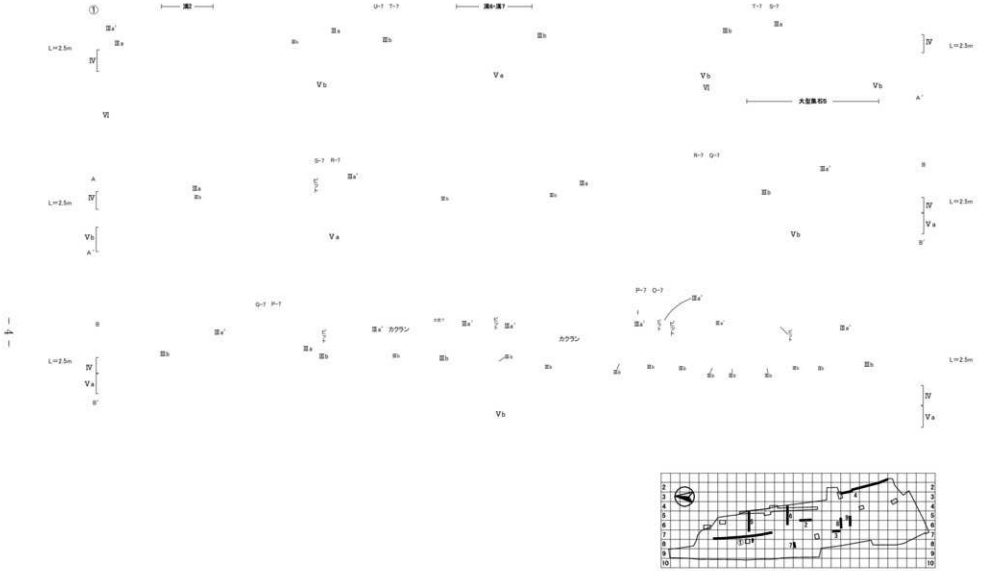
石材分類表（表２）

石材に関しては，石材産地を推定させる黒曜石及び安山岩，石材中に圧倒的な量を示し質感や風化の程度など個体差が顕著な頁岩については，石材の細分化を試み，以下のように分類した。他に，頁岩や砂岩などにホルンフェルス化した石材も散見されたが，変化が顕著であるもののみホルンフェルスに含めた。頁岩については硅質化が顕著な石材も，頁岩中に含めている。

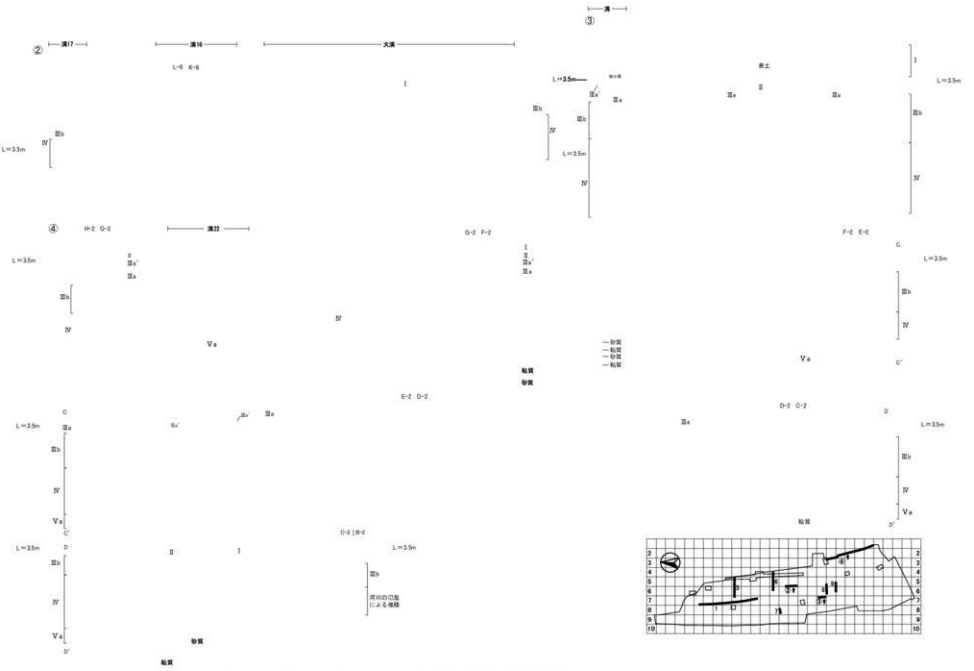
第1図　調査範囲



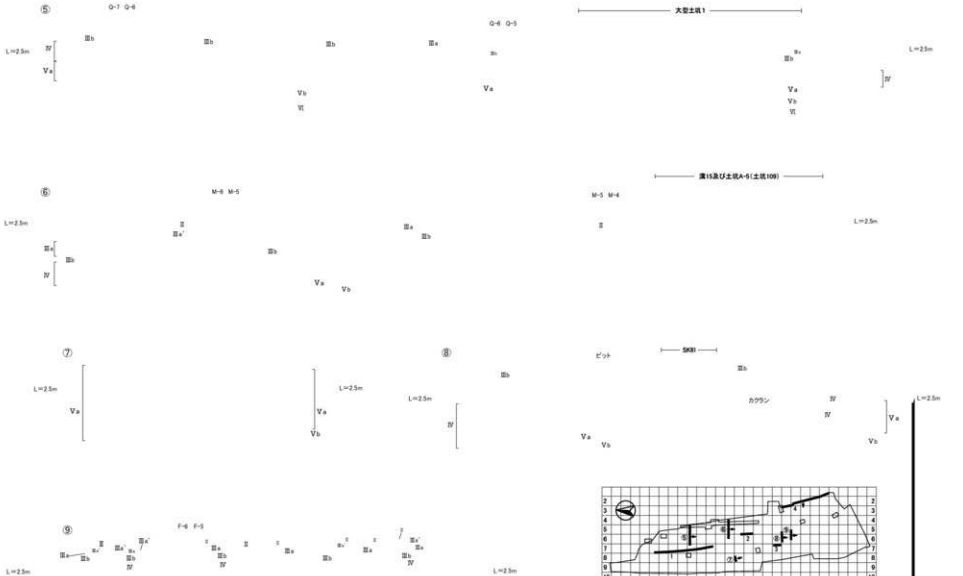
第2図　調査後の状況



第3図　西側土層断面図(1)



第４図　西側土層断面図(2)



第５図　北側土層断面図

表１　石材分類表

器種	分類	概　　要
黒曜石（OB）	Ⅰ	不純物を多く含み，漆黒で光りを通さないものを包括した。薩摩川内市樋脇町上牛鼻，いちき串木野市平木場，いちき串木野市宇都等の原産地資料に類似する。
	Ⅱ	光を通し，不純物を大量に含む物を総括した。 鹿児島市の三船，伊佐市の日東，五女木，錦江町の長谷等の原産地資料に類以するが，細分を行うことはできなかった。
	Ⅲ	飴色～黒色を基調とし，不純物をほとんど含まない良質のものを包括した。えびの市の桑ノ木津留，伊佐市の上青木の原産地資料や自然面が磨りガラス状を呈する霧島系の資料に類以するが細分を行うことはできなかった。
	Ⅳ	黒色で不純物を全く含まない良質のものを包括した。佐賀県伊万里市腰岳産の資料に類以するが，一部長崎県佐世保市針尾島周辺で産出する黒色系の物も含まれる。
	Ⅴ	青灰色で不純物の少ない物を包括した。針尾中町や長崎県佐世保市東浜，淀姫等西北九州の原産地資料に類以するが，原産地不明の一群も含める。
	Ⅵ	不純物をあまり含まない灰色の物を包括した。椎葉川周辺の物を原産地資料とするが原産地不明の一群も含んでいる。
	Ⅶ	原産地不明な物を包括した。
安山岩	Ⅰa	黒色を呈し，砂質感が強い。斜長石が殆ど含まれない。西北九州産であると考えられる。
	Ⅰb	Ⅰaが風化したもの。
	Ⅱ	西北九州産か？斜長石が殆ど含まれず，硅質の光沢がある。
	Ⅲa	上牛鼻産と考えられる。斜長石が密に含まれる。黒色もしくは青灰色を呈し，光沢感が強い。風化していない，もしくは，弱い風化が見られる。
	Ⅲb	Ⅲaに類以するが，風化が強い。
	Ⅳ	上記以外の一般的な安山岩。花崗岩との区別においては，帯磁率を基準とし20×10-1　ＳＩ以上を本類に含めた。
凝灰岩		火山灰や火山砂などが堆積し，凝固したもの。親指大の礫を含む凝灰角礫岩を含めた。
花崗岩		御影石とも呼称。石英・カリ長石・雲母・角閃石・輝石などを主成分鉱物として含む。安山岩との区別は，帯磁率において2×10-1　ＳＩの石材を本類に含めた。
蛇紋岩等		蛇紋岩はぬめっとした肌触りを有し，光沢がある。石材不明資料中，蛇紋岩に類以した資料を含めた。
頁岩	Ⅰ	風化が顕著で，白色or乳白を呈する。
	Ⅱ	風化が見られる。層状剥離や白筋が見られるものが多い。
	Ⅲ	Ⅱに類以するが，風化がない，もしくは弱い。
	Ⅳ	風化が全くない。光沢があり，漆黒色を呈する。
	Ⅴ	風化が全くない。光沢があり，黒色や黄橙色，白色，乳白色，青灰色などを呈する。硅質の頁岩。
	Ⅵ	粘板岩に類以。薄茶色を呈し，剥離が強い。シルト質の頁岩。
	Ⅶ	さびが付着。黒色を呈し，剥離が強い。
	Ⅷ	硬質頁岩の一種で，長石が粒状に多量に含まれる。金峰山が産地と考えられる。
砂岩		砂粒・石英粒が集合して固まった堆積岩の一種。触ると粉粒感が強いものを本類に含めた。
粘板岩		極微小な砂粒（泥粒）が集合して固まった堆積岩の一種。頁岩に似て層状を成すが，薄茶色～茶黄色を呈し，指で触ると粉が指頭に残るものを本類に含めた。
ホルンフェルス		硬質化が著しく，鉱物が相累なって帯状もしくは斑状を成すもの。ただし，硬質化（もしくは，硅質化）した頁岩は本類に含めず，頁岩に分類した。
めのう系		めのう・玉髄・石英・タンパク石・鉄石英・水晶・石英斑石などを総称して，本類に含めた。
チャート		珪酸を含み光沢感を有する。灰白色を呈する。

表２　石器分類表（１）

器種		分類	概　　要
剥片石器	石鏃		剥片を素材として両側縁部に両面から押圧剥離を施した小型から中型の三角形状の石器群を石鏃とした。
		Ⅰ	全体の形状が正三角形状を呈するもの。
		Ⅱ	全体の形状が二等辺三角形状を呈するもの。
		Ⅲ	以上に含まれないものを一括した。未製品や欠損品などを含む。
	石匙		剥片を素材として刃部及びつまみ部を作出し，つまみ部に着紐して携帯していたと考えられる石器群を石匙とした。
		Ⅰ	横型で両面に調整を施すもの。
		Ⅱ	縦型で，両側縁，両面に調整を施すもの。
		Ⅲ	以上のいずれにも含まれないもの。
	スクレイパー		玉髄系石材を使用した資料中，剥片の縁辺部などに二次調整を行って刃部整形を施したものをスクレイパーとした。頁岩製であっても小素材を利用し刃部調整が丁寧なものは本類に含めている。
		Ⅰ	素材剥片の両側縁部を中心的に刃部調整が施され，柳葉状の器形を呈する。
		Ⅱ	素材剥片の下縁部を中心的に刃部調整が施され，横長長楕円状の器形を呈する。
		Ⅲ	長方形の素材剥片の接しない２側縁部に刃部調整される。
		Ⅳ	上記以外のスクレイパーである。母指状を呈するものも含まれる。
	二次加工石器（二次加工剥片・礫器）		玉髄系石材を使用した資料中，剥片の縁辺部などに二次調整を行うが，刃部整形が認められないものを二次加工剥片とし，刃部整形が認められるもので一定の大きさを有する頁岩製資料は礫器類に含めた。
	鋸歯加工石器		剥片の縁辺部の一部に鋸歯状の加工を施すものを一括した。
石核			原石から石器製品作出のための剥片を採種した残存石材を本類に分類した。なお，剥離痕に顕著な使用痕等が確認できる資料については，礫器類に含めた。
		Ⅰa	小礫を素材とする。分割により平坦な打面を形成した後，同一打面から表裏２面を剥いだもの。
		Ⅰb	周辺から中心に向かって剥ぐもの。
		Ⅰc	前の作業面を打面とする打面転移が見られる。
		Ⅱa	小礫を素材とする。分割により平坦な打面を形成した後，同一打面から１面のみを剥いだもの。
		Ⅱb	周辺から中心に向かって剥ぐもの。
		Ⅱc	前の作業面を打面とする打面転移がみられる。
		Ⅲa	礫を素材とする。分割により平坦な打面を形成した後，同一打面から表裏２面を剥いだもの。
		Ⅲb	周辺から中心に向かって剥ぐもの。
		Ⅲc	前の作業面を打面とする打面転移がみられる。
		Ⅳa	礫を素材とする。分割により平坦な打面を形成した後，同一打面から１面のみを剥いだもの。
		Ⅳb	周辺から中心に向かって剥ぐもの。
		Ⅳc	前の作業面を打面とする打面転移がみられる。
剥片石器	石錐	Ⅰ	大きなつまみ部に対し，小振りな尖端部を作出整形し，錐部とする。
		Ⅱ	つまみ部と棒状の錐部を有し，主要剥離面や礫皮面をつまみ部とする。
		Ⅲ	その他のものを一括した。錐部に粗い整形を施して，かろうじて石錐となるものがある。
			つまみ部を有するⅡ類は，つまみ部が指でつまめる大きさを有しており，直接手に持って使用した可能性が高いと考える。
	楔形石器		ピエス・エスキーユとも称される。表面観は方形で，上縁端部及び下縁端部は直線的で平行に位置する。刃部断面観が凸レンズ状に鋭角をなし，基部には敲打面を有する。本石器を木の実や骨などにあて，敲石等で敲いて割るために使用したと想定される。

表３　石器分類表（２）

器種		分類	概　　要
剥片石器	磨製石斧	Ⅰ	器厚が厚く，重量感がある。刃部が蛤の形態を有するもののが多い。蛤刃形石斧が多い。
		Ⅱ	Ⅰより小型で，器厚が薄手。長方形状を呈する。定格式石斧が多い。
		Ⅲ	比較的小型で細長く加工されたものである。ノミ形石器と呼称されるタイプである。
		Ⅳ	分類不可資料及び未製品。刃部のみや基部のみで全形が明らかでないものも本類に含めた。また，一見磨製石斧にみえるものも未製品として本類に含めた。
	礫器類	Ⅰ	素材剥片の両側縁部を中心的に刃部調整が施され，柳葉状の器形を呈する。
		Ⅱ	素材剥片の下縁部を中心的に刃部調整が施され，横長長楕円（長方形）状の器形を呈する。
		Ⅲ	素材剥片の一辺に刃部調整が施され，器形は三角形状を呈する。刃部調整は直線的である。
		Ⅳ	長方形状の素材剥片の接しない二側縁部に刃部調整が施される。
		Ⅴ	上記以外の礫器類。
	側面に線状使用痕のある石器	側面に長軸に直交する線状使用痕のあるものを一括した。現段階においては，器種の定義がなされていない石器で，用途も不明である。	
	磨石敲石類	Ⅰ	棒状の礫を素材とするものと不定形状を呈するもの。用途が敲石と考えられるものである。
		Ⅱa	比較的大きな礫を素材とする。全面的もしくは部分的に磨面を有し，敲打痕は不明瞭である。
		Ⅱb	全面的もしくは部分的に磨面を有し平坦面や側縁に敲打痕が見られる。
		Ⅲa	比較的小さめの礫を素材とする。全面的もしくは部分的に磨面のみを有し，敲打痕は不明瞭である。
		Ⅲb	全面的もしくは部分的に磨面を有し，平坦面や側縁に敲打痕が見られる。
	石皿類	石皿は大礫を利用し，磨面・凹面を有する。磨石とセット関係にあり，木の実を磨り潰したりするためと考えられる。	
		Ⅰa	加工により磨面が凹まないもので，川原などにある転石を利用したもので，円形や楕円形の平面形を呈するもの。
		Ⅰb	板状の角礫を用い，多角形の平面形を呈するもの。
		Ⅱa	縁を残して中央が断面で弓状に凹むもの。
		Ⅱb	板状の角礫を用い，多角形の平面形を呈し，縁を残して中央が断面で弓状に凹むもの。
		Ⅲ	上記以外の石皿類。
	砥石	砂岩質の礫素材を利用し，主として長軸方向に削痕が縦走し，深い凹面を有することが多い。	
	軽石製品	軽石を素材とする。穿孔や凹み等加工痕が残される。	
	石錘	Ⅰ	左右１対の抉り部を有する。抉り部以外の側面に敲打痕等は確認できない。
		Ⅱ	抉りは不明瞭で，上下側面に敲打痕を有する。磨石を二次利用した可能性がある。
石製品		上記のいずれにも属さないものを一括している。玦状耳飾りや垂飾品のほかに，用途不明のものを含む。	

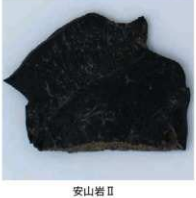
ob Ⅰ　　ob Ⅱ

ob Ⅲ　　ob Ⅳ

ob Ⅴ　　ob Ⅵ

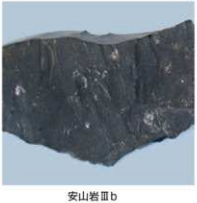
安山岩Ⅰa

安山岩Ⅰb



安山岩Ⅱ

安山岩Ⅲa



安山岩Ⅲb

写真１　石材分類写真（1）

頁岩　Ⅰ

頁岩　Ⅱ

頁岩　Ⅲ

頁岩　Ⅳ

頁岩　Ⅴ

頁岩　Ⅵ

頁岩　Ⅶ

頁岩　Ⅷ

写真２　石材分類写真（2）

第３章　縄文時代前期末～中期初頭の調査

第１節　調査の概要

縄文時代前期末～中期初頭の調査対象となる層位は，Ｖｂ層であるが，該当する遺物は一部Ｖａ層およびⅥ層でも出土している。最も遺物量が多いのはＶｂ層である。この層は，金峰町教育委員会が行った確認調査時の７トレンチⅣ層に該当する。部分的に不明瞭な地点もあるが，概ね川に向けて落ち込むような堆積状況が見られた。ただし，Ｏ～Ｒ－４・５区の周辺では西側（川側）から中央へ向かって一旦は若干上がってやや平坦になり，さらに東側に向かってわずかではあるが下がるような地形を呈している。これは，まさに調査区が川～自然堤防～後背湿地を横断していたことを示すものと考えられる。

また，今回Ｖｂ層とした遺物包含層は，平成 12 年度の調査において，確認調査時の９トレンチの調査結果を参考としてⅦｂ層としていたものを含んでいる。この点については，平成 16 年度と 17 年度の調査中の検証とその後の整理作業によってその整合性を検討した。

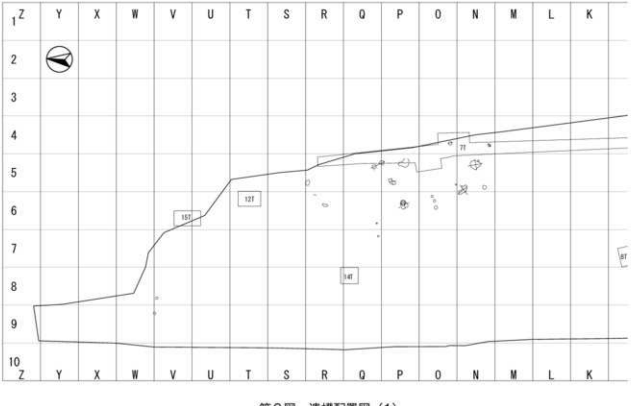
包含層での遺物出土状況は，Ｖｂ層を中心に遺物の出土が見られるが，破片が多い。これらに関しては，区一括で取り上げを行い，比較的大きめの破片に関して番号を付けて取り上げを実施した。

なお，報告に際しては，条痕文土器・船元式土器段階も本章で取り扱う。

遺構検出については，Ｖｂ層で行った。その結果，集石・土坑・焼土遺構をはじめとする遺構が検出できた。特に焼土遺構は，調査区でも中央部付近（Ｎ～Ｒ－４～６区）に集中する傾向が見られる。個別の遺構についての調査方法は，各遺構ごとで紹介する。

包含層の概要としては，いわゆる深浦式土器の中でも日本山段階から石峰段階にかけての資料が多く，鞍谷段階の遺物は少ない。平面的な広がりとしては，Ｍ～Ｕ区にかけて集中する。

この中には，多くの完形品が単体で出土している。これらの多くは，遺構を伴わずに土器単独で出土している。これらの完形品が，Ｍ～Ｕ区の破片密集といった出土状況とどのような関係にあるのか，今回の調査では明らかにすることはできなかった。



第６図　遺構配置図（1）

第２節　遺構

１　集石

９基が検出された。これら集石の検出状況は，数十個の礫が密にまとまるようなしっかりとした集石よりも，全体的に礫が散在した集石が多い。

・集石１（第10図・第13図）

Ｎ－４区で検出された。礫総数27点からなる。掘り込みは確認出来なかった。礫もまばらである。被熱痕も確認出来なかった。集石内には２点の土器片が混入していたが，ここでは１点について図化した。

１はＩａ－２類（深浦式日木山段階）に該当する土器である。縦位に貝殻腹縁による鋸歯文を施すものである。

・集石２（第10図）

Ｎ－５区で検出された。礫総数173点からなる。大型の角礫（材質は安山岩・凝灰岩）が主体である。よく熱を受けており、多くが赤黒く変色している。破砕礫も多い。炭化物は小粒（１～３mm）が散在する程度である。

遺構内からは黒曜石片や軽石製品が出土したが，実測可能なものは確認されなかった。

・集石３（第10図）

Ｎ－５区で検出された。礫総数13点からなるもので，礫の集中も粗な小型のものである。検出面において暗茶褐色を呈する焼土範囲が確認されたが，掘り込みは確認されなかった。

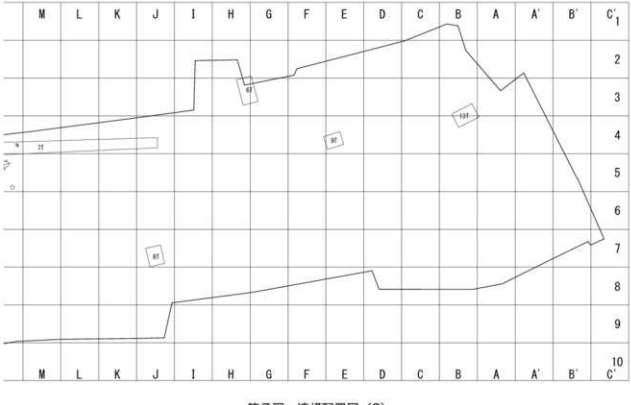
・集石４（第11図・第13図））

Ｎ－５・６区で検出された。礫総数152点からなる。掘り込みはあるが，礫は比較的まばらである。数点の黒曜石片が礫とともに混入していた。礫はほぼ検出面に平面的に広がり，掘り込み部分内ではほとんど礫は確認されなかった。ただし，炭化物については掘り込み内から集中して検出されている。

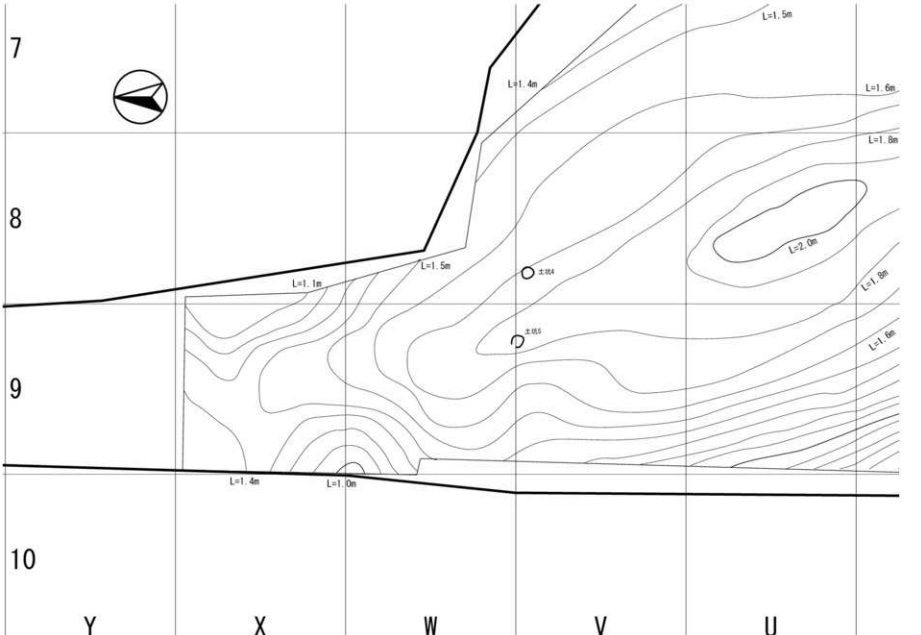
遺構内からは土器片（２～８）が出土した。３は口縁部に二条の刻み目のある突帯を巡らすものである。胴部には，突帯を「米」の字状に貼り付け，斜位に平行沈線を施すものである。Ｉ類土器のｂ類（深浦式土器石峰段階）に該当するものである。６は円形浮文に類似した文様で，刻み目の突帯を環状に貼り付けるものである。

・集石５（第11図・第13図）

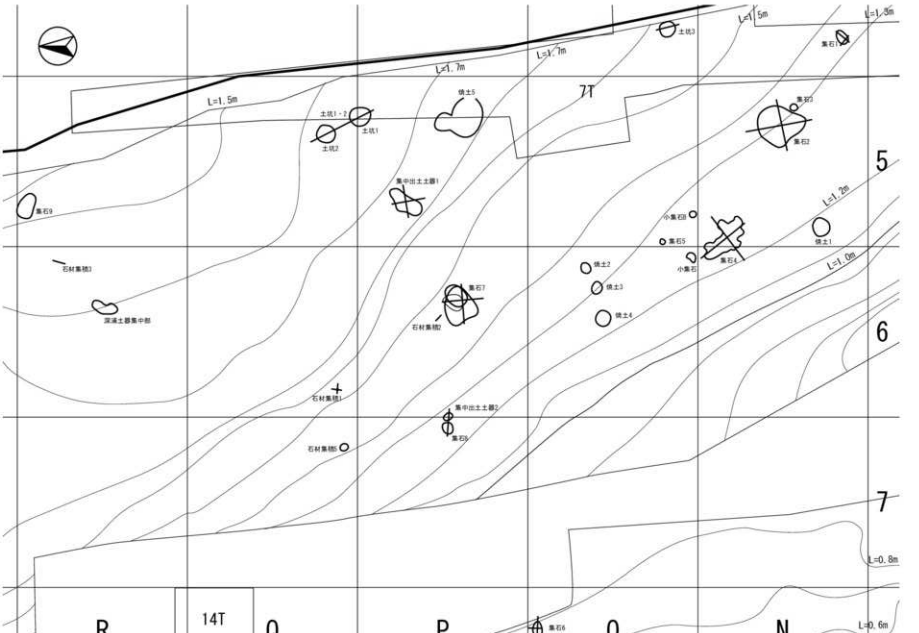
Ｏ－５区で検出された。小型のものである。図化の途中で，湧水に伴う土砂の流入により作図が不可能となった。そのため図面は大まかなものである。図化した礫の総数は22点である。遺構内から土器片と石器（９～12）が出土した。９はＩｃ類（深浦式石峰段階）に該当する土器で，口縁部付近には横位に，その下には斜位に刻み目突帯が施されるものである。10はＩｅ類（深浦式石峰段階）に該当する土器で縦位の波状沈線を施すものである。11は磨製石斧の未製品とみられるもので，ホルンフェルス製である。一見，打製石斧にも似た印象



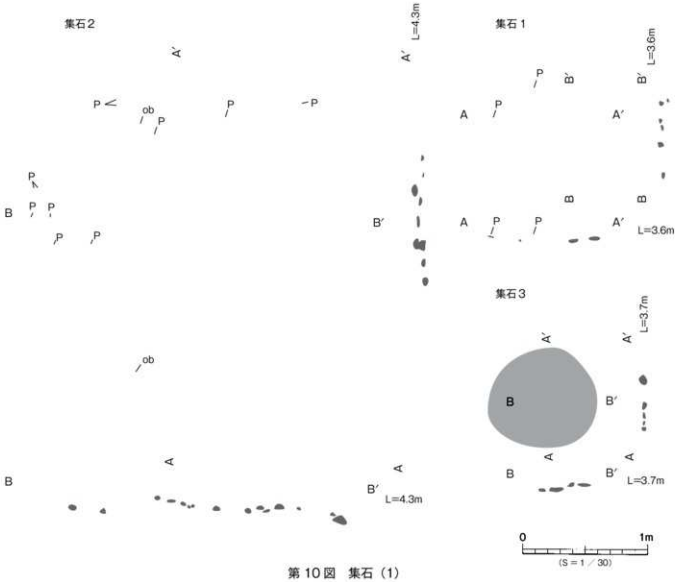
第７図　遺構配置図（2）



第8図　U~Y区の遺構配置図



第9図　N～R区の遺構配置図



第10図　集石（1）

を持っているが，使用痕は観察されなかった。12は磨石・敲石類である。下面には敲打痕を有する。

・集石6（第11図）

O－8区で検出された。礫総数29点からなる。構成礫は角礫が主体で、礫のまとまりは弱い。掘り込みについては確認できなかった。13は磨石・敲石類である。下面には敲打痕を有する。

・集石7（第12図）

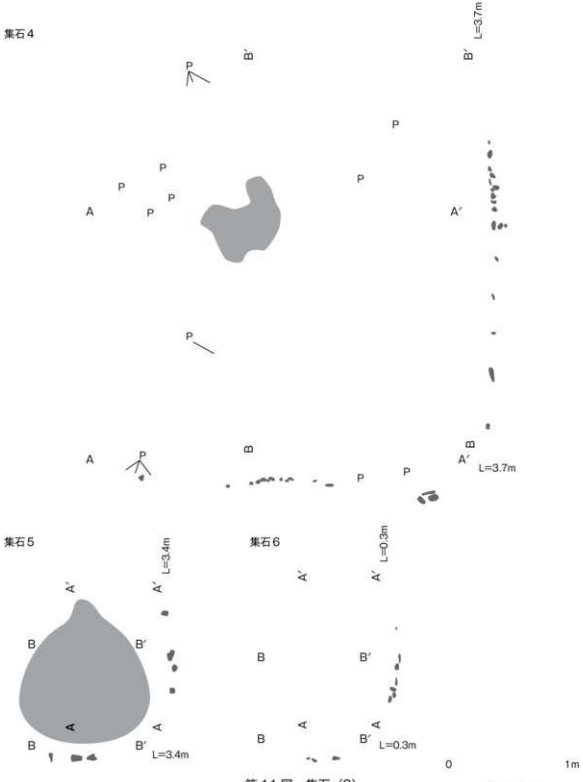
P－6区で検出された。礫総数145点からなる。大型の角礫(材質は安山岩・凝灰岩)が主体である。隣接して黒曜石原石の集積が存在する。14は磨石・敲石類である。下面及び側面に敲打痕を有する。15は中央に穿孔のある軽石製品で，垂飾品の可能性がある。断面形状は左右非対称となる整っていない台形を呈しており仕上げに関しても雑な印象を受ける。

・集石8（第12図）

P－6・7区で検出された。礫総数75点からなる。この時期としては比較的礫がまとまった集石である。大型の礫は全て熱を受け赤化し，割れやひびが見られる。隣接して一個体分と考えられる条痕文土器（集中出土土器2）が集中して出土しているが，断面図では土器と少し距離を置いて，上のレベルに集石の構成礫の可能性のある礫がみられるので土器の方が時期が若干古い可能性もある。時期については検討を要するものである。埋土には小粒（1～2㎜）の炭化物が散在する程度で，掘り込みの底部には黒色の染み込みがみられた。

・集石9（第12図・第13図）

R－5・6区で検出された。礫総数66点からなる。構成礫は角礫が主体で、礫のまとまりは弱い。掘り込みについては確認できなかった。



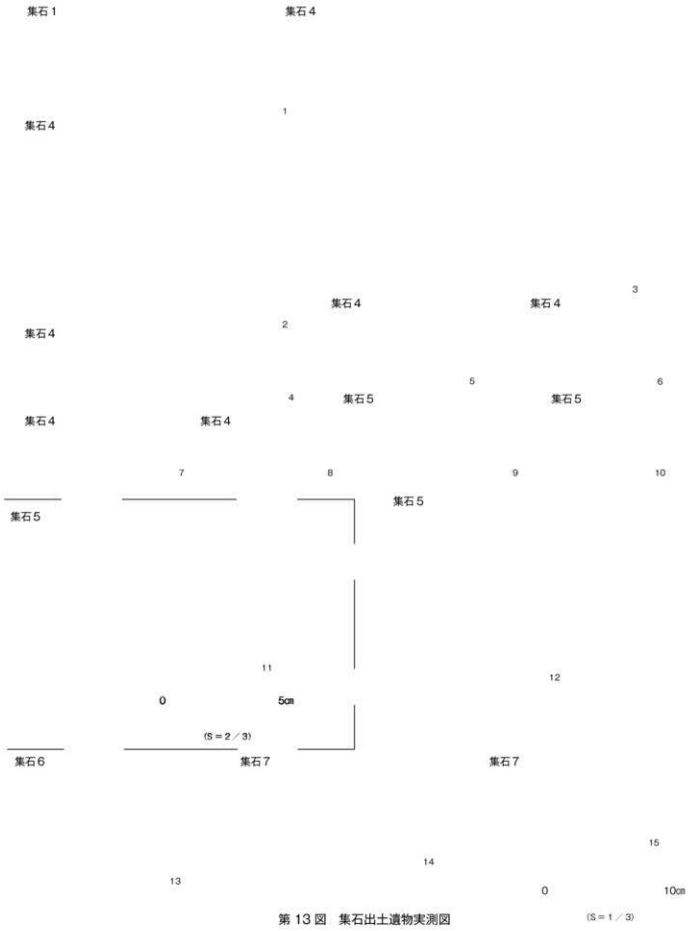
第 11 図　集石（2）

(S = 1 ／ 30)

表４　深浦期集石一覧

挿図番号	レイアウトNO. 区	レイアウトNO. 番号	検出時遺構番号	大きさ（cm） 長径	大きさ（cm） 短径	備　　考
10	N-4	集石１	集石	90	85	
10	N-5	集石２	深浦集石１	280	250	集石3と隣接
10	N-5	集石３	深浦集石２	60	58	集石2と隣接
11	N-5・6	集石４	大集石	280	270	
11	O-5	集石５	小集石	225	200	
11	O-8	集石６	2647	78	52	
12	P-6	集石７	中期集石５	150	120	
12	P-6・7	集石８	中期集石４	75	60	
12	R-5・6	集石９	中期集石６	155	125	

第12図　集石（3）



第 13 図　集石出土遺物実測図

2　土坑

5基が検出された。以下に詳述する。

・土坑1（第14図・第15図）

P・Q－5区で検出された。平面形は円形を呈する。遺構内からは土器片（17・18）・石鏃（21）・二次加工剥片（22）・黒曜石の石核（23）・磨製石斧（25）が出土した。17の土器は，外面に刻み目を有する突帯を環状に貼り付けるものである。21の石鏃の石材は黒曜石Ⅴに分類される。

・土坑2（第14図・第15図）

Q－5区において，土坑1と約1m離れて検出された。東側が確認調査時の7トレンチに切られる。この土坑も土坑1と同様に平面形は円形を呈しており，規模と形状がきわめて類似するものである。

遺構内からは，石鏃未製品（24）・石核（26）が出土している。24の石材は黒曜石Ⅰで，26は黒曜石Ⅴに分類される。この他に，滑石片（写真4）が出土しているが，外面には焦げ目が付着し，内面には鉄器のような鋭い道具を用いたとみられるケズリが観察される。7トレンチ内の埋め戻し土からの混入の可能性もあるので当該時期のものでなく中世の滑石製石鍋の可能性も指摘される。

・土坑3（第14図・第15図）

O－4区の調査区東側端で検出された。平面形は楕円形を呈する。遺構内埋土は，やや黄色がかった暗褐色土の単一土である。

遺構内から，土器片（19･20）・磨製石斧の基部片（27）が出土している。20の土器は口縁部の内外面に貝殻腹縁による相交弧文が施文される。

・土坑4（第16図・第17図）

V－8区で検出された。平面形は70ｃｍ×70ｃｍの円形を呈する。埋土は明赤褐色を呈する。8点の遺物が出土しているが，ここでは土器3点について図示した。28･29についてはⅠｄ類（深浦式石峰段階）に該当する。30は先尖の底部である。これらは一個体の可能性を有するものである。

・土坑5（第16図・第17図）

V・W－9区で検出された。平面形は77ｃｍ×69ｃｍの円形を呈する。深さは19ｃｍであった。ピット（遺構3050）に切られる。埋土は赤みをおびており，少々の炭化物を含む。5点の遺物が出土したが，ここでは1点のみ図示した。31はⅡ類（条痕文）土器の胴部片である。

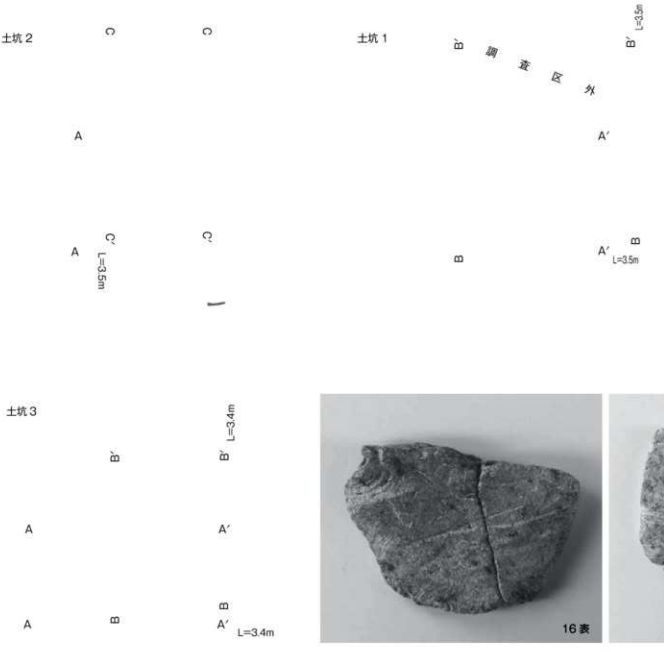
3　焼土・炭化物集中域

N－5区とP－5区で1箇所ずつ，O－6区では3箇所の焼土域を確認した。この上層にあたるⅤa層では広範囲に焼土域を確認しているので，その染み込みかとも考えられたが，周辺を精査した結果から直接には関係しない可能性が高いと判断した。また，P－5区において検出された焼土域（写真3）については，竪穴住居の可能性も想定して掘り上げを行ったが，調査途中に湧水によって破壊されたため，写真のみの記録となった。

写真3　P-5区検出の焼土域

表5　深浦期焼土一覧

挿図番号	レイアウトNO. 区	レイアウトNO. 番号	検出時遺構番号	大きさ（cm） 長径	大きさ（cm） 短径	備　考
9	N-5	焼土1	N－5区焼土	145	130	
		焼土2	深浦期焼土1	70	55	
	O-6	焼土3	深浦期焼土2	80	60	
		焼土4	深浦期焼土3	90	85	
	P-5	焼土5	P－5区焼土	250	225	湧水による破壊のため実測できず。図版4



第14図　土坑（1）

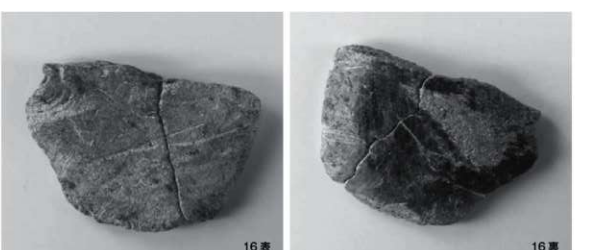
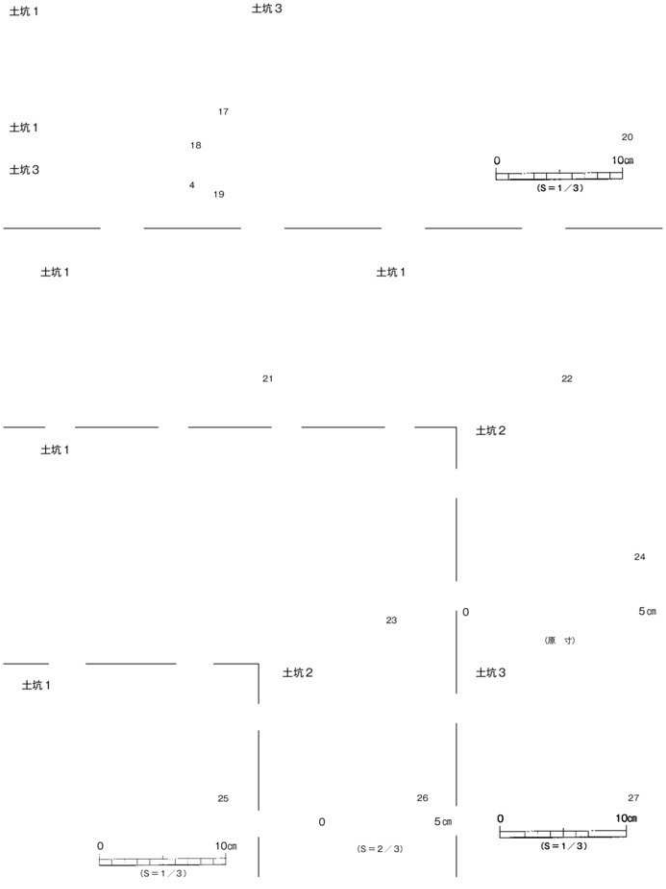
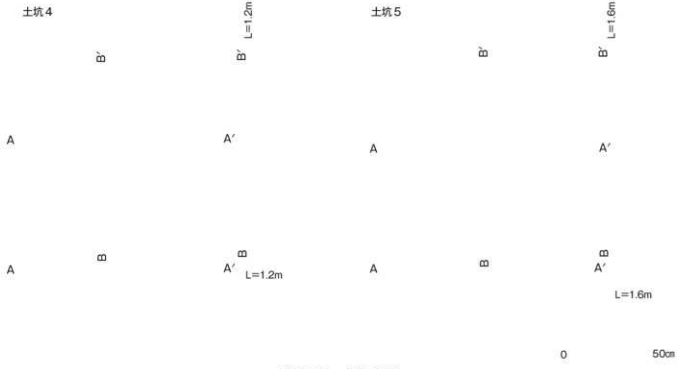


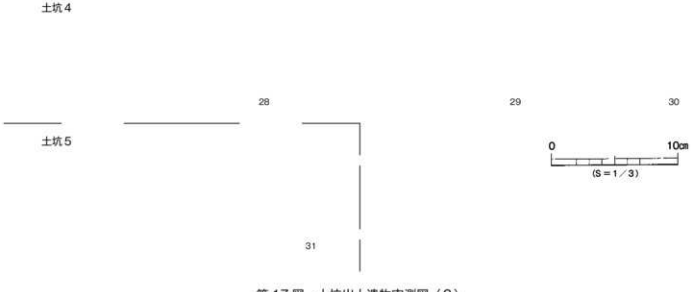
写真4　土坑2内出土滑石片



第 15 図　土坑出土遺物実測図（1）



第16図　土坑（2）



第17図　土坑出土遺物実測図（2）

表6　深浦期土坑一覧

挿図番号	レイアウトNO.		検出時遺構番号	大きさ（cm）			備　　考
	区	番号		長径	短径	深さ	
14	P・Q-5	土坑1	土坑A	126	122	32	土坑2と隣接
	Q-5	土坑2	土坑B	134	130	63	土坑1と隣接
	O-4	土坑3	土坑C	115	93	20.5	
16	V-8	土坑4	遺構３１１７	70	70	20	
	V・W-9	土坑5	遺構３０６４	77	69	19	ピットに切られる

4　石材集積

石器の石材とみられる黒曜石とサヌカイトの原石及び石核・フレークが小範囲にまとまって集積した遺構が数箇所検出されている。掘り込みを伴うものもあるが，出土状況から，有機質の繊維などを用いた入れ物に入れられていた可能性も考えられる。ここでは，このうち3基について図化している。なお同様の集積は他に3基あったが，湧水に伴う土砂の流入によって崩壊したため図化することができなかった。

・石材集積1（第18図）

Q－6区で検出された。検出面が砂地であったため、掘り込みを確認することが困難であったが、大まかに捉えることができた。7個の黒曜石製の石核・母核で構成される。32・33（第19図）と34～38（第20図）は，いずれもほぼ未加工のもので，石材は黒曜石Ⅰ（上牛鼻産黒曜石に類似するもの）に分類される。

・石材集積2（第18図）

P－6区で検出された。本遺構では掘り込みが確認された。6個の石核・母核で構成されるもので，39～41（第21図）は，ほぼ石材集積1と同様にほぼ未加工であり，黒曜石Ⅰに分類されるものである。

・石材集積3（第18図）

R－6区で検出された。ハリ質の安山岩が集積されるもので，石材は安山岩Ⅱ（多久産とみられるサヌカイト系）に類似する。15個の石核・母核で構成される。石材は未加工のものよりも加工されているものの方が多い。掘り込みは確認できなかった。

・石材集積4

P－4区で検出された。調査途中に湧水によって破壊されたため，作図することができなかった。遺物については，一括して取り上げた。9個の石核・母核で構成される。いずれも黒曜石製で，8個については黒曜石Ⅰに，1個（67）については黒曜石Ⅱ（長谷産黒曜石に類似するもの）に分類される。黒曜石Ⅰのものについては8点中6点を実測した。59～66（第24図）がそれに該当する。ほとんどが未加工の母核であるが，特に67については他の遺物と石材も異なるだけでなく，石核として使用されている点でも特徴的である。

・石材集積5

Q－7区で検出された。調査途中に湧水によって破壊されたため，作図することができなかった。遺物については，一括して取り上げた。7個の石核・母核で構成される。68～74は，いずれも黒曜石製であり，本集積の遺物にも未加工の母核が入っているが，ほとんどが加工のみられる石核である点が他の集積とは異なる点である。なお，69と74については加工のないものである。

表7　石材集積一覧

No.	名称	区	検出時遺構番号	大きさ（cm）			備　考
				長径	短径	深さ	
1	石材集積1	Q-6	黒曜石集積1	17	12	8	
2	石材集積2	P-6	黒曜石集積2	18	14.5	5	掘り込みあり
3	石材集積3	R-6	ハリ質安山岩集積	21	15.5	7.5	多久産のサヌカイトに類似
4	石材集積4	P-4	黒曜石集積3	－	－	－	湧水による破壊のため実測できず。遺物のみ一括取り上げ
5	石材集積5	Q-7	黒曜石集積4	－	－	－	湧水による破壊のため実測できず。遺物のみ一括取り上げ

第 18 図　石材集積

第 19 図　石材集積 1 出土遺物実測図（1）

34

35

36

37

38

0　　5cm

（S＝2／3）

第 20 図　石材集積 1 出土遺物実測図（2）

42

39

43

40

44

0 5cm

41

(S＝2／3)

第21図　石材集積2出土遺物実測図

45

46

47

48

49

50

51

52

53

54

55

57

56

0

5cm

（S＝2／3）

第 22 図　石材集積３出土遺物実測図（１）

第 23 図　石材集積３出土遺物実測図（２）

５　集中出土土器

本遺跡では，多数の土器が発見されたが，その中でいくつかには一個体が潰れたような状態で発見されたものがみられた。ここではその中でも特徴的なものについて取り上げる。

・集中出土土器１（第 26 図）

Ｐ－５区で口縁部付近から底部にかけての一個体の土器が潰れたような状態で検出された。黒色のものと赤色の破片が混在する。土器自体は胴部の上半部に突帯を「米」の字状に貼り付けられるもので，さらに沈線が放射状に施文される。本報告書においては，Ｉｃ類土器に分類されるもので，深浦式土器の中の石峰段階とされるものである。

本遺構では，土器片に混じって円礫や角礫も検出されているが，この状況が示すものが，煮炊きなのか廃棄に伴うものなのかは調査中には明らかにすることができなかった。また，遺構内からは黒曜石製の石核（75）が発見されている。石材は黒曜石Ｉ（上牛鼻産に類似するもの）である。

本遺構の土器についてはどの土器が該当するのかは記録がなく確認することができなかった。

・集中出土土器２（第 26 図）

Ｐ－６・７区で検出された。集石７に隣接する。先述のとおり，集石と同時期のものであるかは明らかではない。土器については，本報告書においては，Ⅱ類土器に分類されるもので，器面調整を貝殻腹縁によるとみられる条痕で行うものである。

本遺構の土器についてもどの土器が該当するのかは記録がなく確認することができなかった。

表８　深浦期集中出土土器

No.	レイアウトNO.		検出時遺構番号	大きさ（cm）		備　　考
	区	番号		長径	短径	
1	P-5	集中出土土器１	土器集中部	165	92	
2	P-6・7	集中出土土器２	中期集石４隣接土器	325	110	集石８に隣接

59

60

61

62

63

64

66

67

65

0

5cm

第24図　石材集積４出土遺物実測図

（S＝2／3）

68

69

70

72

71

73

74

0 5cm

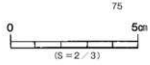
(S＝2／3)

第25図　石材集積５出土遺物実測図

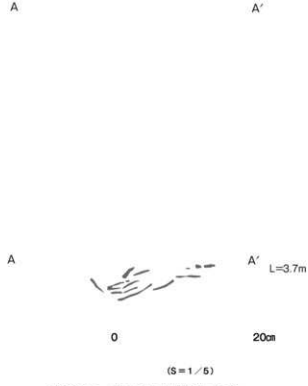
第26図　集中出土土器遺構（1）－1

第 27 図　集中出土土器遺構（1）－2

図版5　集中出土土器1



第 28 図　集中出土土器遺構出土遺物実測図



第 29 図　集中出土土器遺構（2）

第３節　遺物

１　土器

（１）　土器の概観及び出土傾向

先述のように，本節において報告する土器群は第１－２Ａ群土器である。既存の土器型式では，深浦式系土器，条痕文土器，鷹島式土器，船元Ⅱ式土器に分類・呼称されている土器である。これらは，基本的にはＶｂ層から出土した。特に，一遺跡からこれほどの質・量でまとまって深浦式土器が出土する例は他にはなく当該時期の様相を知る上で極めて良好な出土状況であると言えよう。

量的に多い順に，深浦式系土器が1156点，条痕文土器が497点，船元Ⅱ式土器が152点，鷹島式土器が３点と続く。これらの土器に関しては，土器編年や共伴関係，形式分類等について研究者によって意見が分かれている。この点でも，本遺跡の資料群は，縄文時代前期末から中葉の土器様相を考えるうえで重要な情報を与えうるものである。

さて，第１－２Ａ群土器は次のような形態的特徴と文様によってⅠ類からⅢ類に分類して掲載している。ここでは全体的な土器について出土状況を中心として概観し，さらに次項で詳細な説明を行うこととする。

Ⅰ類土器

深浦式系土器に該当する。近年，相美伊久雄氏によって再検討が行われ，さらに日木山・石峰・鞍谷の３つの段階に分類されている。第30・34～39図では，Ⅰ類土器の出土状況の出土分布図（ドット図）を示した。この分布図から，Ⅰ類土器はその大部分がＭ～Ｔ区に集中して出土していることが明らかである。なお，Ｏ～Ｑ－４・５区に存在するドットの空白は，当該時期のものでなく近世の遺構によって後世に破壊されたものである。

本報告書では，Ⅰ類土器についてさらに詳細に分類したが，ここでは各型式の大まかな分類について説明を行う。

・Ⅰａ・Ⅰｂ類土器：日木山段階

連点文を基調とするもの。横位連点文ののち縦位連点文を施すものが，縦位連文点ののち横位連文点を施すものに先行する傾向がある。本類の土器は，Ⅰ類土器の中では比較的多く出土している。

第31・34～37・40・41図で見る限り，出土分布の傾向はⅠ類土器全体の傾向とそれほど大きく変わらない。他の分類の土器と比較すると，１つに接合した土器の距離が10ｍを超えるものはほとんどなく，あまり土器の動きがなかったことが想定される。

・Ⅰｃ・Ⅰｄ・Ⅰｅ類土器：石峰段階（Ⅰｄ・Ⅰｅの一部に鞍谷段階あり）

突帯ではじめに文様区画を行い，そののちに沈線を施すもの。もしくは，沈線のみを施すが，文様パターンがそれに準ずるもの。一部に連点の施されるものもある。３つに分類された土器の中で，本類に属するものが最も多い。

第31・34～37・42・43図で見る限り，出土分布の範囲はⅠ類土器全体の傾向とそれほど大きく変わらない。一部に数十ｍを超える距離で遠距離接合をするものがあり，注目される。

・Ⅰｆ・Ⅰｇ類土器：鞍谷段階（一部を除く）

口縁部が内弯化し，文様が曲線化したもの。突帯・沈線の施文より先に相交弧文を施す。３つに分類された土器の中では，出土数は比較的少ない。

第30・42・43図で見る限り，出土分布の範囲はⅠ類土器全体の傾向と比較してやや狭い範囲での出土分布を示す。ただし，数十ｍを超える距離で遠距離接合をするものがある。

Ⅱ類土器

中期の「条痕文土器」と呼称されるものについて取り扱う。ここでは，一見して前期の轟式土器に類似するが，比較的器壁が厚く，内外面に貝殻条痕を施すもので，深浦式でも春日式でもないものを一括した。口縁部に突帯を巡らすものもある。ここでは，ａ突帯が廻るもの，ｂ無文のもの，ｃ胴部を一括したもの（さらにｃ①：寸胴のものと，ｃ②：頸部がくびれるものに分類した），ｄ底部を一括したもの（さらに，ｄ①：尖底のものと，ｄ②：丸底と尖底の中間，ｄ③：丸底に分類した）の４つに小分類を行った。

なお，地文としての縦条痕を施すものについて相美氏が設定した「上水流タイプ」については，本類に含めた。ものによっては，Ⅰｃ類土器（鞍谷式土器）に類似するものもあるが，突帯よりも条痕が主体を占めるとみられるものについても本類に含めている。また，それらとは反対に，突帯などの文様を含めた全体的な雰囲気がⅡ類土器に類似するものでも，縄文が施文されるものについては，いわゆる「条痕文」主体ではないと判断して，次に説明するⅢ類土器に分類した。

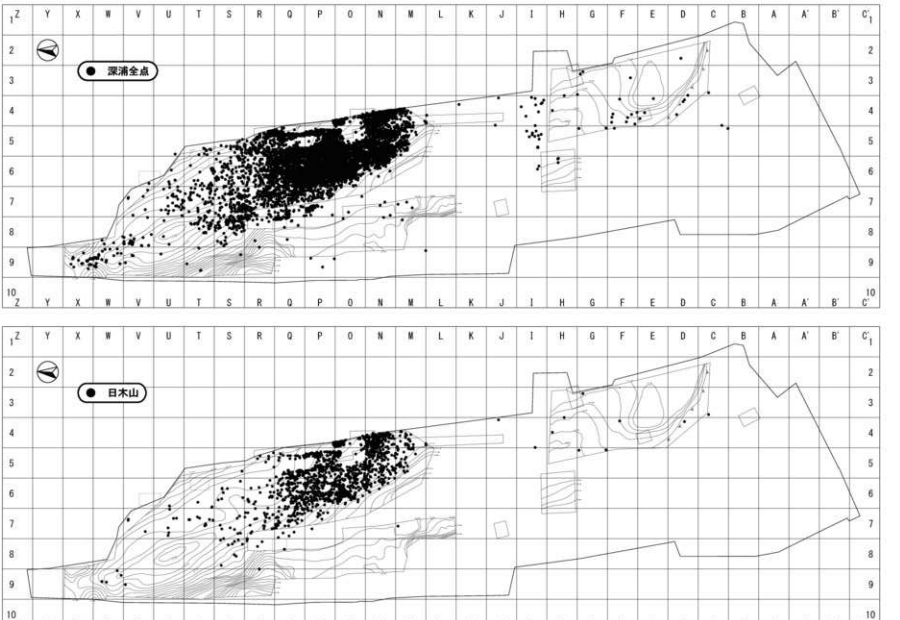
第32・33・44～46図で見ると，出土分布の範囲はⅠ類土器全体の傾向と比較してひとまわり狭い範囲での出土分布を示す。一部に遠距離接合をするものがあるが，全体的には土器自体の動きが大きいものは少ない。

Ⅲ類土器

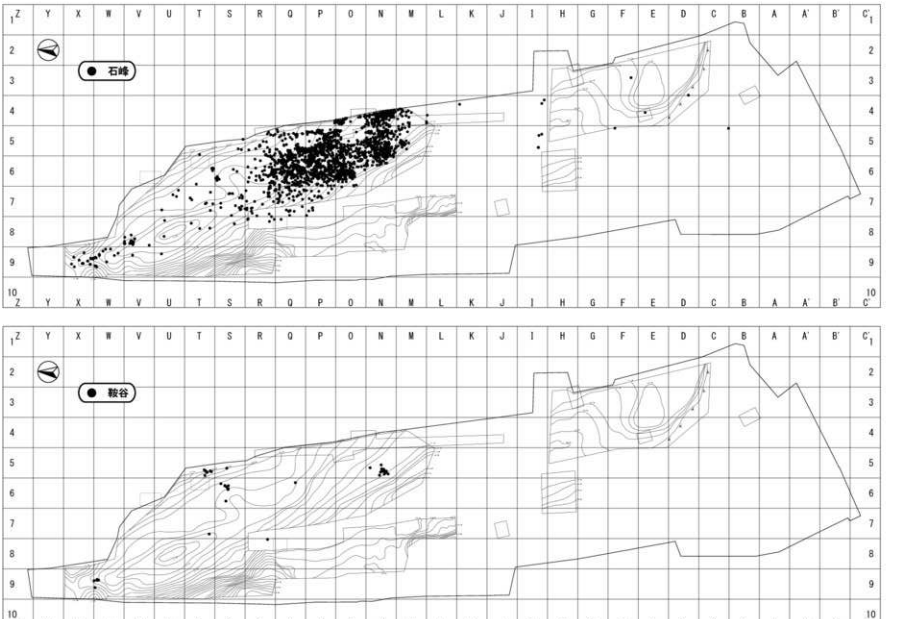
縄文を主体とした施文形態により構成される土器群で，在地の土器とは異なる特徴を持つものである。既知の土器編年研究の中では，瀬戸内系の土器に類似するもので，その中でも鷹島式土器及び船元Ⅱ式土器に比定されると考えられる土器である。

・Ⅲａ類土器：鷹島式土器

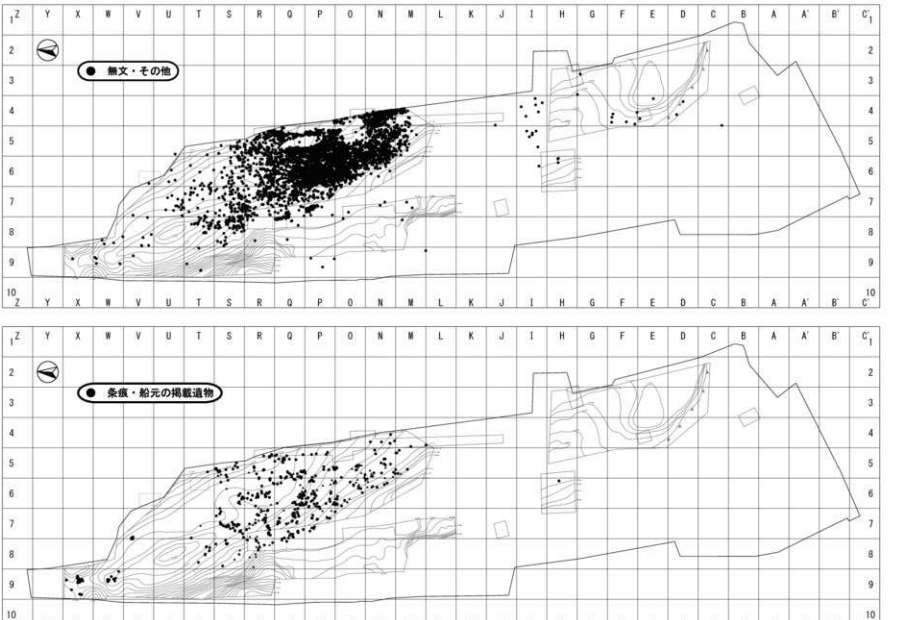
本遺跡においては，口縁部が３点のみの出土であるの



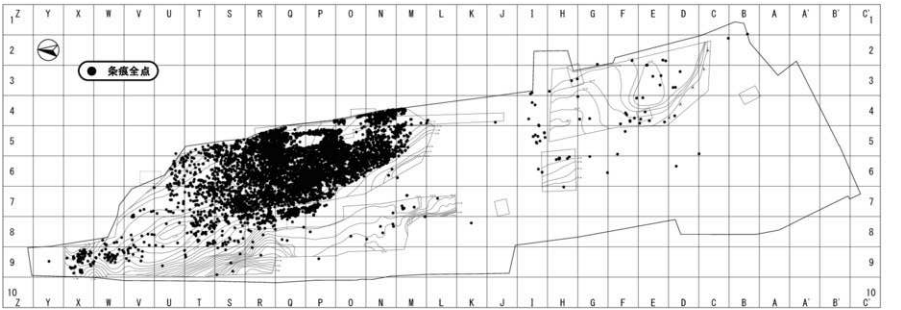
第 30 図　分類別土器出土状況図（1）

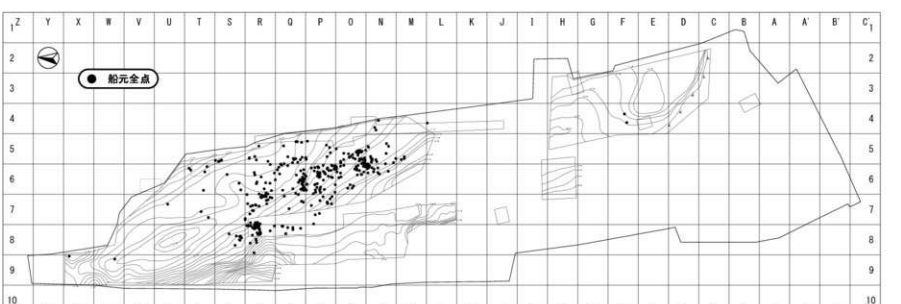


第 31 図　分類別土器出土状況図（2）

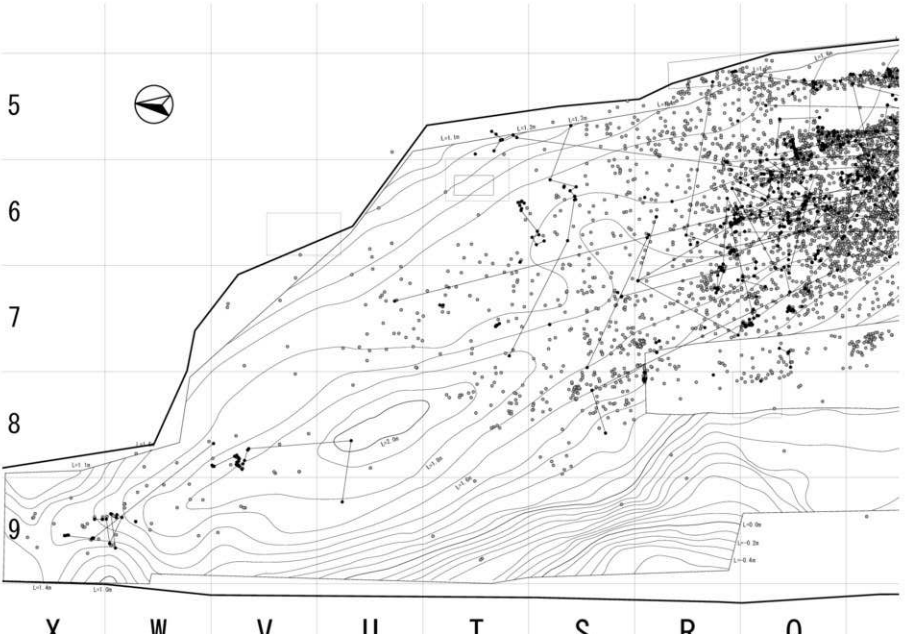


第 32 図　分類別土器出土状況図（3）

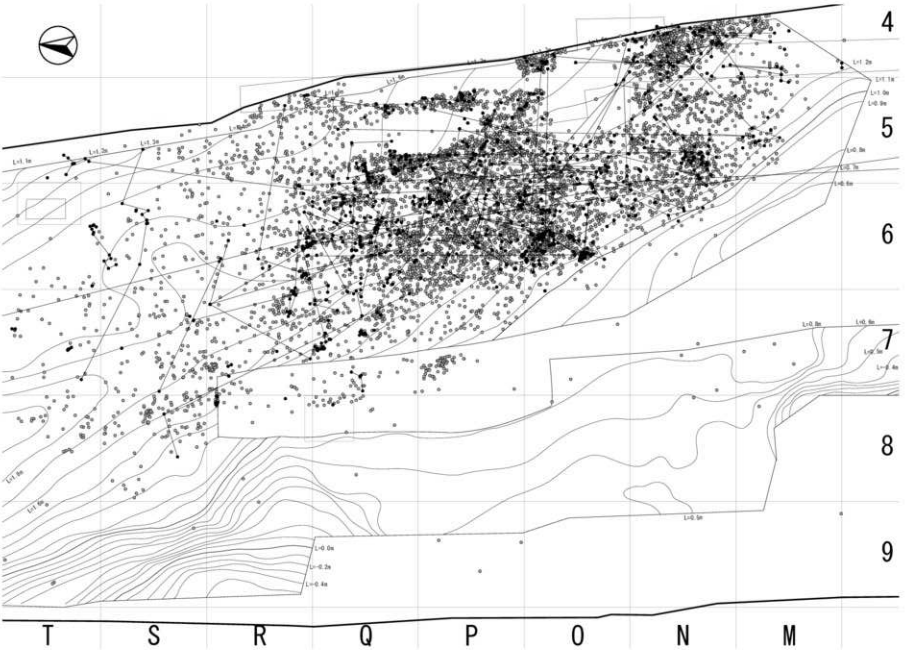




第 33 図　分類別土器出土状況図（4）

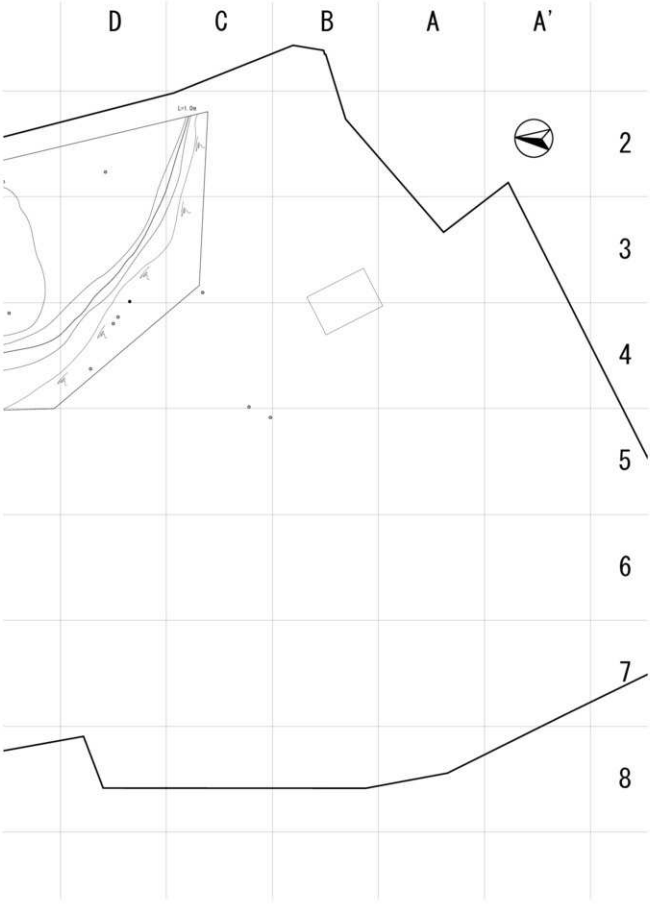


第34図　土器詳細出土状況図(1)

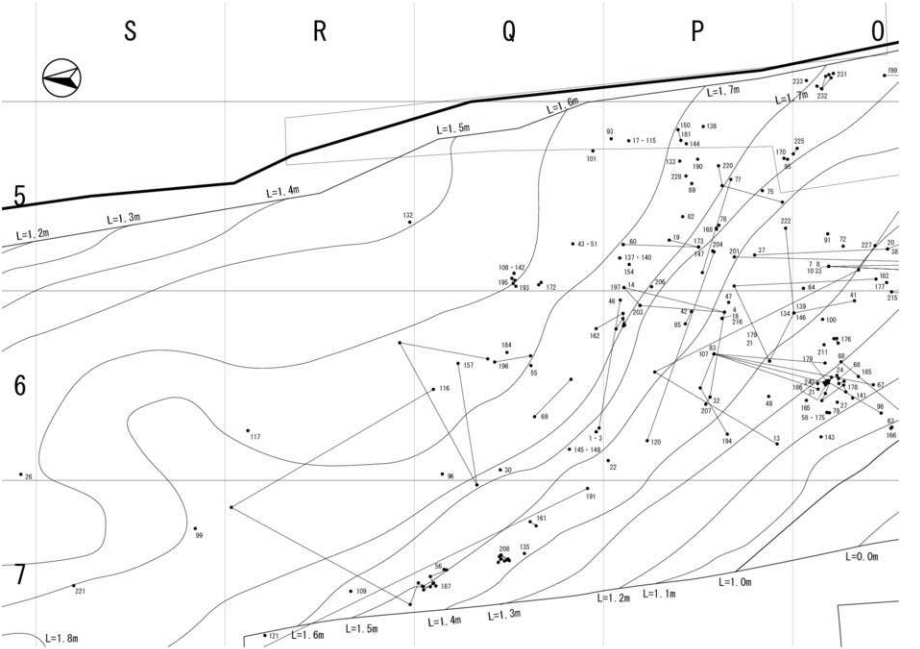


第35図　土器詳細出土状況図(2)

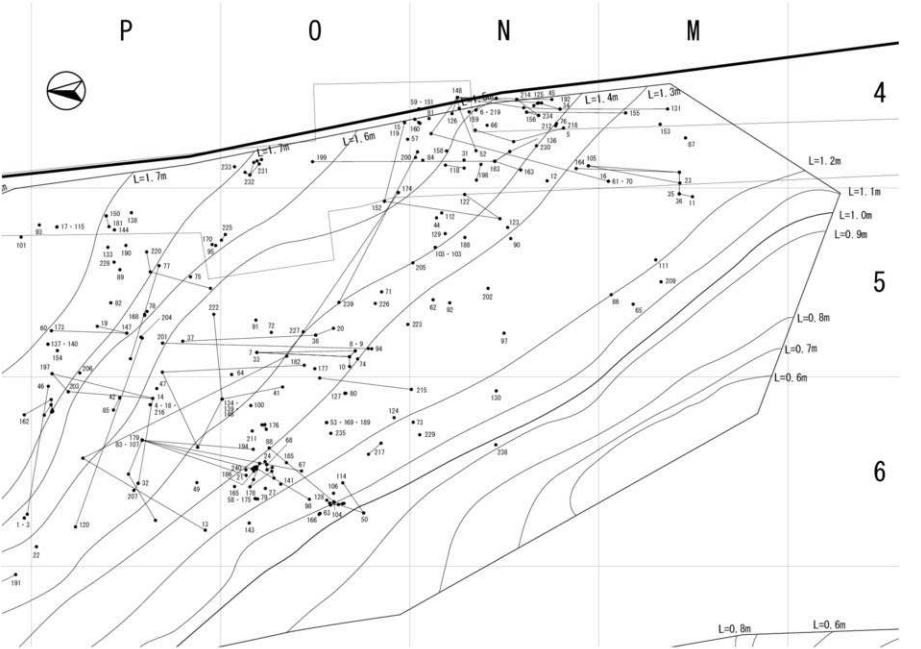
第36図　土器詳細出土状況図(3)



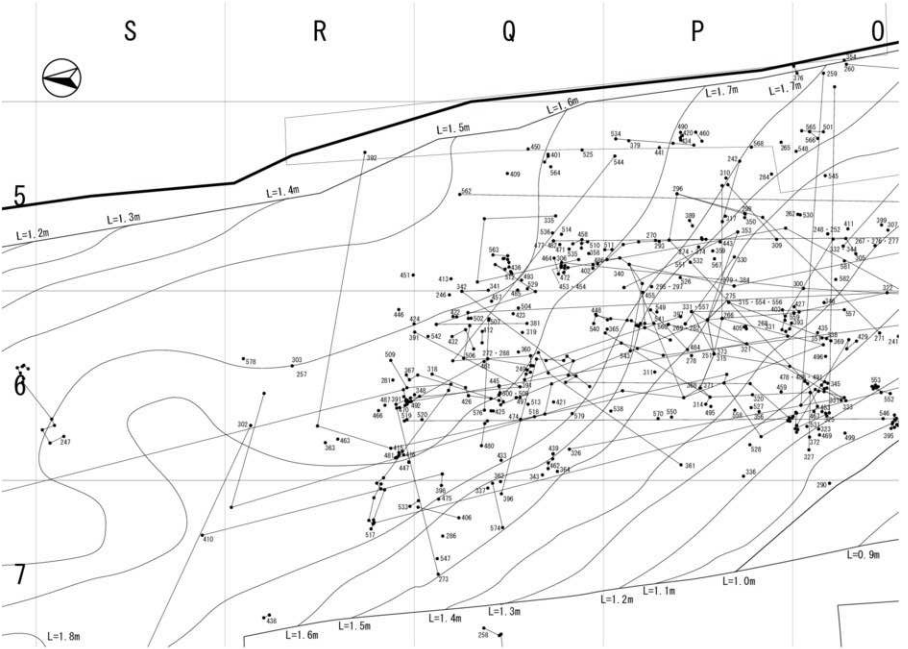
第37図　土器詳細出土状況図(4)



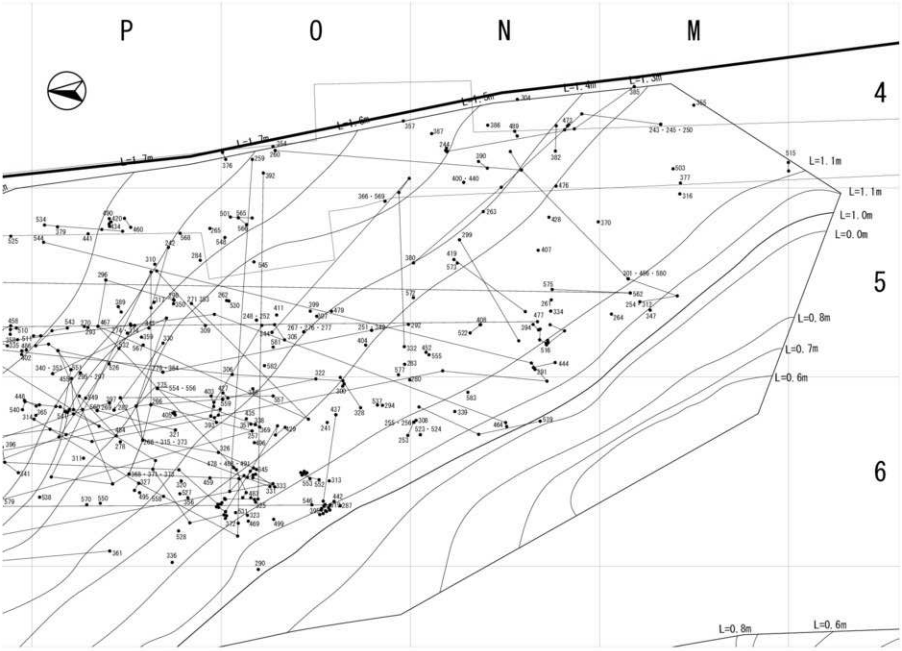
第38図　Ia･b類土器出土状況図(1)



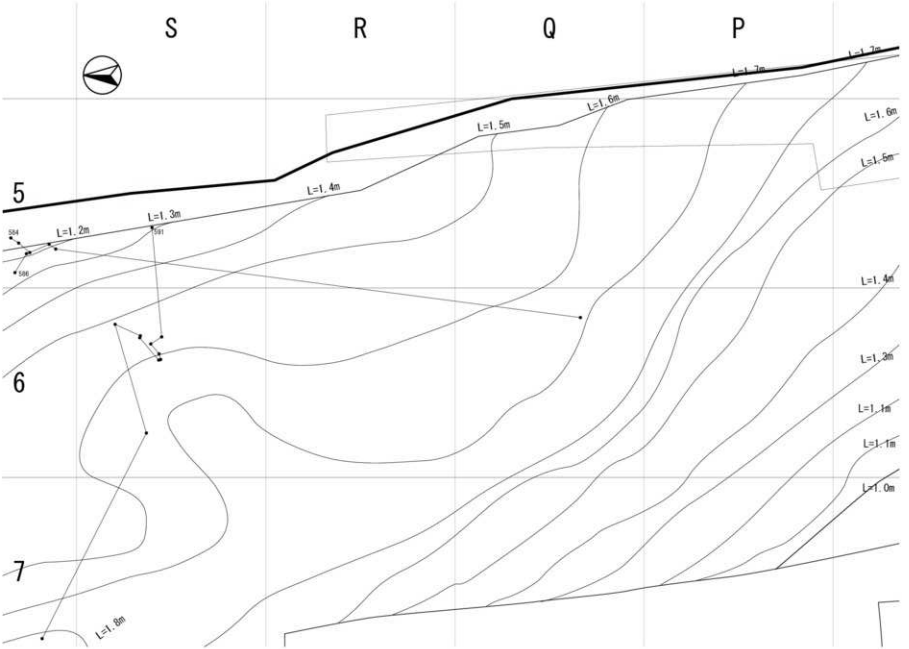
第39図　Ia･b類土器出土状況図(2)



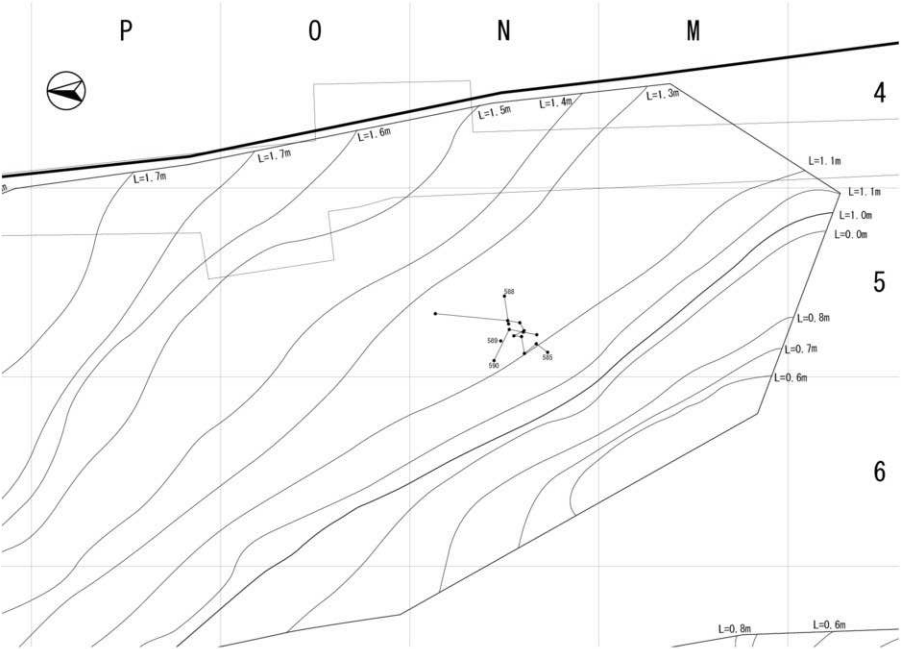
第40図　Ic･d･e類土器出土状況図(1)



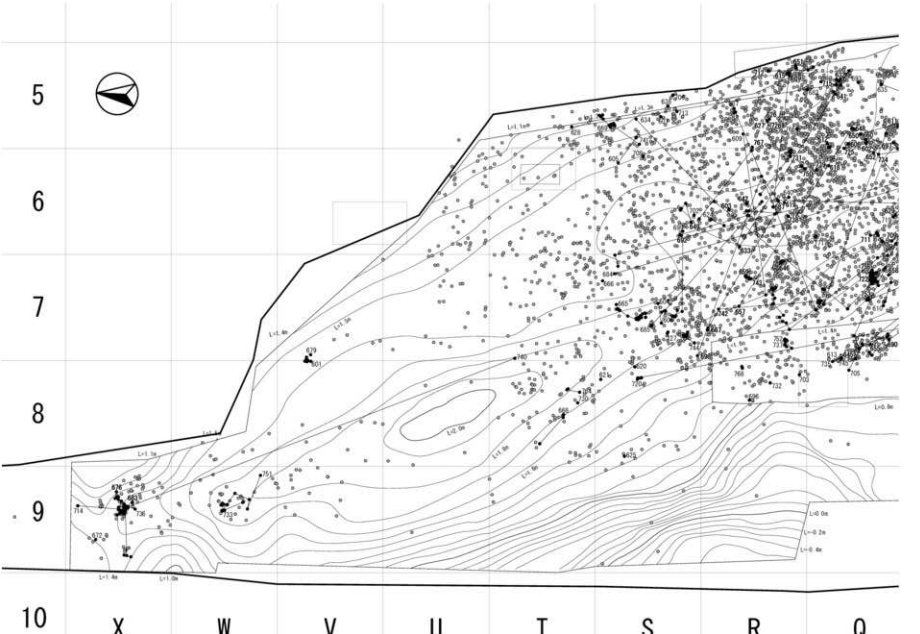
第41図　Ic･d･e類土器出土状況図(2)



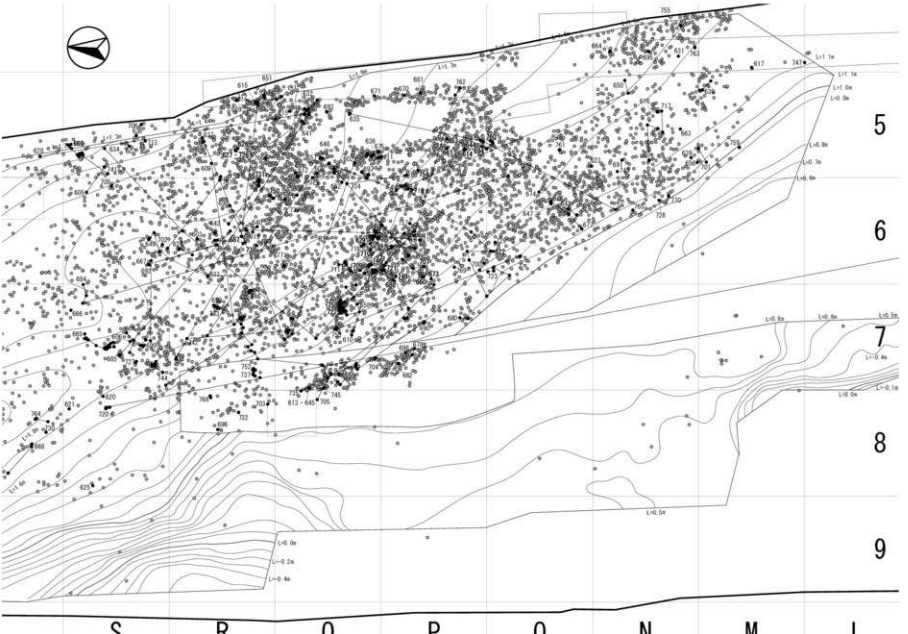
第42図　If･g類土器出土状況図(1)



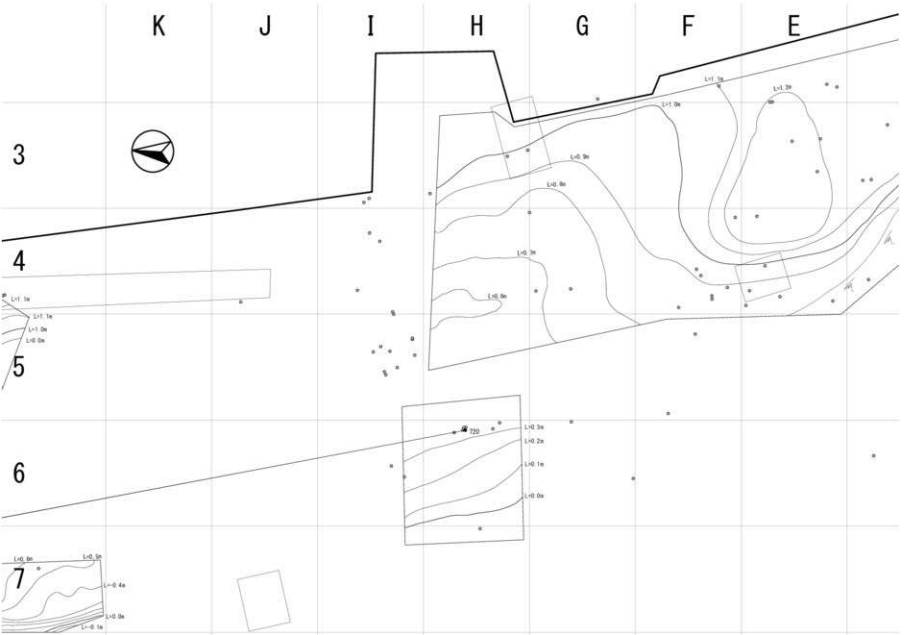
第43図　If･g類土器出土状況図(2)



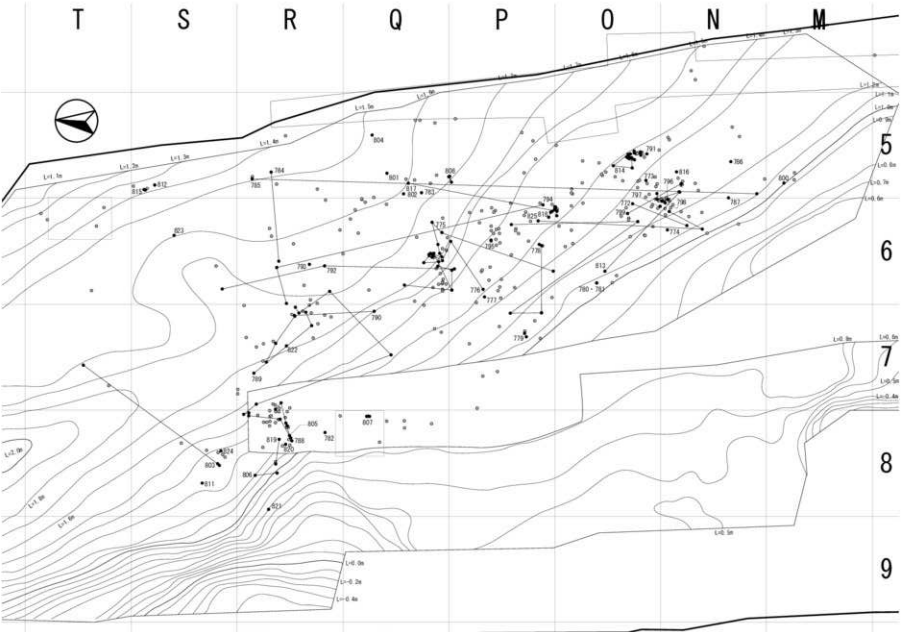
第44図　Ⅱ類土器出土状況図(1)



第45図　Ⅱ類土器出土状況図(2)



第46図　Ⅱ類土器出土状況図(3)



第47図　Ⅲ類土器出土状況図

第48図　Ⅰ類土器実測図（1）

で，口縁部で確認された特徴で本分類とした。主に縄文と爪形文が施される。口唇部には面があり，ここには爪形文が施される。口縁部の外面には爪形文を施した突帯が，内面には縄文が施される。口縁部内面には縄文帯をつくるものもある。出土量は少なく，O－5・6区において3点出土しているのみである。

・Ⅲb類土器：船元Ⅱ式土器及びそれに類似するもの

器面には，原体が太く繊維痕が顕著な撚りのゆるい縄文を縦走させる。この上に，竹管による爪形や刺突のついた貼り付け突帯を有する場合が多い。器形はいわゆるキャリパー形を呈するもので，頸部には屈曲があるが，多くは屈曲が鋭いものでなくやや緩やかな屈曲を有する。口縁部などに，貝殻の頂部による圧痕が施されることも多い。なお，本分類の1つ前の型式とされる船元Ⅰ式の特徴の一つに頸部屈曲が鋭いということがあげられるが，このような特徴を有するものついても全体的な特徴から本類に分類したものもある。

なお，船元Ⅱ式土器の形態的特徴は，キャリパー形の器形を有することであるが，ここでは「縄文」という在地にはない文様の特徴を重視して分類を行ったため，本来の船元Ⅱ式土器とは異なる形態のものも縄文が施文されているものについてはここで扱う。出土数は当該時期

7

9

8

10

0　10cm
(S＝1／3)

第49図　Ⅰ類土器実測図（2）

の遺物の中では，Ⅲa類土器に次いで少なく，本遺跡の遺物の中では主体を占めない。

第32・33・47図で見ると，出土分布の範囲はⅠ類土器全体の傾向と比較してひとまわり狭い範囲での出土分布を示す。一部に遠距離接合をするものがあるが，全体的には土器自体の動きが大きいものは少ない。

（2）　Ⅰ類土器の概要

Ⅴb層中に出土した土器中，貝殻連点文，相交弧文，突帯文，沈線文，刺突文等の施文形態により構成される土器群で，既知の土器編年研究の中で，深浦式系土器に位置付けられると考えられる一群である。まず，本稿で述べる施文形態（施文具とその手法により器面に表出される凹凸状の形態）について，相美伊久雄氏の定義をもとに，本稿では以下のように再定義したい。なお，文章中，

12

11

13

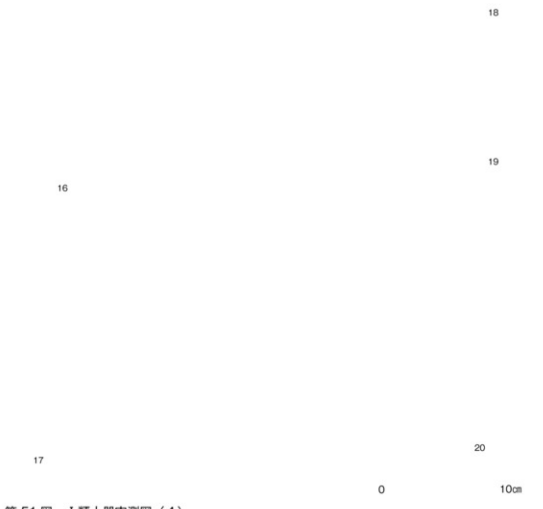
14

15

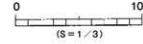
0 10cm

第50図　Ⅰ類土器実測図（3）

(S＝1／3)



第 51 図　Ⅰ類土器実測図（4）



第52図　Ⅰ類土器実測図（5）

「～文」の語を省略する場合も，意味は以下に同じである。

・貝殻連点文

二枚貝の貝殻腹縁で，刺突（一部押し引き）による「往復半転手法」で施文され，半転の軸部分は器体から離さない。半転の軸となる両端部が粗い連点で，施文の中央部は押し引き状を呈することが多い。

・相交弧文

「往復半転手法」により二枚貝の貝殻腹縁を押圧（刺突）する。貝殻連点文との施文手法の違いは，相交弧文では刺突する度毎に，一旦は原体を器体から離すことにある。貝殻連点文とは，原体である貝殻の種類や刺突の器面への負荷が異なると思われ，本遺跡資料の実見では，相交弧文の凹凸は小さく密であり，弧状の連点が丁寧な鋸歯状を描く。

・突帯文

粘土を紐状に添付することにより施文される。刻みを施すタイプ（以降，「刻目突帯（文）」と呼称。）と施さないタイプ（以降，「素突帯」と呼称。）に分けられる。素突帯は，器面への押圧の負荷が弱いため，器面との接地面が狭く，断面が円形を呈する例が多い。一方，刻目突帯は，刻みによる押圧の負荷により器面との接地面が広く，断面が台形状・三角形状を呈する例が多い。断面方形状の丁寧な成形がなされている例も見られる。

・微隆起突帯文

親指と人差し指で突帯を摘まみ，器面に撫でつけるように添付したものと想定される。撫でつけの大きな負荷により断面が末広がりの三角形状を呈し，突帯文より頂部の峰が低く裾野幅が広い。

・沈線文

ヘラ状の施文具を用いた押し引きにより，１条ずつ施される。原体であるヘラ状施文具の厚さにより沈線の太さは多種であり，細沈線から太めの沈線まで見られる。

・貝殻刺突文

二枚貝の貝殻腹縁を器面に刺突することにより，連点が円弧状（一部直線状）に形成される。本遺跡資料の実見では，貝殻刺突文の凹凸は貝殻連点文と同程度の大きさであり，相交弧文の凹凸より明らかに大きい。

・刺突文

竹管状や串（棒）状の施文具の端部を，器面に押圧して施文する。円形状の凹みが施されるのが多い。

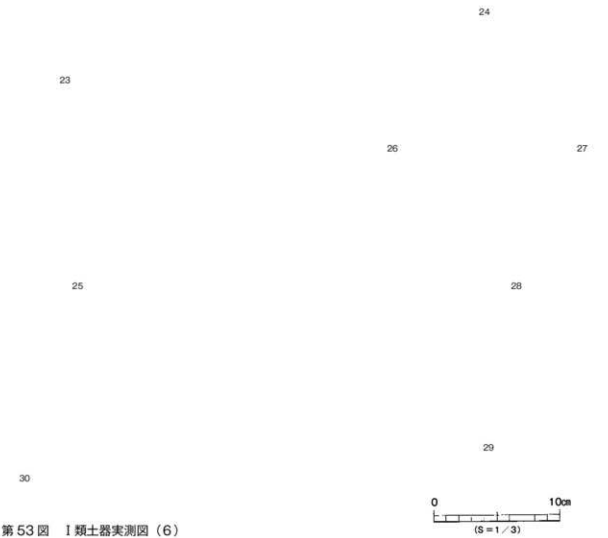
・刻み

突帯や口唇部に施されるもので，ヘラ状施文具の側縁部を，器面に押圧して施文する。突帯や器体に対して，直交（やや直交）する。もしくはや２重の鋸歯状の沈線が施される。

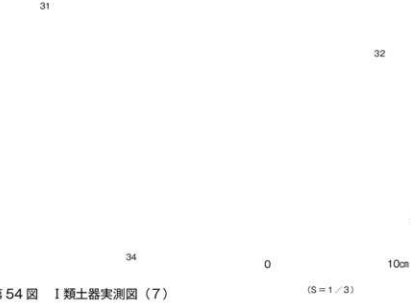
Ⅰ類の土器群は，縦位（横位）の貝殻連点や突帯文・微隆起突帯文・沈線文による施文帯が施される。複数の施文帯間に，縦・斜・横走する貝殻連点文や沈線文等で多様な文様形態が施される。胴部の器面に上述の施文形態のいずれを中心的に施すかによって分類が可能であるので，以下の通りに分類を試みた。なお，この主たる施文形態による分類は，相美伊久雄氏の研究の成果に基づくものである。相美氏の深浦式系土器の編年案に当てはめると，Ⅰａ類・Ⅰｂ類の一部が日木山段階，Ⅰｂ類の一部・Ⅰｃ類・Ⅰｄ類が石峰段階，Ⅰｆ類・Ⅰｇ類が鞍谷段階に相当する。Ⅰｅ類については，基本的には日木山・石峰段階に含まれる可能性がある。

表９　Ⅰ類土器文様分類（1）

貝殻連点文	相交弧文	突帯文	微隆起突帯文	沈線文	貝殻刺突文	刺突文	刻み



第53図　Ⅰ類土器実測図（6）



第54図　Ⅰ類土器実測図（7）

・Ⅰａ類：貝殻連点文を主たる施文形態とする一群
　Ⅰａ－１類
文様モチーフが横位のみに展開するもの
　Ⅰａ－２類
文様モチーフが横位に展開するもの

・Ⅰｂ類：貝殻連点文を主たる施文形態とし，部分的（主に口縁部）に突帯文が施される一群。貝殻連点文による文様を施すⅠａ類の属性と突帯文を施すⅠｃ類の属性を具有する。
　Ⅰｂ－１類
Ⅰａ－１類の口縁部に数条の突帯を廻らせるもの
　Ⅰｂ－２類
Ⅰａ－２類の口縁部に数条の突帯を廻らせるもの

・Ⅰｃ類：突帯文を主たる施文形態とする一群
　Ⅰｃ－１類
文様モチーフが横位のみに展開するもの
　Ⅰｃ－２類
文様モチーフが縦位に展開するもの

・Ⅰｄ類：微隆起突帯文を主たる施文形態とする一群
　Ⅰｄ－１類
文様モチーフが横位のみに展開するもの。ただし，本遺跡では出土例が確認されていない。
　Ⅰｄ－２類
文様モチーフが縦位のみに展開するもの

・Ⅰｅ類：沈線文を主たる施文形態とする一群
　Ⅰｅ－１類
文様モチーフが横位のみに展開するもの
　Ⅰｅ－２類
文様モチーフが縦位に展開するもの

・Ⅰｆ類：胴部を中心に，相交弧文が施文される一群。本遺跡で相交弧文が施される資料の多くは，微隆起突帯文を主たる施文形態とし，以下突帯文が続く。貝殻連点文・沈線文を主たる施文形態とする資料には，明瞭な相交弧文は確認されない。

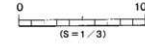
・Ⅰｇ類：その他。上記の分類に該当しない一群。もしくは，小片資料で全体的な施文形態・モチーフが捉えられない一群。

上記の分類では，特に触れなかったが，いずれの類でも，主たる施文形態の外郭に沈線文を施したり，縦位(横位)文様帯間を沈線文で埋めたりするタイプとほとんど沈線文を施さないタイプがある。

しかし，その差異はバリエーションであると捉え，土器編年観に帰結する分類上の観点とはしていない。また，上記の分類上，異なる類の要素を具有する資料も散見されるが，それらについては，主たる施文形態を観点上の基軸に据えて分別した。本形式の土器群は，完形品や土器片等からの復元により，器形に大小様々が存在することが捉えられる。しかし，器形の大小と属性比較におい

35

36



第55図　Ⅰ類土器実測図（8）

て，特に顕著な傾向を見出すことはできず，小片資料が多いことから，本稿では完形品・復元器体の大小は分類上の観点には含めていないことを付記しておきたい。

次に，文様形態の分類上の観点について述べてみたい。深浦式系土器群に分類される土器群は，上記のような多様な施文形態により，多様な文様形態（形状及びそれらの構成等）・文様モチーフが作出され，その文様形態は深浦式系土器群の編年研究上，重要な意味を持つと思われる。なお，本型式の土器群は，施文の初段階で，貝殻連点文や突帯文，沈線文により一定間隔で器面を縦割に分割し，その空白域の中で（もしくは，それをモチーフの中央線として），定形的な文様モチーフを作出する工程が営まれていることが実見により確かめられる。この役割を担っていると考えられる（可能性がある）文様を，本稿では便宜的に「（縦位）文様区画線」と呼称したい。「（縦位）文様区画線」を設定する位置について，本稿資料の実見から，一つの基準が捉えられる。文様区画線の機能を有する縦位施文（貝殻連点文・突帯文等）は，口唇部に山形状突起を添付する，もしくは波状口縁を呈する場合，その突起添付や波頂部の直下に施される。施文形態の切り合い関係から施文の順序を追究すると，縦位施文が施文の初段階に施されており，このことは，文様区画線としての機能を追証するものである。

なお，文様区画文が突帯文・沈線文・微隆起突帯文により施文される場合，２条の縦位突帯文等に挟まれた一定間隔を有する文様帯が１つの文様区画線として機能する。その場合，文様区画線でなく，「（縦位）文様区画帯」と呼称する。なお，胴部下半には，器体を横割りに分割する貝殻連点文や突帯文等が廻らされる場合が多いが，それらは，横位文様区画線（帯）として，縦位文様区画線（帯）と区別して呼称したい。

文様形態に関して，主たる施文形態の構成に着目して，以下のような大まかに分類を行った。なお，より詳細な細分による分類については，表１０にて記載したので参考にされたい。

⑴類：「『米』の字」状文及び「◇形」状文を基本モチーフとする。「『米』の字」状文と「◇形」状文の捉え方の相違については，基軸となる文様区画線（帯）の位置づけにより異なる。文様区画線（帯）がモチーフの境界線（分割線）と捉える場合，「『米』の字」状文のモチーフと捉えられる。一方，モチーフの中央線と捉えれば，「◇

38

37

39

40

41

第 56 図　Ⅰ類土器実測図（9）

0　10cm
(S＝1／3)

42

43

44

45

46

47

48

49

51

50

52

54

53

55

56

0

10cm

(S＝1／3)

第 57 図　Ⅰ類土器実測図（10）

57

58

59

60

61

62

63

64

65

67

66

0　　10cm

（S＝1／3）

第 58 図　Ⅰ類土器実測図（11）

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

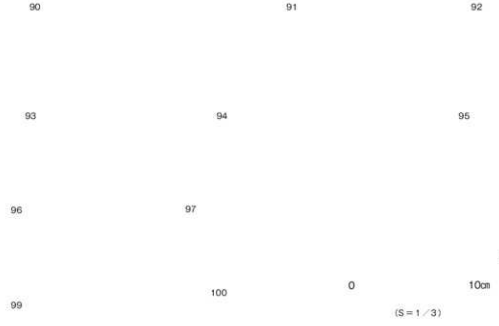
88

89

0　　10cm

（S＝1／3）

第 59 図　Ⅰ類土器実測図（12）



第 60 図　Ⅰ類土器実測図（13）

形」状文のモチーフと捉えうる。文様区画線であるか否かは，施文順序が認識できる一定以上の大きさを有する資料で，且つ施文の切りあい関係が明瞭に捉えられる資料に限られるために，本稿では，「「米」の字」状文・「◇形」状文のいずれであるかについては，細分しない。他に，なお，「「米」の字」状文が交差せず（接さず），「逆「く」」「く」の字が背中合わせ状に施文されるものも，この類に含めた。（以降，「逆「く」」・「く」の字状文と呼称）

⑵類：斜行沈線文（一部刺突文）により，多様な文様形態が作出される。⑴以外の多くが，この類に該当する。他の類の多くは，胴部下半に貝殻連点文や突帯文等による横位の文様区画文（帯）が廻らされるが，本類には，横位の文様区画線（帯）が施されない資料が多く見られる。縦位文様区画線（帯）間が無文である資料については，胴部下半に横位の文様区画線（帯）が施されない共通点から，本類に含めた。なお，本類の斜行沈線文により構成される文様モチーフは，大局的に捉えれば「「米」の字」状文・「◇形」状文の文様モチーフの範疇に含めうるものである。

⑶類：縦位文様区画線（帯）と胴部中（下）位に廻らされる横位文様区画線（帯）が⊥（垂直）状に交わるモチーフを採る。他に，口縁部及び胴部中（下）位に突帯文や微隆起突帯文が廻らされるのみの資料も含む。

⑷類：その他，上述の文様形態に含まれない（断定できない）一群

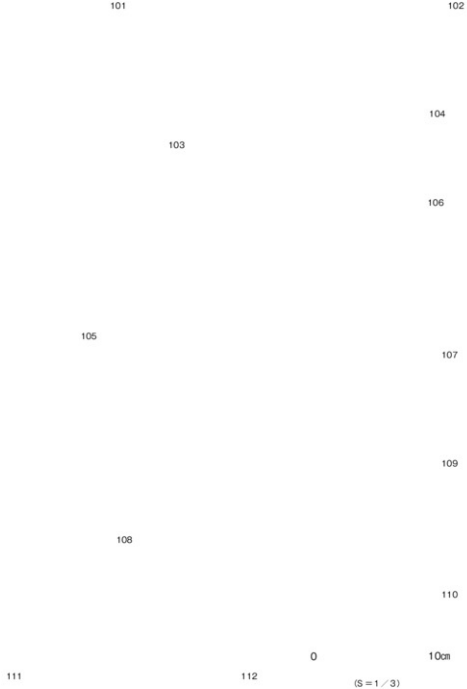
なお，深浦式系土器群の口縁形態には，平口縁と波状口縁が存在する。口縁形態が明確に捉えにくい小片資料における口縁形態の認定については，本遺跡の波状口縁資料の傾向により，口縁内面に施される貝殻連点文が斜行するものを波状口縁とし，斜行しないものを平口縁と捉えた。

以下，基本的には，施文形態毎の分類項目の下位に各部位別に述べていくこととしたい。なお，底部のみ確認され，上位の施文形態や文様形態が不明な資料はⅠａ～Ⅰｇ類について述べた後にまとめて記載した。

①Ⅰａ・１・⑴類

ア　口縁部・胴部

１～13は，Ⅰａ・１・⑴類に該当する。１は，口縁部・胴部中位・胴部下位に各１条の横位の貝殻連点文を施し，文様帯を分割・区画する。各文様帯内には，貝殻連点文による鋸歯状のモチーフを構成し，上・中・下段それぞれを対向して施文する。貝殻連点文間の空白域は山形状の沈線文で埋め，横位・鋸歯状貝殻連点文の外郭には沈線文が廻る。横位貝殻連点文を挟んで対向する鋸歯状貝殻連点文の２段目と３段目がずれており，広義の鋸歯状文とも捉えうる。しかし，深浦式系土器群の基本的モチーフは「「米」の字」状文であることより，本資料も⑴類の文様形態に含めるのが妥当と考える。２～４は胴部資料であるが，１と同一個体の可能性が高い。本遺跡で確



第61図　Ⅰ類土器実測図（14）

113

115

（赤色顔料分析資料）

114

117

116

118

119

120

121

122

124

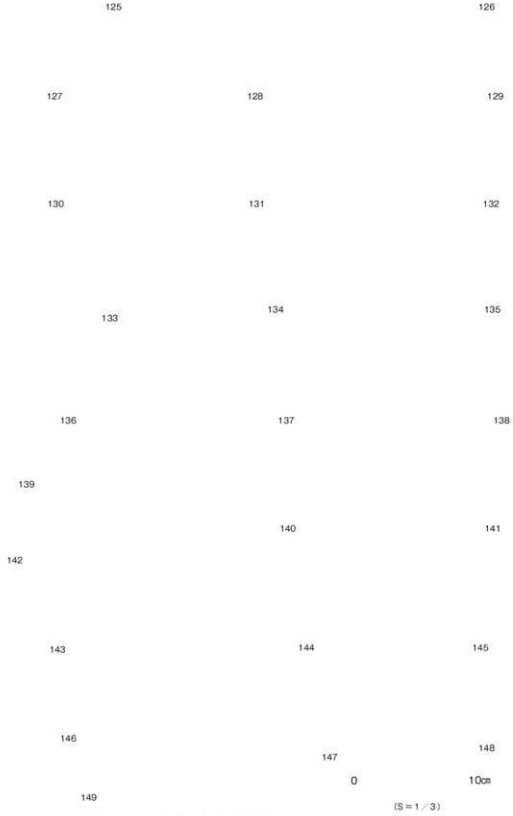
123

0

10cm

（S＝1／3）

第 62 図　Ⅰ類土器実測図（15）

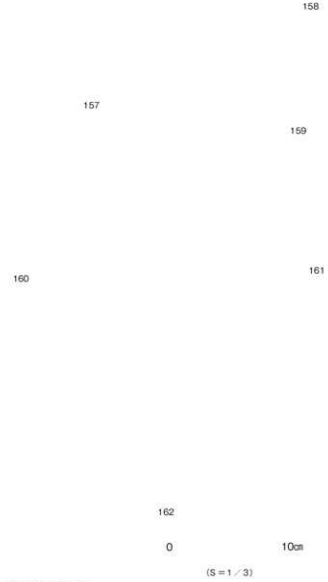


第 63 図　Ⅰ類土器実測図（16）

第 64 図　Ⅰ類土器実測図（17）

表 10　Ⅰ類土器文様分類（2）

(1)「米」の字」状文	「◇形」状文	「逆「く」」「く」の字状文	(2)鋸歯状文	菱形文
山形文	格子状文	斜行線	多条縦位沈線	



第 65 図　Ⅰ類土器実測図（18）

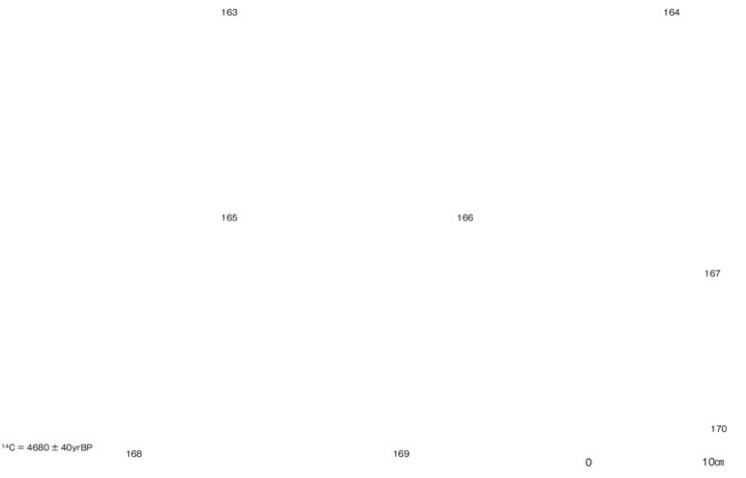
認できた本類資料は，以上の４点である。

５～12は，１～４と同様に，口縁部・胴部上・中・下位に各１条の横位の貝殻連点文を施し，文様帯を分割・区画する。５～12は，各文様帯内に対向する右下り・左下りの斜行沈線文を施す。５・６は，貝殻連点文（もしくは，斜行沈線文）外郭に１条の沈線で枠取りを施すのに対し，７～12は枠取りを施さない。10は胴部片で，７～９のいずれかと同一個体と考えられる。本遺跡で確認できたのは，以上の８点である。12・13は，胴部中位に円形浮文を添付する。13は胴部中位の横位沈線文直上に鋸歯状沈線文を施し，横位沈線文と胴部下位の横位貝殻連点文間には，貝殻連点文による鋸歯状文を横走させる。この文様モチーフが捉えられるのは，本遺跡ではこの１点のみの出土である。

②　Ⅰａ・２類

ア　口縁部

14～24は，Ⅰａ・2-⑴類に該当する。14は，複数の貝殻連点文が垂下し，その連点文間に鋸歯状の貝殻連点文が縦走する。空白域は，斜行沈線文で埋められる。



第 66 図　Ⅰ類土器実測図（19）

第 67 図　Ⅰ類土器実測図（20）　(S＝1／3)

口縁部を廻る横位貝殻連点文と垂下する縦位貝殻連点文との切りあい関係を観察すると，口縁部の横位貝殻連点文より以前に施された連点文と以後に施された連点文の２種存在することが捉えられる。山形口縁の直下を垂下する貝殻連点文が最も早く施文されていることから，これが文様区画線に該当すると判断される。15 は，縦位の貝殻連点文に代わって数条の縦位細沈線が垂下する。恐らく貝殻連点文の機能を果たしていると思われる。斜行線や口縁部の横位を一廻りする施文には貝殻連点文が施されるため，本類に含めた。16 は，貝殻連点文の刺突（押圧）の一つ一つが綺麗な波状を呈する。貝殻連点文に一較的に見られる粗い連点や押し引き状の痕より，施文が丁寧な印象を受ける。施文原体である貝殻の種類の違いに起因すると思われる。口縁部の山形状突起には，串（棒）状の刺突連点文を施す。同類に属すると判断される資料片である。18 は「『米』の字」状文が沈線で施され，「『米』の字」状文が対向する「逆『く』」・「く」の字状文で構成される。口縁部を廻る施文形態は，横位連点文ではなく，３条の細沈線である。19 ～ 24 は，貝殻連点文のみが施文され，連点文間を埋める斜行沈線文等が施されない。20 は，「『米』の字」状文の斜行貝殻連点文が交差するのが明瞭に捉えられる。縦位貝殻連点文を施した後，左下がり・右下がりの順に斜行貝殻連点文を施している。口縁部上位には，斜・横位の雑な貝殻条痕が施され，内面の口縁部上位にも貝殻条痕が横走する。21 は貝殻連点文の刺突幅が疎であるためか，施文形態がやや相交弧文状を呈する。22 は，口縁部上位に断面三角形状の無刻突帯文が１条施される。本稿では，この１点のみ捉えられた。23 は，定形的な「『米』の字」状文を呈しない。波頂部直下には縦位貝殻連点文が垂下する。色調が赤褐色を呈し，比較的硬質な胎土である。口唇部には串（棒）状施文具により１条の刺突連点文が施される。24 は小型の製品である。斜行貝殻連点文を有さず「『米』の字」状文を構成しない。25 ～ 39 は，Ⅰa・2・(2)類に該当する。31 は，小片のため断定はできないが，沈線により縦位の鋸歯状（もしくは菱形）を作出していると思われる。32 は，山形を重層する文様構成であろう。33 ～ 34 は，右下り・左下りの斜行沈線を交差させ，格子状を形成する。36・37 は，二枚貝の腹縁により右下りの斜行刺突文を縦走させる。刺突文の一つ一つが比較的一直線状を呈することより，ハイガイ・サルボウなど比較的大きめな二枚貝を原体として使用した可能性を見る。口縁部上位には，外面側から穿孔が２つ穿たれ，内面側からは未貫通の穿孔が１つ穿たれる。いずれも焼成後の穿孔である。このタイプの土器片は数個程出土しているが，施文形態や文様形態，胎土の色調等から全て同一個体と考えられる。38・39 は，縦位貝殻連点文間に，複数の沈線を縦走させる。37 は，胴部下半部に一廻りする貝殻連点文等による文様区画線を持たないためか，施文が底部直上まで至る。39 は，赤褐色の色調が印象的である。口縁部上位から口唇部を跨いで口縁部内面にかけて，３条の素突帯文が貼付される。垂下する縦位貝殻連点文間の空白域には，「『米』の字」状文等の文様は施されず，縦・横位貝殻連点文外郭に竹管状施文具による列点（竹管文）が刺突される。明瞭な竹管文が捉えられる資料は，本遺跡の深浦式系土器群では，この資料１点及び同一個体と想定される胴部資料 198 の２点のみである。40・41 の２点は，口縁部を貝殻連点文が横走する点ではⅠa・2類に該当するが，(1)・(2)類の文様モチーフを持たない。40 は，口縁部から胴部中位にかけて横位貝殻連点文を３条ほど廻らし，胴部中位以下，無文である。横位貝殻連点文３条を合わせた施文幅は 45cm程と幅広である。口縁部内面全面には，横走する貝殻条痕が明瞭に残され，文様形態含めて特異な資料である。41 は，小型の完形品であり，器高８cm弱，口径７cm程の大きさである。無文土器にも見えるが，胴部最大径部・底部上位に，各々１条廻らされた貝殻連点文がナデ消された形跡が捉えられる。胴部には，山形を呈する不鮮明な貝殻刺突文が２つ程捉えられ，相交弧文の痕跡である可能性もある。底部内面には，横位の貝殻条痕が明瞭に残される。42 ～ 64 は，口縁部の小片資料中，縦位貝殻連点文及び周辺に付随する沈線文が捉えられる。その多くが，Ⅰa・2・(1)類に属すると想定される。65 ～ 67 は，口縁部の小片資料の内，沈線文による鋸歯

173

176

174

175

177

178

179

180

182

183

0

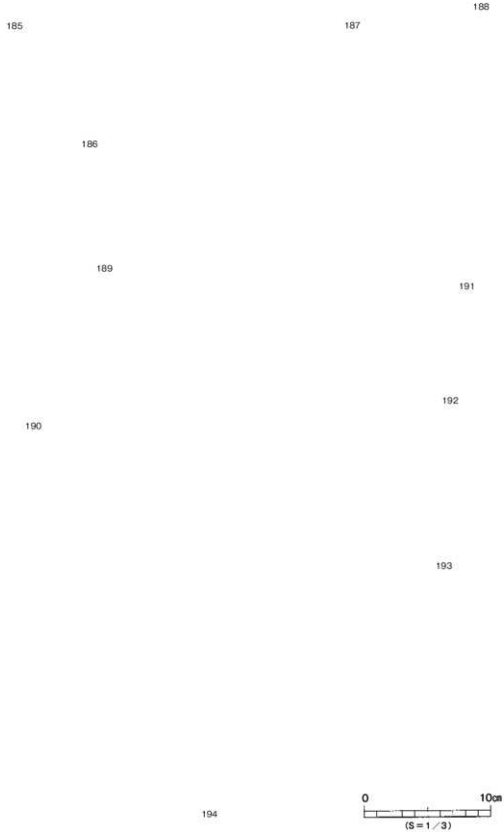
10cm

181

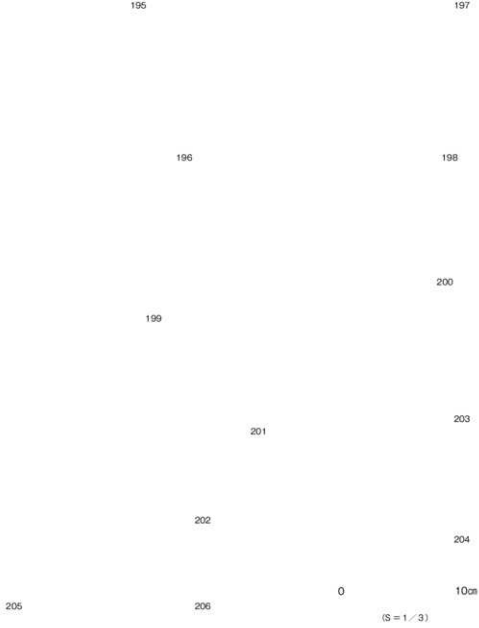
184

(S＝1／3)

第68図　Ⅰ類土器実測図（21）



第 69 図　Ⅰ類土器実測図（22）

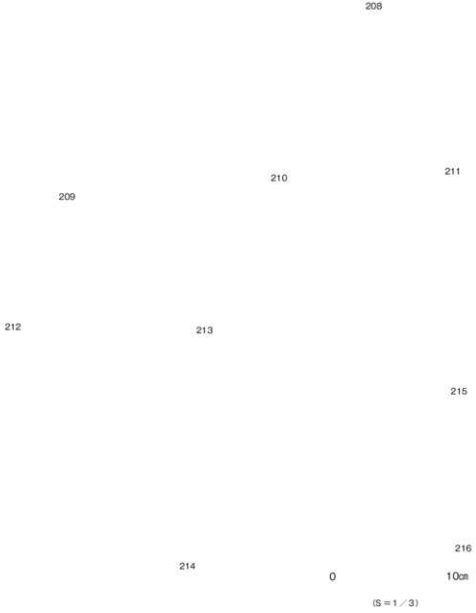


第 70 図　Ⅰ類土器実測図（23）

文（あるいは，菱形文）が捉えられる。65・66 は，口縁部を廻る貝殻連点文の直下に，２条の沈線による鋸歯文が施される。復元口径から比較的小型の製品である可能性がある。67 は横位貝殻連点文を有さず，口唇部直下に菱形文（もしくは，鋸歯文）が施される。68 ～ 100 は，口縁部の小片資料中，縦位貝殻連点文が捉えられず，口縁部の横位貝殻連点文や直下に縦位・斜位の沈線文等が捉えられる。

207

第 71 図　Ⅰ類土器実測図（24）



第 72 図　Ⅰ類土器実測図（25）

イ　胴部

101 ～ 121 は，縦位貝殻連点文及び「『米』の字」状文の交点部が捉えられることから，Ⅰａ - 2 -(1)類に該当すると判断される。他の資料は斜行線が貝殻連点文により施されるが，119 は沈線文で施される。この資料は，後述するⅠａ - 2 -(2)類の縦位鋸歯状文を施すタイプに似るが，斜行線が対向し胴部下半に横位貝殻連点文を有することから，「『米』の字」状文を構成すると判断される。120・121 には，流水状の沈線文が施され，本遺跡では他に類を見ない。122 ～ 126 は，縦位貝殻連点文と

217

218

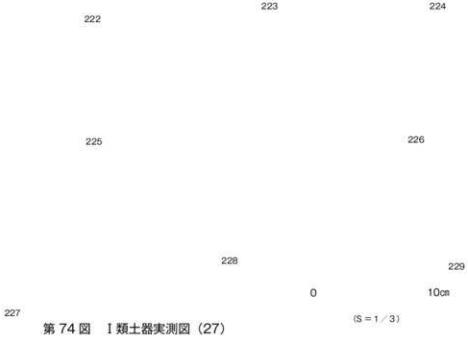
219

220

221

0 10cm
(S＝1／3)

第 73 図　Ⅰ類土器実測図（26）



第 74 図　Ⅰ類土器実測図（27）

横位貝殻連点文が垂直に接する胴部下半の資料であり，Ⅰa-2-⑴に該当する。125・126は，貝殻連点文間の沈線が縦走するようにも捉えられることから，Ⅰa-2-⑵類の可能性もある。127～144は，胴部資料中，縦位の貝殻連点文及び付随する沈線文が捉えられ，145～149は，斜位の貝殻連点文及び付随する沈線文等（一部連点文のみ）が捉えられる。150～153には横位の鋸歯文（菱形文）が施される。154～161は，文様モチーフは典型的なⅠa-2-⑴類であるが，主たる施文形態が貝殻連点文ではなく，ヘラ状施文具によると思われる刺突連点文が施される。更に，刺突連点文の外郭は沈線で枠取りをする。極めて特異な資料と思われる。既述のⅠa-2-⑴類に含まれる資料は，「『米』の字」状文のモチーフを構成する貝殻連点文間を沈線文で埋めるものであるが，162～172は，貝殻連点文のみ（外郭等の局部的な沈線施文を除く）で施文され，貝殻連点文間に沈線文を施さない。Ⅰa-2-⑴類のバリエーションの一つと考えられる。170は胴部下半から底部に至る資料であり，胴部上位には沈線文が施される可能性も残される。173～200は，縦位貝殻連点文間を縦方向の文様モチーフで埋めるⅠa-2-⑵類に該当し，構成される文様モチーフ毎に分類が可能である。173～177は，沈線文による縦位の鋸歯状文が施される。但し，土器片という部分的抽出による認識であり，鋸歯状文を形成する斜行線が対向する場合，「『米』の字」状文・「◇形」状文の可能性も生まれる。なお，176・177は，外面全面に条線状の条痕文が施され，内面には横位の貝殻条痕文が極明瞭に施される特異な資料である。178～184は，菱形文を重層させる。184は，縦位貝殻連点文の右側に菱形文を施す一方，左側には，左下り（右下り）する斜行沈線による文様形態を採る。185～188は同一方向の斜行沈線が縦位で施されるタイプで，189～190は重層的な山形文が綾杉状を作出する。191・192は，右下りと左下りの沈線を交差させ，格子状の文様形態を作出する。以上の文様形態⑵類の資料は，部分的には（もしくは，大局的には）「『米』の字」状文・「◇形」状文の文様構成⑴類と関連性を捉えられるものである。一方，193～197の多条の縦位の沈線文を並行させる文様モチーフは，⑴類とはやや関連性が希薄な印象を受ける。175や178・181・198等など縦位の鋸歯状文や菱形文に伴って，縦位の沈線を並行させる資料が見られることから，多条の縦位沈線文を並行させる文様モチーフは，鋸歯状文・菱形文の省略と捉えることも可能である。194は，内面全面に横位の貝殻条痕が顕著に残される。196は，胴部下半に横位貝殻連点文を横走させた後，その上下位に垂直の縦位貝殻連点文を施す。下位の縦位貝殻連点文は底部に至る

第 75 図　Ⅰ類土器実測図（28）

と思われる。197 は，横走する２条の貝殻連点文間を多条の縦位沈線文で埋める。横方向の文様モチーフを構成する(1)類の可能性もあるが，同様な文様形態を示す資料が確認されないことから，本類に含めた。198 ～ 200 は，縦位貝殻連点文間が無文である。198 は，貝殻連点文の外郭を竹管状の施文具により連点を施す。口縁部資料の 39 と同一個体の可能性が高い。199・200 は，相交弧文状の横位貝殻連点文が酷似し，同一個体の可能性を見る。一般的な貝殻連点文より半転の間隔が疎であるために，相交弧文を押し引いた形態を呈する。201 ～ 206 は横位の貝殻連点文（斜行沈線文を含む）が捉えられる小片資料であり，204 ～ 206 は胴部下半の部位が想定される。

③　Ⅰｂ類

ア　口縁部

207 ～ 213 は，口縁部に廻らした横位貝殻連点文上に，横位刻目突帯文を重ね合わせて添付する。207 は貝殻連点文と沈線文で構成した文様構成を採るが，口縁部には横位の貝殻連点文に重ねて，５条の刻目突帯文を添付して廻らせる。縦位貝殻連点文間に「逆『へ』」の字状に屈曲する横位貝殻連点文を３条施し，間を同様に「逆『へ』」の字状に屈曲する沈線文で埋める文様形態を採る。本遺跡で唯一の資料である。口縁部が波状を呈することにより，上面観が方形である。口縁部には，外面から焼成後に穿たれた穿孔を１穴有する。208・209 は，胴部

234

235

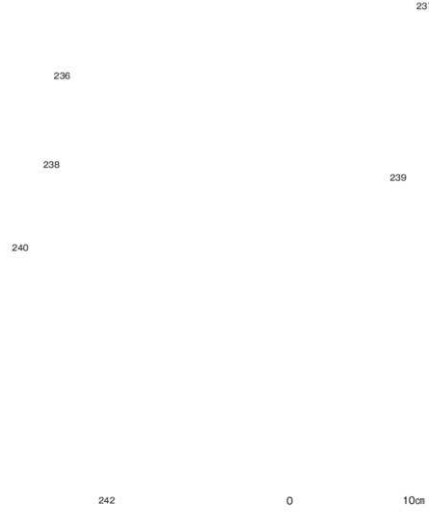
0　　10cm

(S＝1／3)

第76図　Ⅰ類土器実測図（29）

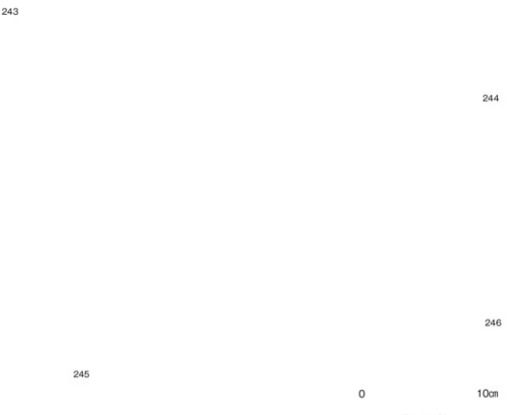
の文様形態が「「米」の字」状文を文様モチーフとするⅠa-2-(1)類に該当する。210～213は，口縁部の横位貝殻連点文上に横位刻目突帯文を添付する小片資料である。

214～216は，口縁部に横位貝殻連点文を廻らさず，横位刻目突帯文のみ1廻させる一群である。通常，「「米」の字」状文の斜行線は貝殻連点文で施すが，214～216は沈線文で作出する。215は口唇部には酒杯状突起が添付され，船元式土器との関連がうかがわれる。文様形態が(1)類の他，(2)類の対向する複数の斜行沈線を施すタイプにも捉えうる。216は，縦位貝殻連点文を有することから本類に含めたが，口縁部の横位突帯は微隆起状を呈する。本遺跡では，貝殻連点文と微隆起状突帯の施文形態の組み合わせは，ほとんど類例を見ない。217～221は，縦位貝殻連点文上に，縦位突帯文を重ねて添付する一群である。217は，縦位貝殻連点文間に左下り及び右下りの斜行沈線を交差させ，文様形態は(2)類に属する。218は，口縁部の横位貝殻連点文上に，横位刻目突帯文を廻らす。縦位貝殻連点文帯間に多条の縦位沈線文が施される(2)類の文様形態を採ると思われる。Ⅰb類は，縦位貝殻連点文上の中心に刻目突帯を添付・垂下させるが，219は，確認される部分では，縦位貝殻連点文外郭及び



第 77 図　Ⅰ類土器実測図（30）

縦位沈線文中心に施されているように捉えられる。口縁最上部の横位突帯文が，一部口唇部と一体となり，波頂部直下には，長楕円形の刻目突帯文が施される。深浦式系土器群との関連性（影響）が指摘される外来系の船元式土器の特徴である口唇部端部の肥厚や円形浮文と，この資料の上述の特徴に近似性を見る。220・221 は，縦位貝殻連点文上に素突帯文が添付される。「『米』の字」状文の文様モチーフを構成し，Ⅰb - 2 -(1)類に属する。素突帯文の断面観が円形を保持するほどに貼り付けの押圧が弱く，結果的に突帯と器面との接地面は僅かである。これらⅠb 類は，Ⅰa 類：貝殻連点文とⅠc 類：突帯文の特性を具有することから，切り合い関係（施文の順序）が明瞭に捉えられ，深浦式系土器群の編年研究上，重要な情報を含んでいると考えられる。222 ～ 226 は，波頂部や山形口縁頂部直下から垂下する縦位貝殻連点文上に，刻み目突帯文を重ねて添付させる。222・223 の縦位刻み目突帯文は，口縁内面にも 1 ㎝弱ほど回り込んで添付される。227 ～ 229 は，横位貝殻連点文と横位刻目突帯文のみ捉えられる小片資料である。227 の口縁部最上位の刻み目突帯は，口唇端部に最近接して貼付される。口唇端部の刻みとの切り合い関係から，口唇部への刻み後に，突帯文を巡らしていることが見て取れる。230 は，口縁部に廻らした横位貝殻連点文上に 4 条の素突帯を横位に添付し，その上から縦位の突帯を直交させて添付する。素突帯であることや横位の突帯を少なくとも 4 条添付すること，突帯間の幅が広いことなど，特異な印象を受ける。231 ～ 233 は，ピンク色の胎土の色調や幅 5 ㎜程の太めの突帯形態が特異であり，同一個体の可能性が

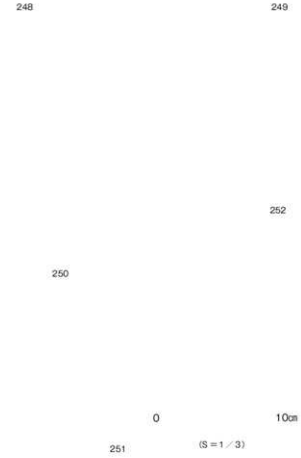


第 78 図　Ⅰ類土器実測図（31）

247

第 79 図　Ⅰ類土器実測図（32）

0　10cm
（S＝1／3）



第 80 図　Ⅰ類土器実測図（33）

高いと思われる。口縁部上位を廻る貝殻連点文上に２条の横位突帯文を添付し，直下に２条の突帯を垂下させる。一見すると，全て縦位の突帯は欠損しているように見えるが，一部無欠損で製作時の長さを保持するのも確認される。３㎝程の短い突帯であり，また，縦位の貝殻連点上に添付されない。口唇端部には船元式土器に見られるような舟形を呈する酒杯状突起が貼付される。234 は，縦位の貝殻連点文を主たる施文形態とするⅠａ-２-⑵類と沈線文による文様形態Ⅰｅ-１-⑵類により構成される下地の文様をナデ消し，突帯文を主たる文様形態とするⅠｃ-２-⑴類の文様形態を施す特異な資料であり，本遺跡では唯一確認される。胴部には，一旦は施した３条の縦位の貝殻連点文をナデ消した痕跡が残される。その内の１条の連点上に，刻目突帯文による菱形状文の中心が通ることより，下地の縦位の連点文が文様区画線として機能していることを示すと思われる。刻目突帯文による菱形文様の左下側には，菱形を呈していたと思われる沈線文が，ナデ消されて確認できる。これは，文様モチーフを構成する主たる施文形態（貝殻連点文･突帯文･沈線文）の時間的近さを意味するのか，新旧の要素を併せ持つ過渡期の資料の一つと捉えるべきか，検討を要する重要な資料である。235 は，文様形態は轟式土器群の系譜を感じさせる多条の突帯文が口縁部を廻る一方，胴部には貝殻連点文を施す。管見の知るところ，本遺跡の

254

253

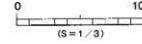
255

256

第 81 図　Ⅰ類土器実測図（34）

0　10cm
（S＝1／3）

257



第82図　Ⅰ類土器実測図（35）

みならず他の遺跡にも類例を見ない特異な資料と考えられる。本遺跡では，この1点のみ確認される。やや太く深い沈線を口縁部に11条横走させ，多条突帯に擬して捉えられる。僅かに確認できる胴部の横位の貝殻連点文や口縁部内面に施される横位の貝殻連点文，厚手で硬質な胎土や暗褐色の色調等より，深浦式系土器群に含めた。口縁部を廻る11条の沈線を観察すると，波頂部から胴部に伸びる縦軸の位置が施文の始点・終点となっている。口縁部が波状を呈する器形（口縁部全体に，角が形成される器形）により，口縁部の角部で横位の各沈線のつながりが，いびつになっているのが捉えられる。波状口縁の頂部から垂下する縦軸をモチーフの文様区画線とするⅠａ～Ⅰｅ類と，波状口縁部頂部直下の縦軸に口縁部施文の始点・終点が位置する本資料との間に共通性を見る。

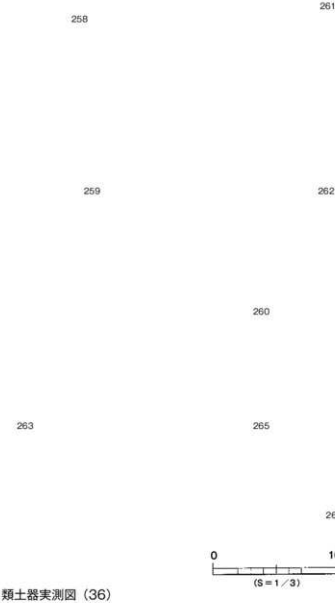
イ　胴部

236～240は，Ⅰｂ－２類に該当する。236は，縦位貝殻連点文上に，縦位素突帯文を垂下させる。縦位貝殻連点文間には重層する山形文が施される。237・238は，縦位貝殻連点文を有しながら，器体を1巡するであろう横位突帯文を具有する。239・240は，縦位貝殻連点文上に横・斜位の突帯文が施される。

④　Ⅰｃ類

ア　口縁部

241・242は，Ⅰｃ－２-⑵類に該当する。241は，２条の横位刻目突帯文帯間に，刻目突帯文による鋸歯状の文様を横走させ，空白域を沈線文により埋める。２条の横位突帯を挟んで，鋸歯文を対向させて配置させることで，意図的に「『米』の字」状文・「◇形」状文を作出していると思われる。242は，２条の平行する沈線により鋸歯状を横走させる。施文・文様形態の他，胎土や色調などの類似性から，胴部資料（316・317・319）と同一個体の可能性がある。243～251は「『米』の字」状文・「◇形」状文を文様モチーフとし，Ⅰｃ－２-⑴類に該当する。いずれも「『米』の字」状文・「◇形」状文の縦位中央線（縦位刻目突帯文）が1条である。243～246は，「『米』の字」状文を構成する斜行線が交差することより，「◇形」状文でなく，「『米』の字」状文をモチーフとすることが明らかである。245は，波頂部直下に刻目突帯文による２基の円形文が重層して配置される。胴部下半の横位貝殻連点文の上位には，円弧状のモチーフが廻らされることから，円形文と併せて，全体的に円形のモチーフが取り込まれている印象を受ける。縦走する２基の円形浮文は，船元式土器の円形浮文の影響を見る。247～250は，斜行線が「逆「く」」・「く」の字が背中合わせ状に施文され，「◇形」状文とも捉えうる。⑴類に該当する資料の多くが，胴部下半に貝殻連点文（突帯文）を横走させること



第 83 図　Ⅰ類土器実測図（36）

で胴部上半の文様区画帯を構成し，胴部下半以下は，無文，ないしは横位の貝殻連点文が廻らされる文様モチーフを採ることが多い。しかし，247・250 には胴部下位に横位文様区画線が施されず，250 は，複数の縦位貝殻連点文及び沈線文が底部に向かって垂下する 253 ～ 257 は，「『米』の字」状文・「◇形」状文を文様モチーフとし，いずれも「『米』の字」状文・「◇形」状文の縦位中央線（縦位刻目突帯文）が 2 条である。253・255・256 の口縁部には，赤色顔料が付着する。また，胴部下半の横位刻目突帯文の下位では底部に向かって縦位の貝殻連点文が垂下する。253・256 は，胴部下半から底部に向けて，数条の縦位貝殻連点文が施される。258 ～ 266 は，「『米』の字」状文・「◇形」状文の縦位刻目突帯文が 1 条施される小片資料で，267 ～ 270 は，2 条施され

第 84 図　Ⅰ類土器実測図（37）

287

288

289

290

291

292

293

294

295

296

297

298

299

300

301

302

303

304
（赤色顔料分析資料）

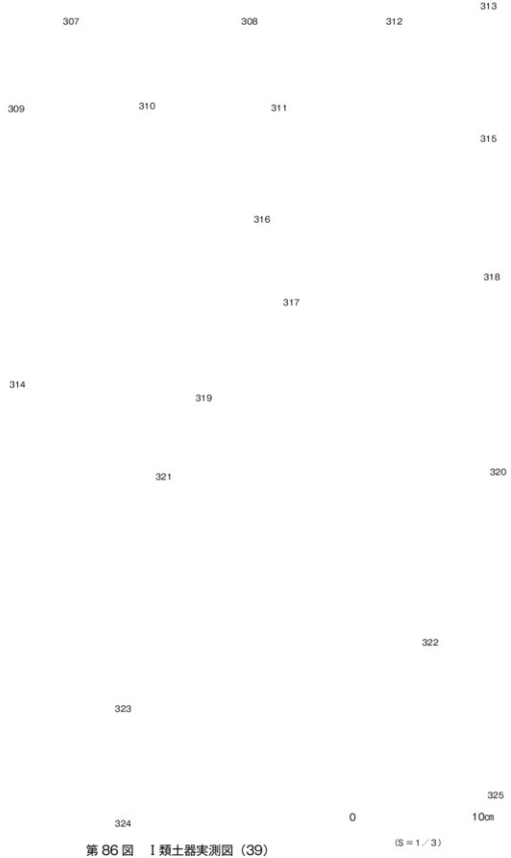
305

306

0　10cm

（S＝1／3）

第 85 図　Ⅰ類土器実測図（38）



第 86 図　Ⅰ類土器実測図（39）

326

327

328

330

329

332

331

0

10cm

(S＝1／3)

第87図　Ⅰ類土器実測図（40）

第 88 図　Ⅰ類土器実測図（41）

第 89 図　Ⅰ類土器実測図（42）

る小片資料である。267 には，斜行刻目突帯文に加えて，斜行貝殻連点文が捉えられ，他に類例を見ない。271 ～ 275 は，沈線により鋸歯文や菱形文が施文される。271・273・274 の口縁部内面には，貝殻条痕が明瞭に残される。276 ～ 278 は，口縁部直下から「『米』の字」状文・「◇形」状文を構成する斜行刻目突帯文が捉えられる，縦位刻目突帯文直近の小片資料である。279・280 は縦位突帯文の条数が不明確である。280 の口縁部内面には，貝殻条痕が顕著に捉えられる。281 の斜行刻目突帯文は，口縁部を円弧状に廻るものと思われる。285 ～ 301 は「『米』の字」状文・「◇形」状文を構成すると思われる斜行突帯文及び付随する沈線文が捉えられる。294 ～ 297 の内外面には，条痕が施されている。291 には円形状の刻目突帯が捉えられるが，円形浮文の可能性もある。295 には外面側からの焼成後に穿孔がなされている。300 は，突帯がやや細めで，突帯上に施される刻みが極細で 1.7 ㎝程の幅を有し特徴的である。胴部に施される文様モチーフは半月状を呈し，「逆『く』」「く」の字状文を呈する資料群とは一線を画す。302 ～ 314 は，横位刻目突帯文のみ（部分的な沈線文を含む）捉えられる。302 は突帯文直下に 1 cm 弱の円形浮文が捉えられるが，詳細は不明である。312 は，横位突帯文間に 2 条の斜行突帯文が施されるが，左側には僅かに対向する沈線文が捉えられ，鋸歯状を呈する可能性もある。314 は，横位刻目突帯文と外郭を枠取る横位沈線文で構成される口縁部の文様帯が，胴部上位まで下りてくる。以下，底部に至るまで無文である。文様形態が(1)・(2)類に属さないが，刻目突帯文の形態等からⅠc 類に含めた。小型製品の資料であるが，底部から胴部にかけて煤が付着し，煮炊きによる使用が認められる。本遺跡では本資料 1 点のみの出土である。

イ　胴部

315 ～ 320 は，器体を廻る複数の横位突帯文間に（もしくは，突帯文直上に）鋸歯状沈線文を施す。315・317・318・320 は胴部下半部であることが明白であるが，その他の資料も胴部下半部か，口縁部のいずれかである可能性が高い。316・317・319 は，口縁部資料 242 と同一個体の可能性がある。小型製品であるが，314 同様に，底部から胴部にかけて煤の付着が見られ，煮炊きによる使用が考えられる。321 ～ 325 は，「『米』の字」状文・「◇形」状文の交点部の資料で，縦位刻目突帯文が 1 条施される。一方，326 ～ 338 は，2 条の縦位刻目突帯文が施される。339・340 は，「逆『く』」「く」の字状文が施される。341 ～ 344 は，(1)類の文様を構成する縦位・斜位の刻目突帯文が捉えられる小片資料である。345 は，胴部を廻る 2 条の刻目突帯文に，2 条の刻目突帯文が垂下する。346 ～ 352 は横位刻目突帯文が，353 ～ 356 は横位刻目突帯文が，357 ～ 359 は斜位刻目突帯文が捉えられる小片資料である。360 ～ 374 は，下位に無文帯を有することから胴部下半部と想定される資料であり，Ⅰc-2-(1)類に該当する。360 ～ 367 は，縦位刻目突帯文が胴部下半の横位刻目突帯文と垂直に交わる部位である。368 ～ 374 には，胴部中位・下位の横位文様区画線が施されない。369 には，有文部位の多くが残存せず，刻目突帯文が部分的に剥離しているため文様形態が不明確である。370 ～ 372 には，「逆『く』」「く」の字状文の対向する斜行線のみ施され，縦位刻目突帯文が施されない。373 はⅠa-2-(2)類の一部の可能性があるが，詳細は不明である。374 にはステッキ状を呈する刻目突帯文が施され，縦位の鋸歯状文が捉えられる。

360

362

361

0　　10cm

（S＝1／3）

第 90 図　Ⅰ類土器実測図（43）

365

363

366

364

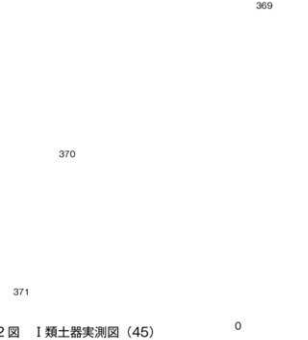
367

368

0　　10cm

（S＝1／3）

第 91 図　Ⅰ類土器実測図（44）



第 92 図　Ⅰ類土器実測図（45）

ウ　底部

375 ～ 379 は，１・２条の横位貝殻連点文が廻り，底部に向けて貝殻連点文が縦走する資料である。380 ～ 385 には１条の横位貝殻連点文が，386 ～ 389 には２条の横位貝殻連点文が，390 には３条の横位貝殻連点文が施される。381 ～ 385・388 などが典型的であるが，底部内面には貝殻条痕による器面調整が顕著に残される資料が多く見られる。

⑤　Ⅰｄ類

ア　口縁部

391 ～ 397 は，Ⅰｄ - 2 -(1)類に該当する。391 は，「『米』の字」状文の斜行線を交差させる。口縁部に２～３条程の微隆起突帯文を廻らし，間に 10 数条の沈線を施す。口縁部文様帯は 20cm 程に及び，他に比して幅広である。波頂部直下から２条の縦位微隆起突帯文が施される。微隆起突帯間には数条の沈線を垂下させ，これが縦位文様区画帯に相当すると考えられる。392 ～ 394 は 391 と同様な「『米』」状文の文様構成を採る可能性がある。395 ～ 397 は，「『米』」状文の斜行線が「逆『く』」「く」の字状に対向して施される。395 は「逆『く』」「く」の字状文が円弧状を呈し，縦位文様区画帯内には縦位の鋸歯状文が施される。397 は縦位文様帯に縦位の鋸歯状文，口縁部に山形状の文様が（鋸歯文の可能性も含めて）施される。胴部下半には，貝殻連点文が鋸歯状に廻らされ

第 93 図　Ⅰ類土器実測図（46）

386

387

385

388

389

390

0　　10cm

（S＝1／3）

第 94 図　Ⅰ類土器実測図（47）

391

392

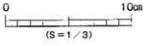
0　10cm
(S＝1／3)

第95図　Ⅰ類土器実測図（48）

393

394

395

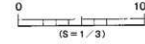


第96図　Ⅰ類土器実測図（49）

る。口縁部内面の文様形態について，393・397にはⅠａ～Ⅰｃ類の多くの資料と同様に，横位貝殻連点文が施されるが，392には貝殻条痕文が施され，それ以外は無文である。これは，この類には口縁部内面に横位貝殻連点文を施す資料の割合が少ない傾向を示す。398～439は，口縁部の横位微隆起突帯文に垂直（⊥）もしくは直交する２条の縦位微隆起突帯文を施す，波頂部直下の部位と想定される資料である。426～429の口縁部には横位の

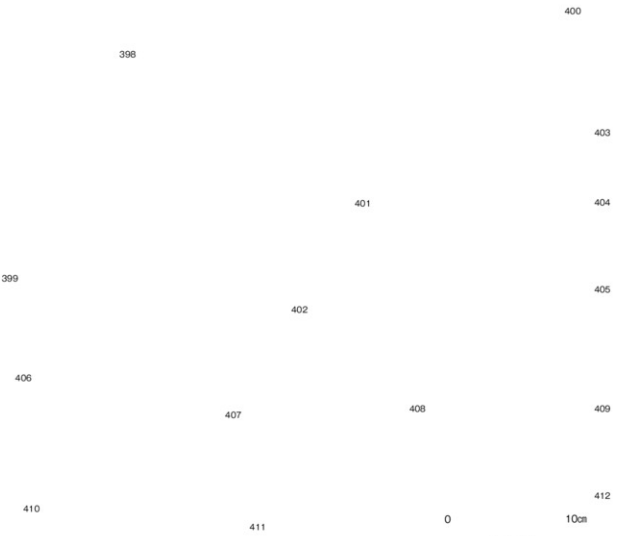
396

397

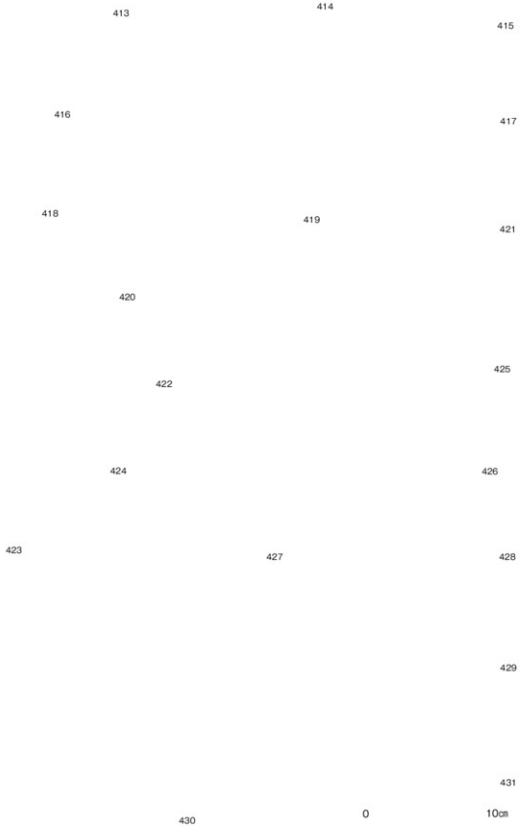


第97図　Ⅰ類土器実測図（50）

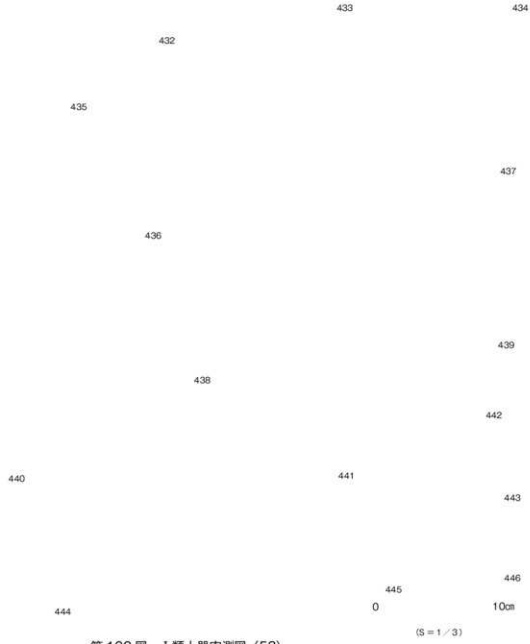
鋸歯状文が施され，429の口縁部内面には，明瞭な横位貝殻条痕文が残される。430には2条の流水状文が横走する。431～435は，縦位微隆起突帯文の条数が不明であり，433～435は微隆起突帯状突帯文に刻みを施す。436～439の微隆起突帯文には沈線文が付随せず，上述の多くの資料が微隆起突帯文の外郭に沈線文を施すのと対比される。440～461は，縦位微隆起突帯文が捉えられない横位微隆起突帯文を中心とした小片資料である。440は，弧状を描く横位微隆起突帯文の変化点であり，傘状に捉えられる。直下に縦位微隆起突帯文を施す例が多いが，本資料には捉えられない。441～443には微隆起突帯上に刻みを施す。444～446は，横位の鋸歯状文が捉えられる。447～461は，横位微隆起突帯文及び付随する沈線文のみ捉えられる。462・463は，縦位文様



第98図　Ⅰ類土器実測図（51）



第 99 図　Ⅰ類土器実測図（52）



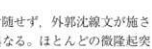
第100図　Ⅰ類土器実測図（53）

区画線(帯)が胴部中位の横位文様区画線(帯)に垂直(⊥)状に留まり，胴部中位以下は無文となる。Ⅰd-2-(3)類の資料群に相当する。既知の土器編年では，鞍谷段階に比定される。もしくはⅠd-2-(4)類の資料群である。462は，1条の縦位の微隆起突帯を挟んで，2条の対向する斜行微隆起突帯文が胴部中位の横位文様区画線に垂直（⊥）する。「逆『く』」「く」の字状文の斜行線の一つのバリエーション（もしくは変化形）と捉えられる。縦位区画文様帯を形成する突帯や口縁部の横位突帯（一部斜行突帯も）の刻みが，貝殻殻頂部の刺突により刻まれる。口縁部の横位突帯や縦位文様区画帯を構成するのが刻目突帯文である点では，Ⅰc類の要素を有している。しかし，縦位の微隆起突帯が添付される点や，「逆『く』」「く」の字状文の屈曲が簡易化した特異な文様形態がⅠ

第 101 図　Ⅰ類土器実測図（54）

464

465

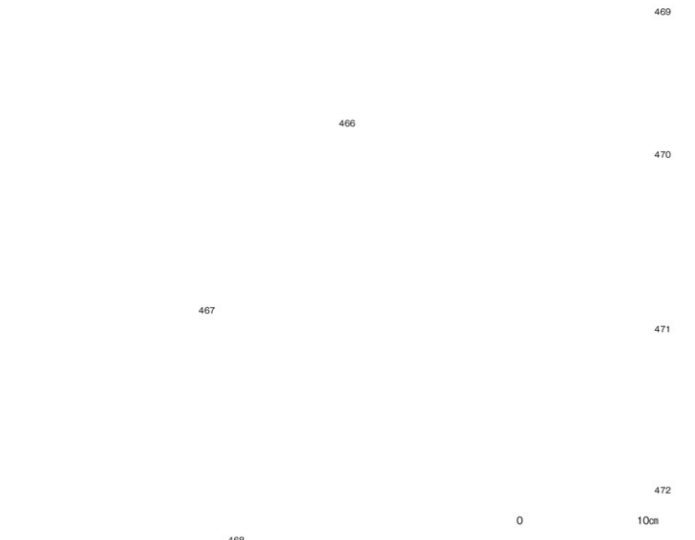


第 102 図　Ⅰ類土器実測図（55）

c 類よりⅠｄ類の資料群により近似する。463 は，口縁部に円弧状の横位微隆起突帯文が２条廻らされる。この土器については鞍谷段階の可能性もある。

イ　胴部

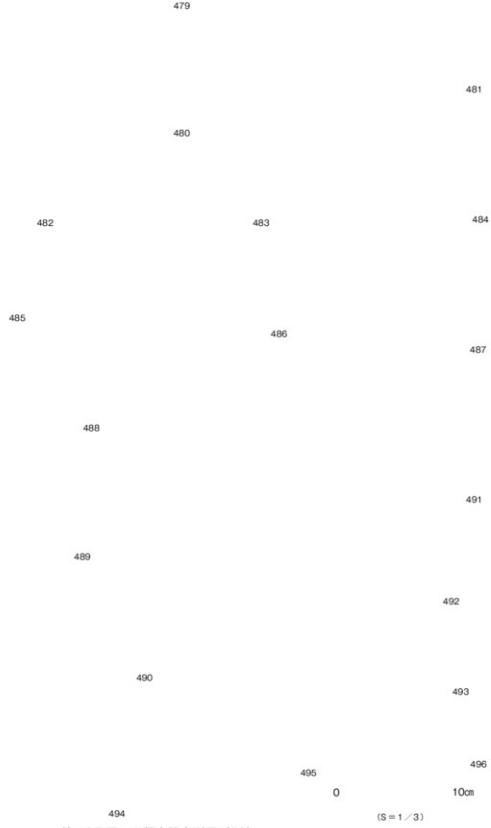
464 ～ 515 は，Ⅰｄ - ２-(1)類に該当する。「『米』の字」状文の交点部分を含む資料である。１～２条の平行する微隆起突帯文が垂下する文様区画文帯間に「『米』の字」・「◇形」状文を描き，斜行線は「逆『く』」「く」の字状を呈し交わらないのがほとんどである。497 ～ 509 には縦位・横位の鋸歯状文が捉えられる。510 ～ 514 には微隆起突帯文に外郭沈線文等付随せず，外郭沈線文が施される同Ⅰｄ類の他の資料と異なる。ほとんどの微隆起突帯文が素突帯文であるのに対して，515 は微隆起突帯文にヘラ状工具による極細の刻みを施す。528 は，突帯上に極めて丁寧で微細な刻みが施され，刻み施文後に突帯が器面にしっかり押圧・添付される。516 ～ 539 は，「『米』の字」状文の交点部を含まない資料である。534 ～ 539 は，微隆起突帯文が途切れたり，左右の対向する斜行微隆起突帯文が１点に収斂していったりすることから，胴部下半から底部に至る資料と思われる。



$^{14}C = 4490 \pm 35yrBP$

第 103 図　Ⅰ類土器実測図（56）

第 104 図　Ⅰ類土器実測図（57）



第 105 図　Ⅰ類土器実測図（58）

497

498

499

500

501

502

0 10cm

503 504 (S＝1／3)

第 106 図　Ⅰ類土器実測図（59）

第 107 図　Ⅰ類土器実測図（60）

515

516

517

518

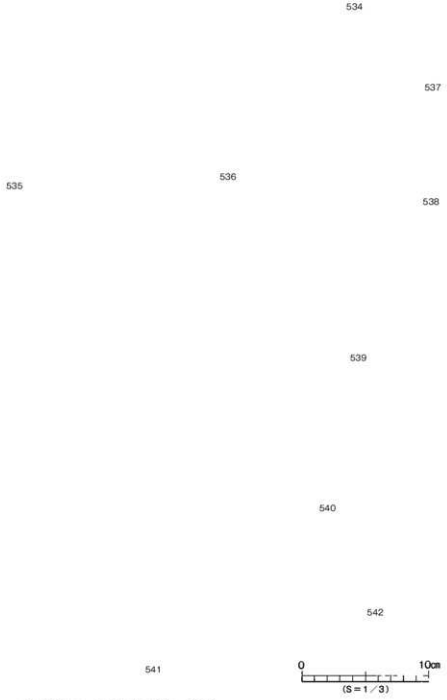
519

0　10cm
(S＝1／3)

第 108 図　Ⅰ類土器実測図（61）

540・541 は，垂下する縦位刻目微隆起突帯文と胴部を廻る横位刻目微隆起突帯文が垂直（⊥）に交わり，Ⅰd- 2-⑶類に相当し，鞍谷段階の可能性もある。器面に光沢感や硬質感があり，暗褐色の色調等特徴的な胎土である。胎土は，593 ～ 595 に酷似する。542 には縦位微隆起突帯文が捉えられないが，540・541 同一個体の可能性があると考えられる。

第109図　Ⅰ類土器実測図（62）

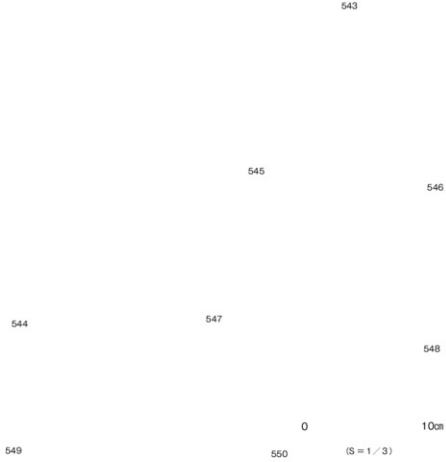


第 110 図　Ⅰ類土器実測図（63）

⑥　Ⅰｅ類

ア　口縁部

543 は，沈線文により文様を施す一方，口縁部には４条の横位刻目突帯文を廻らせるⅠｄ類とⅠｅ類に折衷的資料である。沈線文により全面施文した後に，口縁部に横位突帯文を廻らすことが捉えられることから，沈線



第 111 図　Ⅰ類土器実測図（64 ）

551

552

553

0　　10cm

(S＝1／3)

第112図　Ⅰ類土器実測図（65）

文主体の資料に含めⅠe-2-(2)類に捉えたい。鋸歯状文や円弧状文，斜行沈線等多様な文様形態を縦走並行させる。544～561は沈線文のみ施され，Ⅰe類に属する可能性が高いと思われる資料である。544の『米』の字」状文を構成する斜行線は交差し，Ⅰe-2-(1)類に該当する。口縁部の横位施文は円弧状を呈し，胴部下半も同様に円弧状の沈線文が施されることから，Ⅰc類に中心的に見られる文様形態に類似し，強い関連性を見る。545～547は小片のため断定できないが，「『米』の字」状文・「◇形」状文をモチーフとするⅠe-2-(1)類に該当する可能性が高い。548は，沈線文が傘状に左右に弧状を描く。549・550は，一定幅を有する縦位の沈線が垂下することから，(1)・(2)類の文様モチーフを採る。551は，山形状突起直下に円弧文が施され，Ⅰb類220・Ⅰc類245の資料の文様構成に似る。552・553は，同一個体と思われ，鞍谷段階が比定される。横位の円弧状の沈線文を口縁部と胴部で対向させる文様モチーフは，貝殻連点文・突帯文・微隆起突帯文等異なる施文形態でも類例を見ない。口唇部の山形状突起添付文直下から胴部下半まで，数条の縦位の直線文や弧状文が垂下する。554～561は，口縁部に沈線文のみ捉えられる小片資料である。施文形態が沈線文であることより本項で取り扱うが，文様形態分類上，いずれの群でも沈線は施されることから，他の類の一部が含まれている可能性がある。

イ　胴部

562～568は「『米』の字」状文を有し，Ⅰe-(1)類に相当する。569～572は小片で「『米』の字」状文の交点部が捉えられないが，Ⅰe-2-(1)類が想定される。571は，胴部中位を貝殻連点文が横走する。基本的文様構成は，571同様に「◇形」状文に捉えられる。574は胴部中・下位に2条の横位貝殻連点文が施される。方形状及び円形状の文様が若干横位に並列し，「逆『く』」「く」の字状文との関連性も捉えうる。胴部中位の横位貝殻連点文直上の鋸歯状文は，Ⅰc・Ⅰd類等によく見られる文様構成に同じである。575は，胴部中位に横位貝殻連点文が施され「◇形」状文の文様を有する点で，571の文様構成に似る。4基の円形文を施し，船元式土器の円形浮文との影響が考えられる。576は，胴部中位に円弧状の

554

556

557

555

558

562

559

560

563

561

565

564

567

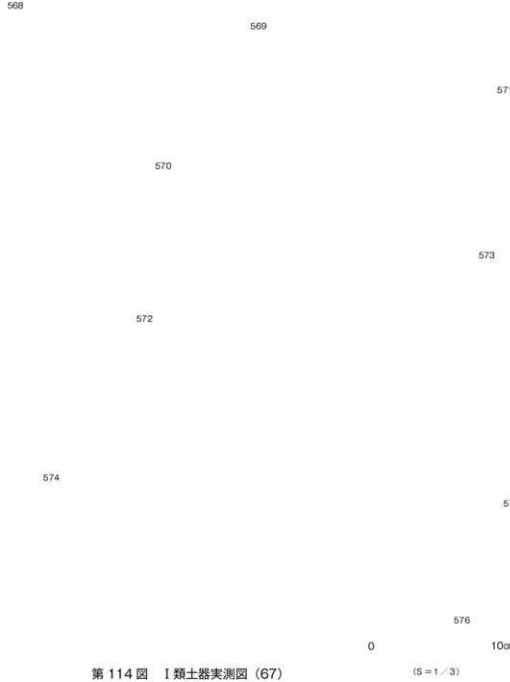
0

10cm

566

(S＝1／3)

第 113 図　Ⅰ類土器実測図（66）



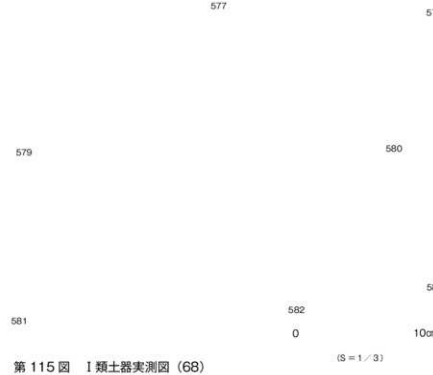
第 114 図　Ⅰ類土器実測図（67）

沈線文が廻らされ，２条の平行する縦位沈線文を複数施し，間を斜行沈線文で埋める点など，(2)類の文様形態を採る。577･578 は，胴部を横位の円弧状･鋸歯状文が廻る。580 の斜行する綾杉状の文様は，575 の同文様に似ることから，同一個体の可能性もある。581・582 は横位沈線文が，583 は横位の波状文及び沈線文が胴部を廻る。

⑦　Ⅰｆ類

ア　口縁部

584・585 は，口縁部に円弧状の微隆起突帯が横走し，波頂部から２条の平行微隆起突帯文が垂下する。胴部を中心として相交弧文が施される。胴部中位には，横位の微隆起突帯文が廻り，波頂部直下から垂下する２条の



第 115 図　Ⅰ類土器実測図（68）

縦位微隆起突帯文と垂直（⊥）に交わることから，Ⅰf-2-(3)類に相当する。586 は，口縁部を中心とした縦位の隆起条突帯文及び横位の円弧状微隆起突帯文・相交弧文が捉えられる。586 は，口縁部の横位弧状文が沈線文で作出される。587 ～ 589 は小片資料で，全体の文様構成は捉えられない。本類は鞍谷段階に比定される。

イ　胴部・底部

590・591 は，胴部に並行する横位の相交弧文が施される。591 は，底部資料であるが，尖底を呈する。

⑧　Ⅰg類

ア　口縁部・胴部

592 は，口縁部に円弧状の微隆起突帯文及び沈線文が横走し，胴部には 1 条の微隆起突帯文が廻らされる。縦位・斜位の微隆起突帯文は施されない。文様モチーフや器形，胎土の色調等はⅠf類に酷似するが，相交弧文が施されない。本遺跡 1 点のみの出土である。593 ～ 595 は，口縁部の微隆起突帯文が極長の長方形状に作出される。本遺跡では，他に同様な資料が確認できないことから，3 点とも同一個体の可能性が高い。磨いたような光沢感や硬質感，暗褐色を呈する色調等胎土が極めて特徴的である。以上の 592 ～ 595 は，鞍谷段階に捉えられる。596 ～ 599 は，上述の文様形態に含まれない，もしくは小片のため不明の資料である。596 は口唇部の器厚を，摘まみ上げにより薄く仕上げる。口縁部には 1 条の微隆起突帯文が廻る。597 は，ヘラ状工具により刺突文を施す。一見ランダムに施したように見える刺突文であるが，縦・斜位の 6・7 個の刺突連点を一つの施文単位として意識して施した可能性が考えられ，それを横走させたように捉えられる。そのように捉えた場合は，貝殻連点文や相交弧文の施文方向との関連性がうかがえる。一方，縦・斜位の連点施文の方向を重視した場合，船元式土器の縄文を擬した可能性も生まれてくる。598 には刻みを有する円形浮文が添付される。599 は，沈線及びやや微隆起突帯文の凹凸が捉えられる。

584

586

585

587

589

588

0 10cm
(S＝1／3)

第116図　Ⅰ類土器実測図（69）

590

591

592

594

593

596

595

598

599

597

0

10cm

(S＝1／3)

第 117 図　Ⅰ類土器実測図（70）

（2） Ⅱ類土器（第118図～第143図）

器面を貝殻腹縁の施文による条痕で調整する土器である。前期の轟式土器に類似するが，器壁が厚いなど異なる特徴を有する。ここでは中分類として５つに分類し，さらにその中で細かいものについては小分類を行ったものもある。

① Ⅱａ類土器（第118図600～第128図665）

突帯が施されるものの中で，基本的には口縁部に突帯を横位に貼り付けるものである。

この中には地文としての条痕文が縦位に施されるものも含まれる。これは船元式土器の特徴の一つに縦走する縄文があげられるが，これを意識したとみられる文様の可能性がある。

600～622は口縁部に１条や３条の直線的な突帯が横位に貼り付けられるものである。

600は，口縁部が外傾し，口縁部下位で締まり，胴部が張るものである。縦方向の貝殻条痕を施した後，口縁部にはやや波状を呈する２条の突帯を横位に施す。内面には横方向の貝殻条痕を施す。601も600とほぼ同様の特徴を持つが，口縁部に横位に貼り付けられた２条の突帯が，より強い波状を呈する。602・603・605・608は，口縁部に１条の横位の突帯が貼り付けられるもので，胴部には明瞭な縦条痕が施される。この中で603には補修孔がみられる。

604・606・607・610は，口縁部に２条ないしは３条の横位の突帯が貼り付けられるものである。609も600とほぼ同様の特徴を持つが，胴部にはやや斜め方向の条痕を施す。

611は，口縁部に２条の突帯を貼り付け，頸部には明瞭な屈曲部を有する。キャリバー形に近い器形を呈するものである。内外面ともに横方向に貝殻腹縁による条痕を施す。612は，浅い刻み目のある突帯を横位に２条貼り付けるものである。

615は口縁部に１条の刻み目突帯を横位に貼り付けるものである。刻み目は深く施されるもので，Ⅰ字形の爪形文の可能性もあるものである。616～618については，口縁部に１条の突帯を貼り付けるものである。基本的には縦条痕（条線）が施される。

619は口縁部に２条の突帯を横位に貼り付けるものであるが，内外面ともに条痕がナデ消されている。620は，口縁が内弯しており頸部を有するもので，口縁部ではなく頸部に刻み目突帯を貼り付ける。口唇部にはわずかに刻み目が施される。口縁部から頸部の間には条痕が不規則に施されている。

621・622は比較的小型のもので，口縁部に１条の突帯を横位に貼り付けるものである。いずれも外面には縦位の条痕が施される。623は，頸部に鋭い稜のある屈曲を有するもので，口縁部には５～６条の突帯を横位に貼り付けるものである。口唇部には刻みを施し，数カ所に突起を有する。器形はⅢ類土器（船元式土器）に類似しているが，胴部には斜位の条痕を施されるので本類に分類した。

624～627は波状と直線的な突帯の両方が施されるものである。この中で特に624については縦位にも突帯が貼り付けられるものである。628～631は口縁部に数条の刻み目突帯が貼り付けられるもので，胴部外面には横位に条痕が施される。この中で628・629については，突帯が３条施されることが確認できる。

632～642は波状の突帯を口縁部に横位に貼り付けるものである。637については１条，633～636・638～640については２条，641については３条の突帯が施される。また，642は波状と直線的なものの両方の突帯が４条貼り付けられるもので，頸部を有する。この中で，特に632・633については，キャリバー状の器形を呈するもので，特徴的である。635は口唇部に酒杯状の突起が貼り付けられるもので，突帯の頂部には連続して刺突が施される。

643～650は，やや複雑な突帯を貼り付けるものである。643～645は波状突帯による区画内に吸盤状文様をの貼り付けるもので，その中でも645は吸盤状文様が３つ貼り付けられるものである。646～649は横位のみでなく，縦位にも突帯を貼り付けるものである。

651・652は刺突が施された微隆起状の突帯が貼り付けられるもので，地文には縦条痕（条線）が施される。

653～656は口縁部付近の破片である。少なくとも１条の突帯を横位に波状に貼り付けるものである。波状突帯の波底部の直下には，吸盤状の貼り付け文がなされるが，657がまさにその部分である。658･659については，Ⅰａ類（深浦式土器日本山段階）の可能性もあるが，吸盤状の貼り付け突起がみられるため本類に分類した。

661は胴部以下のものである。頸部には横位に突帯を１条貼り付ける。数箇所においては波状に変化させるもので，653～656に類似する。

662は口縁部に刻みを施すもので，横位に３条の突帯を貼り付け，同部には縦位に条痕（条線）を施す。

664・665は口縁部に指押さえを施す突帯を横位に２条貼り付けるもので，口唇部には比較的狭い間隔で連続して突起を貼り付けて波状口縁を作出するものである。わずかに残存する胴部には縦条痕（条線）がみられる。

② Ⅱｂ類土器（第129図666～第132図694）

基本的には無文のもので，突帯や沈線が施されないものを本分類とした。

器面調整でみた場合には，縦位の条痕が施されるものと，不規則な方向に条痕が施されるものがある。また，器形でみた場合には頸部のくびれを有するものと有しな

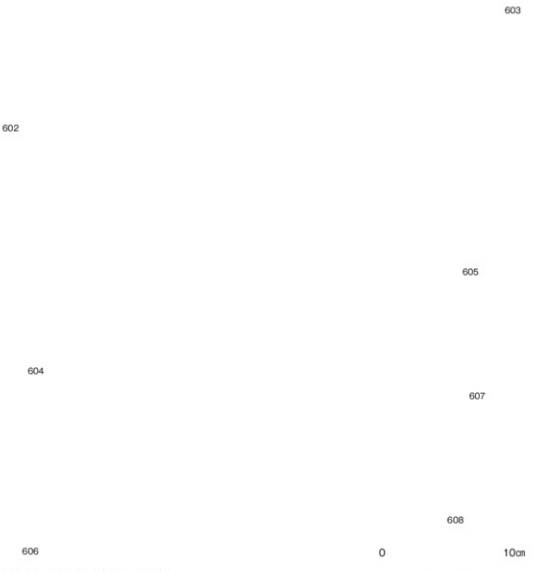
600

601

0　　10cm

(S＝1／3)

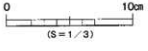
第118図　Ⅱ類土器実測図（1）



第 119 図　Ⅱ類土器実測図（2）

609

610



第 120 図　Ⅱ類土器実測図（3）

614

611

615

616

612

617

613

618

0 10cm

(S＝1／3)

第121図　Ⅱ類土器実測図（4）

619

620

622

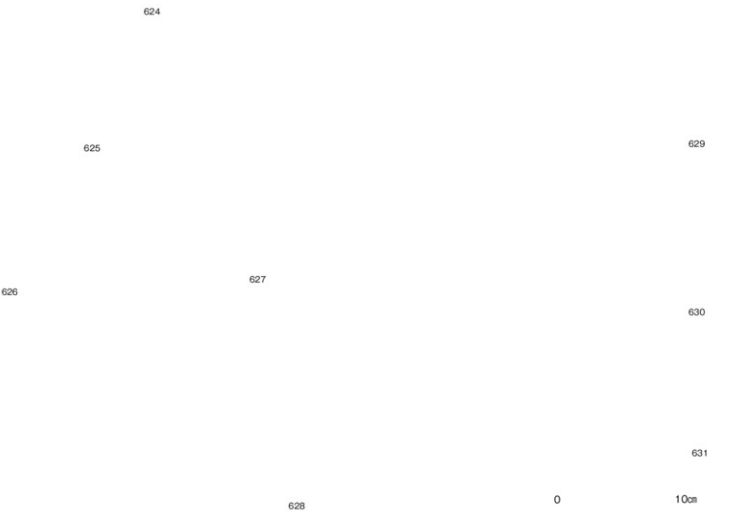
621

623

0　　10cm

第 122 図　Ⅱ類土器実測図（5）

（S＝1／3）



第 123 図　Ⅱ類土器実測図（6）

632

633

634

635

636

0　　10cm

第 124 図　Ⅱ類土器実測図（7）

（S＝1／3）

637

638

639

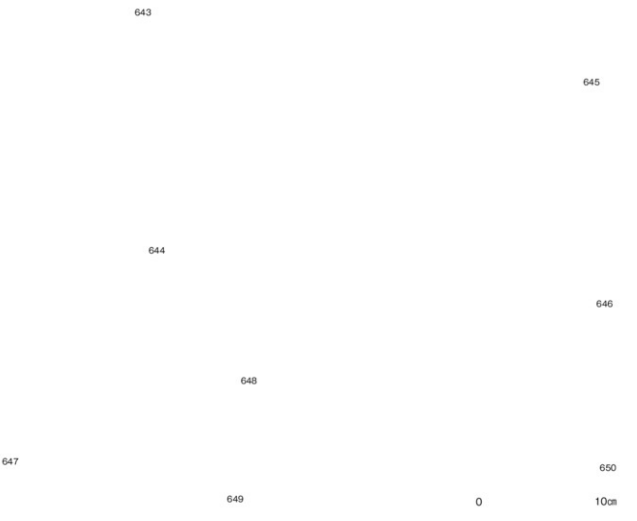
640

641

642

第125図　Ⅱ類土器実測図（8）

0　10cm
(S＝1／3)



第 126 図　Ⅱ類土器実測図（9）

652

651

654

655

653

657

656

658

659

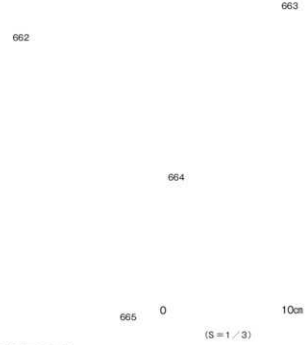
660

661

0 10cm

第 127 図　Ⅱ類土器実測図（10）

（S＝1／3）



第128図　Ⅱ類土器実測図（11）

いものがある。ここでは，無文のものについて一括した。666 ～ 696 が本類に該当する。

676 は弱いくびれを有するもので，口唇部には刻みが施される。内面には斜位もしくは横位に貝殻腹縁による条痕による器面調整が施される。681 は完形のものである。やや外反する口縁のもので，弱いくびれを有する。底部は口径に対して小さく，丸底に近い平底を呈する。

③　Ⅱｃ類土器（第 133 図 695 ～第 140 図 740）

胴部を一括したものである。ここではさらにⅡｃ①類とⅡｃ②類の２つに細分した。

ア　Ⅱｃ①類土器（第 133 図 695 ～第 137 図 724）

器形が寸胴のものを本分類とした。695 ～ 724 が本類に該当する。基本的には縦位に条痕が施されるものよりも不規則に施されるものが多い。この中には 709 のように斜位と縦位の条痕を組み合わせて菱形の条痕文を呈するものも含まれる。

イ　Ⅱｃ②類土器（第 138 図 725 ～第 140 図 740）

頸部がくびれるものを本分類とした。725 ～ 740 が本類に該当する。縦位に条痕が施されるものの方が不規則に施されるものよりも多い。この中で，735 ～ 738・740 は頸部に屈曲部があり，特に 736 については鋭い稜を有するがいずれも横位に条痕を施すものである。また，731 は斜位と縦位の条痕を組み合わせて菱形の条痕文を呈するもので，Ⅱｃ①類で前出の 709 と類似するものである。

729 については，付着炭化物の年代測定を行っている。補正年代で 4550 ± 40yrBP であった。

666

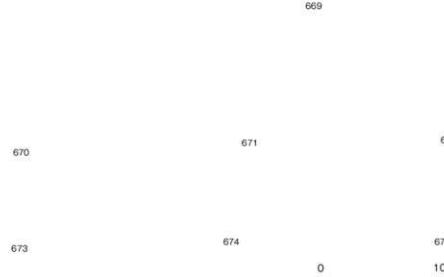
667

668

0　　10cm

(S＝1／3)

第 129 図　Ⅱ類土器実測図（12）



第 130 図　Ⅱ類土器実測図（13）　(S＝1／3)

④　Ⅱｄ類土器（第 141 図 741 ～第 143 図 771）

底部を一括した。ただし，無文の丸底・尖底の底部は全て本類に含めたため，本来はⅠ類（深浦式土器）になる底部も含んでいる可能性もある。今後の検討材料としたい。ここではさらに，Ⅱｄ①類と，Ⅱｄ②類，Ⅱｄ③類の３つに細分した。

ア　Ⅱｄ①類土器（第 141 図 741 ～ 749）

尖底のものを一括した。741 ～ 749 が本類に該当する。746 については，完形として実測したが，擬口縁の可能性も考えられる。また，741 ～ 745 は乳房状突起に近い印象のものも含まれており，検討を要する土器である。

イ　Ⅱｄ②類土器（第 142 図 750 ～ 756）

丸底でも尖底でもなく，その中間になるものを一括した。750 ～ 756 が本類に該当する。750 は丸底に近い平底のもので，胴部の大きさと比較して小さな径の小さい底部である。前出のⅡｂ類の 679 の底部に類似するものである。751 は 750 と比較するとやや大きな径の底部であるが，平底ではなく丸底との中間の様相を呈するものである。底部から胴部に向かって開き気味に向かい，胴部の中頃で直立に近い立ち上がりを示すものである。

676

677

679

678

681

680

683

682

0　10cm

(S＝1／3)

第 131 図　Ⅱ類土器実測図（14）

684

685

687

686

688

690

691

689

694

0

10cm

692

693

(S＝1／3)

第 132 図　Ⅱ類土器実測図（15）

第 133 図　Ⅱ類土器実測図（16）　（S＝1／3）

705

706

707

708

0　　10cm

第134図　Ⅱ類土器実測図（17）　（S＝1／3）

709

710

711

0　　10cm

第135図　Ⅱ類土器実測図（18）　（S＝1／3）

712

713

714

715

717

716

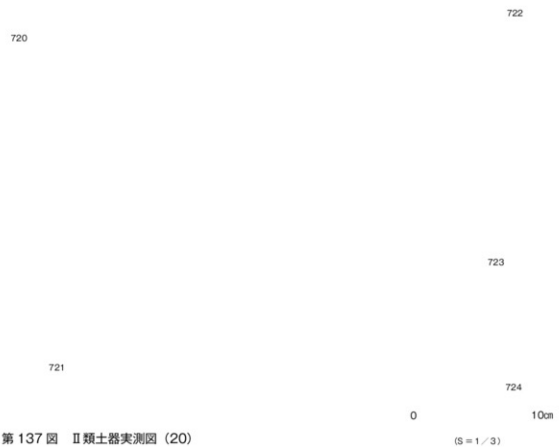
719

718

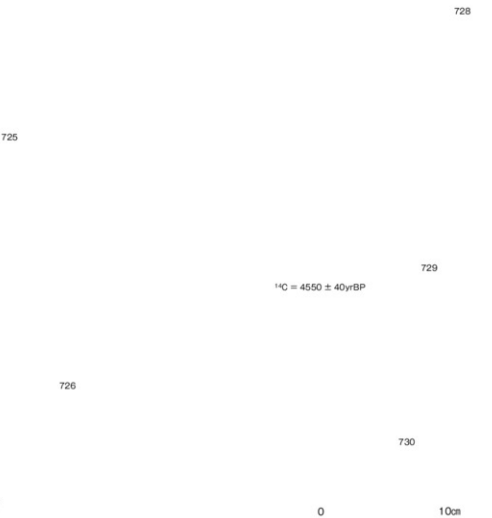
0　　10cm

(S＝1／3)

第 136 図　Ⅱ類土器実測図（19）



第 137 図　Ⅱ類土器実測図（20）



第 138 図　Ⅱ類土器実測図（21）

731

732

733

734

0 10cm

(S＝1／3)

735

第 139 図　Ⅱ類土器実測図（22）

736

737

738

739

740

0 10cm
(S＝1／3)

第 140 図　Ⅱ類土器実測図（23）

742

741

743

744

745

748

746

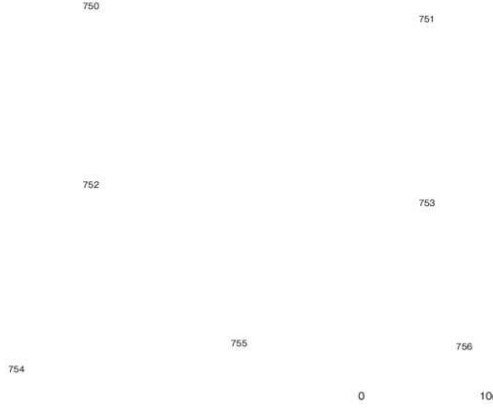
747

749

0　　10cm

（S＝1／3）

第 141 図　Ⅱ類土器実測図（24）



第142図　Ⅱ類土器実測図（25）

ウ　Ⅱd③類土器（第143図757～771）

丸底のものを一括した。757～771が本類に該当する。759については，完形として実測したが，擬口縁の可能性も考えられる。

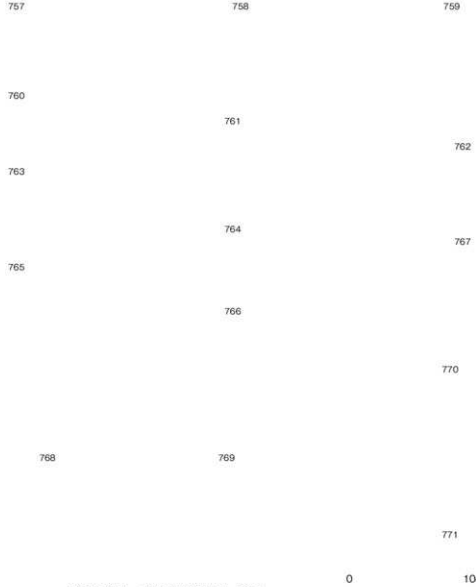
また，770については若干のはりだしを有しているので検討を要する。

（3）Ⅲ類土器（第144図～152図）

①Ⅲa類土器（第144図772～774）

Ⅴb層中に出土した土器中，縄文や爪形文等の施文により構成される土器群で，既知の土器編年研究の中で，鷹島式土器に比定されると考えられる土器である。O－5・6区において3点出土している。

772は波状口縁のもので，口縁部外面には爪形の施文された突帯が施され，さらにその下部にはC字形を呈する爪形文の施文された幅約1cm程度の突帯が施される。773・774は，口縁部のつくりは772と同様であるが，口縁部内面の縄文の節の中に，繊維痕が観察される。本来の鷹島式土器であれば，縄文の節の中には繊維痕が観察されないが，当資料には顕著にみられるので注目される。



第 143 図　Ⅱ類土器実測図（26）

② Ⅲｂ類土器（第 144 図 775 ～第 152 図 825）

繊維痕の顕著な縦長の節の目立つ縄文が施されるもので船元Ⅱ式にあたる。ただし，「条線」が施されるものについても，「条痕」よりも船元式の影響が強いものと考え，本文類に含めた。頸部には屈曲があるが，多くは屈曲の稜が鋭いものでなくやや緩やかな屈曲を有する。口縁部などに，貝殻の頂部による圧痕が施されることも多い。なお，頸部屈曲が鋭いものについても，全体的な特徴から本類に分類したものもある。本類の多くは胎土に角閃石が含まれるので，この特徴を持って本類に分類したものもある。

775 は，わずかに外反する口縁部を持ち，波状を呈するもので頸部には明瞭な稜がみられる。地文にはＲＬの縄文が施される。口縁部については，上端を口縁に沿うように肥厚させ，その部分に貝殻頂部によって連続した圧痕が施される。波頂部から肥厚部を経てやや下がった部分（口唇部と頸部の中間）には刻み目突帯が環状に貼り付けられる。また，その左右にも縦位の刻み目突帯が

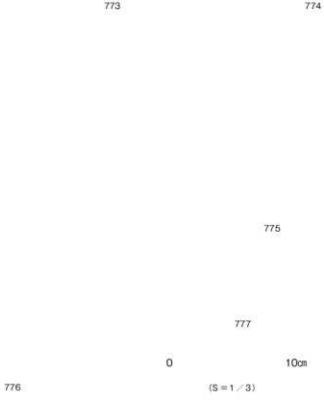
貼り付けられる。そのほかにも刻み目突帯は頸部に沿って連弧文のように波状に貼り付けられている。なお，これらの刻み目突帯上の施文は，基本的には連続した爪形文であるが斜め爪形文であるのが特徴である。裏面に目を向けると，波頂部の裏面には指頭によるものとみられる凹みがみられる。

776は，頸部付近の破片で，775と同様に頸部に沿って波状に刻み目突帯が貼り付けられる。777は，平底を呈する底部である。外面にはＲＬの縄文が施される。これらは，775と同一個体の可能性のあるものである。

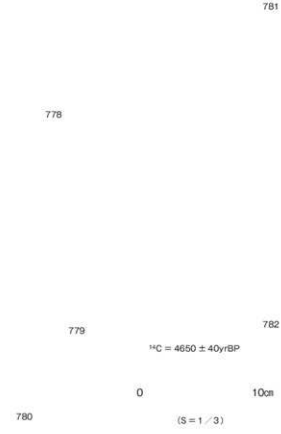
778は，わずかに外反する口縁部を持ち，波状を呈するもので頸部のくびれは非常にゆるいものである。口縁部を肥厚させ横位に貝殻の殻頂部による圧痕を連続して施す。口縁部の波頂部の左右にはわずかな突起が貼り付けられる。口縁部から頸部付近にかけては，連続爪形文が鋸歯状に施される。また，波頂部からもまっすぐに一条の連続爪形文を下ろす。口縁部内面には，縦位の縄文が施される。779は，胴部片である。残存部の最上部には連続爪形文が鋸歯状に施される。780・781は778と同一個体の可能性があるもので，口縁部を肥厚しその部分に貝殻の殻頂部による連続した圧痕を施す。

782は，ほぼ完形に復元できるものである。花弁状の波状口縁を有するもので，高めの波頂部が5つあったことが想定できる。肥厚された口縁部には貝殻殻頂部による圧痕が横位に連続して施される。その下部には，口縁部に沿って波状に巡る二条の突帯が貼り付けられる。二条の突帯のうち，下部の突帯の上部に接して連点が施される。また，突帯が頸部に接する部分から口縁部の波底部にかけても縦位の突帯が貼り付けられる。本資料については付着炭化物の年代測定を行っている。補正年代で4650 ± 40yrBPであった。

783は頸部内面に鋭い稜を持つものである。口縁部下には口縁部に沿って，胴部には縦位に突帯が貼り付けられる。特に縦位の突帯は，上方に向かって幅広に厚くなっていくもので，本来は存在したとみられる波状口縁の波頂部から下げられるものである。頸部屈曲部以下の胴部には，一見凹線にみえる文様が施される。この凹線状の文様は，円形を呈する刺突具を押し引きしながら施文しているもので，船元Ⅱ式に特徴的なものである。本資料についても付着炭化物の年代測定を行っている。補正年



第144図　Ⅲ類土器実測図（1）



第 145 図　Ⅲ類土器実測図（2）

代で 4380 ± 35yrBP であった。

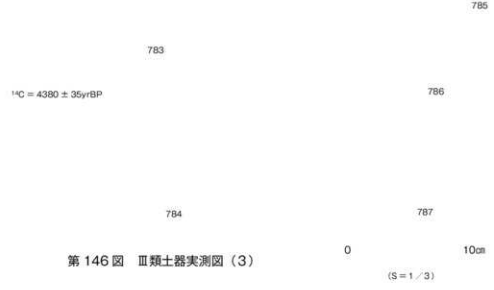
784 は，頸部以上しか残存していないが，キャリパー状の器形を呈するとみられる。一部が波状を呈する口縁部を肥厚し，その部分には横位の連点が施される。波頂部の直下には，爪形文による刻み目突帯が環状に貼り付けられる。連続爪形文については斜め爪形文・Σ字形であり，円形列点文も押し引きしながら施文していることから，船元Ⅱ式との類似性が高いものである。

785 ～ 787 は，口縁部を肥厚させて文様帯を作出するもので，口唇部の斜め方向に向かって酒杯状突起を意識したとみられる突起部分を持つ。文様帯には，横位に連点が施される。風化のため残存状況は良くないが，胴部には地文に縄文とみられる文様が施される。

788 は，口縁部は残存していないが，口縁部付近から頸部を経て胴部までが残存するものでキャリパー状の器形を呈する。口縁部下には少なくとも一条の横位の突帯が貼り付けられる。789 は，788 と同様にキャリパー状の器形を呈するが，頸部内面には稜を持たない。口唇部の一部にトサカ状の突起が貼り付けられ，その下部の外面には口縁部に沿って横位に二条の素突帯が巡らされる。地文には船元式土器に特有の粗い撚りを持つ縄文原体によって施文された縄文が施される。790 は平底を呈する底部である。上記の 788 ～ 790 は，接点は見いだせなかったが，文様や胎土などの類似性から同一個体の可能性が高いものである。

791 は，キャリパー状の器形を呈するが，頸部のくびれが非常にゆるいものである。口縁部から頸部にかけて横位・縦位・斜位に刻み目突帯を施すもので，連弧文を意識している可能性がある。

792 は口縁下にD字形の爪形文を施す。さらにその下部にはC字形の刻みを有する突帯が横位に貼り付けられる。なお，口縁下のD字形の爪形文は，突帯上に施文されたC字形の爪形文の施文具を反転させて，押し引いた可能性が高いものである。また、口縁部に少なくとも 3



第 146 図　Ⅲ類土器実測図（3）

条の刻み目突帯が縦位に貼り付けられる。本資料の付着炭化物については年代分析を行っており，補正年代で4680 ± 30 ｙｒＢＰの結果が出ている。

793 は口唇部や縦位に施された突帯上に，爪形文を施文するものである。口縁部下には，横方向に３列に渡って連点が施される。なお，この土器については，内面に指紋の可能性のある同心円状の「ひだ」のようなものが観察されたので，顕微鏡及びモデリングによる分析を行っている（写真６）。

794 は，連弧文を意識したとみられる胴部文様に連続した斜め爪形文を施すものである。795 は 794 に類似するもので，外面の地文に粗い縄文を施文した後に，胴部と肥厚させた口縁部施文帯には斜め爪形文を，口縁部内面には縄文を施文するものである。

796・797 は，口縁部下に口縁に沿って横位に一条の刻み目突帯を貼り付けるもので，接点は見いだすことができなかったが同一個体とみられるものである。突帯上の刻みは，ヘラ状の工具によってＩ字形に深く刻まれる。地文は粗い縄文である。胴部には連弧文を意識したみられる文様が波状に施される。この文様は，Σ字形を呈するものである。明確な頸部は有していないので在地産の可能性が高いが，船元Ⅱ式の特徴であるＩ字形とΣ字形の文様が一個体に施される点で重要である。

798 も，口縁部下に口縁に沿って横位に一条のＩ字形の刻み目のある突帯を貼り付けるものである。796・797 と同様に，地文には粗い縄文が，その上には連弧文を意識したとみられる連続したΣ字形の文様が波状に施される。

799･800 は，頸部から外反気味に直行するものである。口縁部下には二条の波状の突帯を横位に貼り付ける。器形的には船元式の範疇に入らないものであるが，胴部に縄文を施文することから，本分類で扱った。

801 ～ 804 は，外面は無文であるが，内面口縁下に爪形文を加えるものである。器形はゆるい頸部から外反気味に口縁部が直行するものである。この特徴は，関西地方にはあまり見られないもので，瀬戸内から北部九州によく見られるものである。

805 は，口縁直下に二条の横位の刻み目突帯を貼り付けるもので，キャリパー状の器形を呈するが，頸部のくびれは非常にゆるいものである。刻み目はＩ字形を呈しており，爪形文を意識したものと考えられる。胴部には，貝殻による条線が施される。806 は，805 と同一個体の可能性のあるもので，口縁直下に横位に２条の刻み目突帯を貼り付けるものである。刻み目はヘラ状の工具によって縦位に施されるもので，爪形文を意識している可能性があるが，直線的なものとなっている。

807 は口縁部には直線的に，頸部には連弧文状にΣ字形の文様を連続して横位に施文するものである。縦方向の条線が明瞭に観察される。808 は波状口縁を呈するもので，口縁部と頸部に連弧文状に相交弧文を施す。また，波状部分からは垂直に突帯を下ろす。809 は頸部に把手状の突起を貼り付けるものである。810 は口縁部に波状に沈線を施すもので，比較的明瞭な頸部を有する。

811 ～ 821 は，縄文を施文する胴部を一括した。縦位に縄文を施すものと斜めや横方向に不規則に施すものが

789

788

790

791

0　　10cm

（S＝1／3）

第 147 図　Ⅲ類土器実測図（4）

写真6　土器 793 の内面に残る指紋の痕跡

792

^{14}C = 4680 ± 30yrBP

794

795

796

797

799

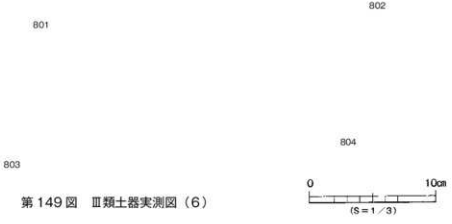
800

798

0　10cm

(S = 1／3)

第 148 図　Ⅲ類土器実測図（5）



第149図　Ⅲ類土器実測図（6）

ある。816は，明瞭なＲＬの縄文が観察される。本資料については付着炭化物の年代測定を行っている。補正年代で4780 ± 40yrBPの結果が出ている。817・818は，外面に撚りの大きな縄文を施文するものである。本分類に属する他の土器とは大きく印象を異にする。818については付着炭化物の年代測定を行っている。補正年代で4650 ± 40yrBPの結果が出ている。

822は平底を呈する底部である。外面には縄文が施されるが，これらの縄文にはやや斜め方向に走るものもみられる。823と824も底部片である。やや上げ底であるが，外面にはわずかに縄文が観察される。825は平底を呈する底部で，やや外側に向かって張り出しがみられる。

（4）当遺跡における各分類土器の垂直分布（第153～161図）

当遺跡では，縄文時代前期末～中期前半の土器が数多く出土している。ここでは，その中で本章に属する土器について分類ごとの垂直分布を示す。

第153～161図は，最も遺物の集中するＮ区からＴ区にかけて２ｍごとに垂直分布を作成したものである。１マスの大きさは横方向が10ｍで縦方向が10cmとした。つまり，縦方向が実際の10倍に引き延ばされていることになる。

その結果，レベルごとの明確な各分類のレベル差は大きなものではないが，おおよそＩａ・ｂ類土器（深浦式日木山段階）が最も下部で，Ｉｃ～ｅ類（深浦式石峰段階），Ｉｆ・ｇ類（深浦式鞍谷段階）となるに伴って上部に分布することが明らかとなった。

当遺跡の地形を見た場合，図の左側が万之瀬川，右側が台地側であるので，予想されたところでは右から左にかけて傾斜することが想定された。しかしながら，実際にはＴ区からＱ区にかけては左から右へと遺物の分布が傾斜していることが明らかとなった。また，そのほかの地区においても５・６区ではほぼ水平に近い平坦な分布を持つものの，その左右ではまた傾斜して分布することが判明した。これは，「万之瀬川→自然堤防（上水流遺跡）→後背湿地→台地及び河岸段丘」という地形を横断している可能性がある。つまり，上水流遺跡は自然堤防上に立地しているので，平坦なところばかりではなく場所によっては川側へと傾斜したり，後背湿地側へと傾斜したりする地形を含んでいるという地形的な特徴をつかむことができた。

また，遺物の分布についても，自然堤防上で生活を営み，その周辺の川部分および後背湿地に向かって使用の完了した土器を廃棄していたという想定も不可能ではない。今後，この事実を踏まえてさらに検討を加えることでより生活の実態に迫ることが可能となるかもしれない。

805

806

807

808

809

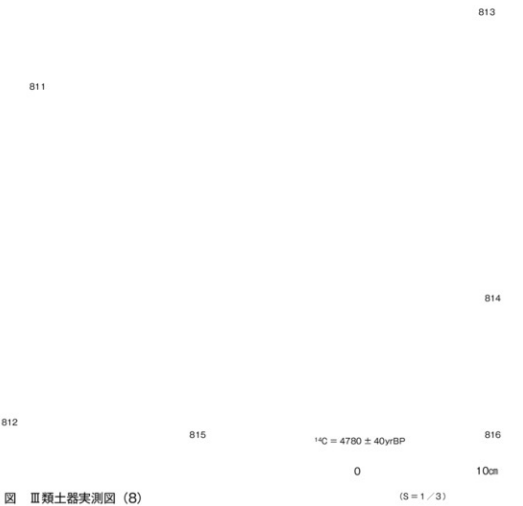
810

0

10cm

(S＝1／3)

第150図　Ⅲ類土器実測図（7）



第 151 図　Ⅲ類土器実測図（8）

817

818

$^{14}C = 4650 \pm 40yrBP$

822

819

823

825

820

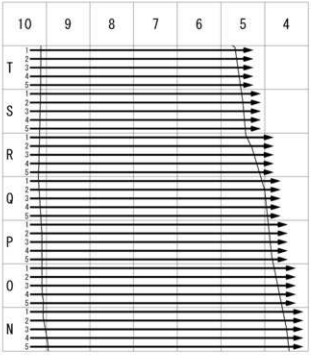
824

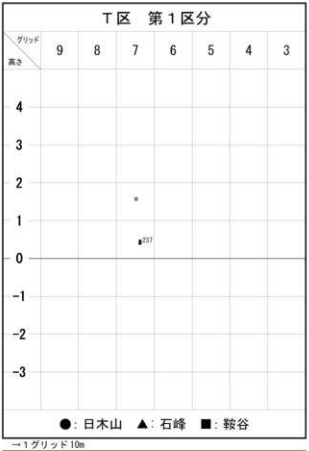
821

0 10cm

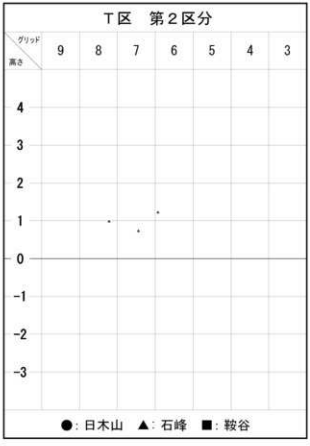
(S＝1／3)

第152図　Ⅲ類土器実測図（9）

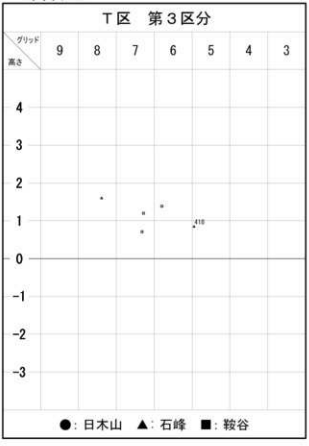




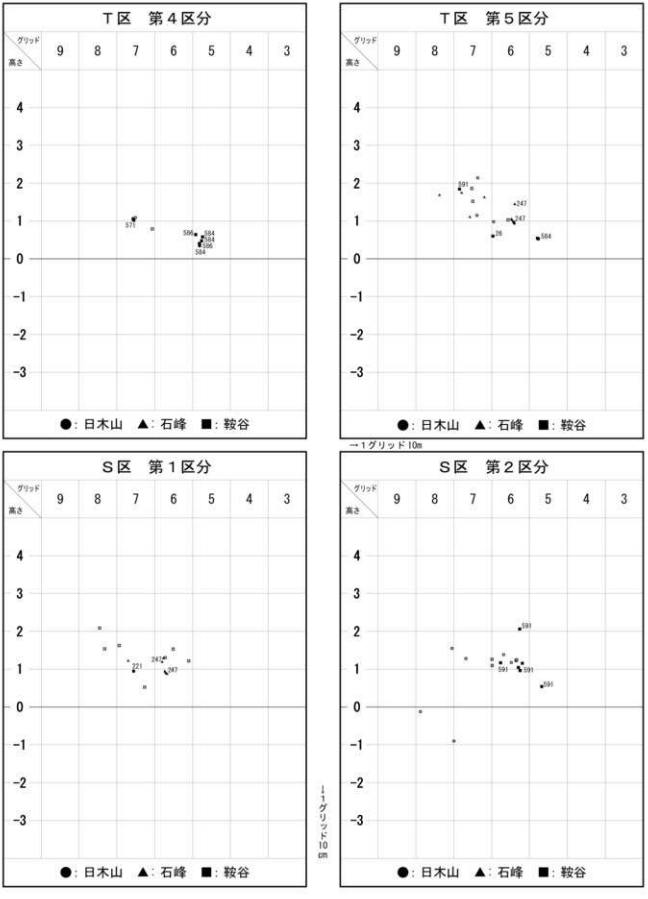
→１グリッド10m



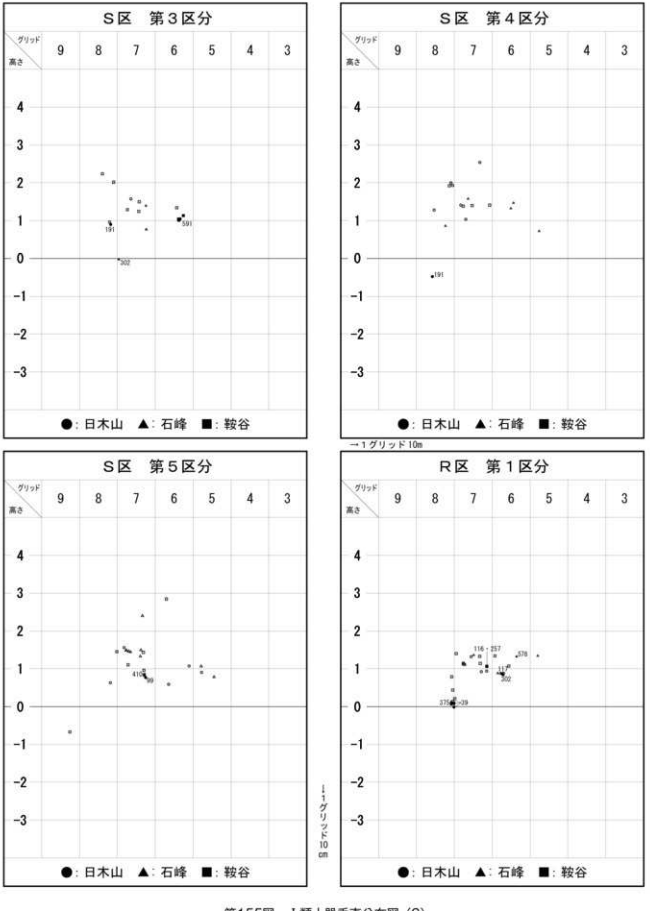
↓１グリッド10m



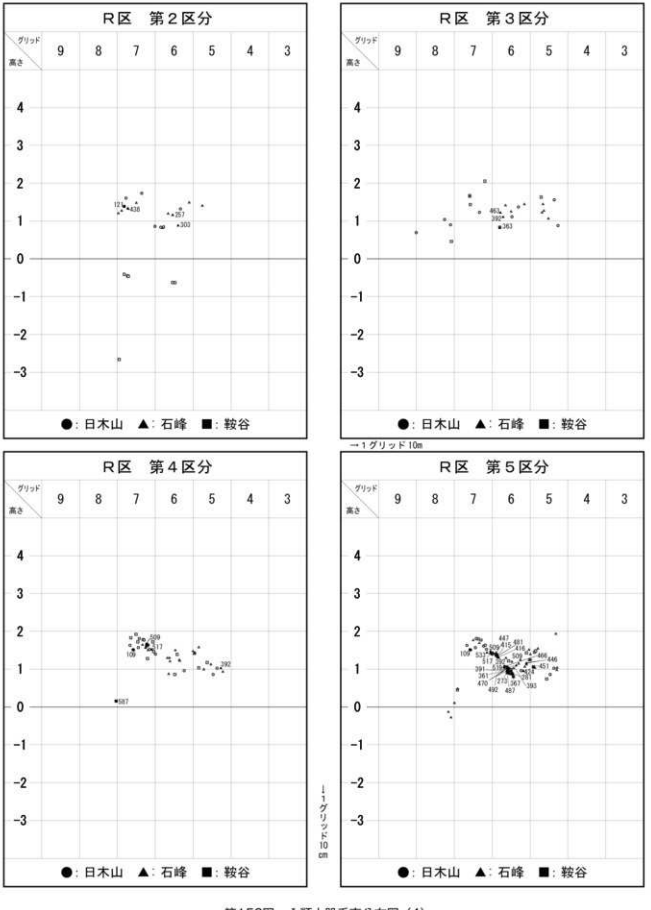
第153図　Ⅰ類土器垂直分布図（1）



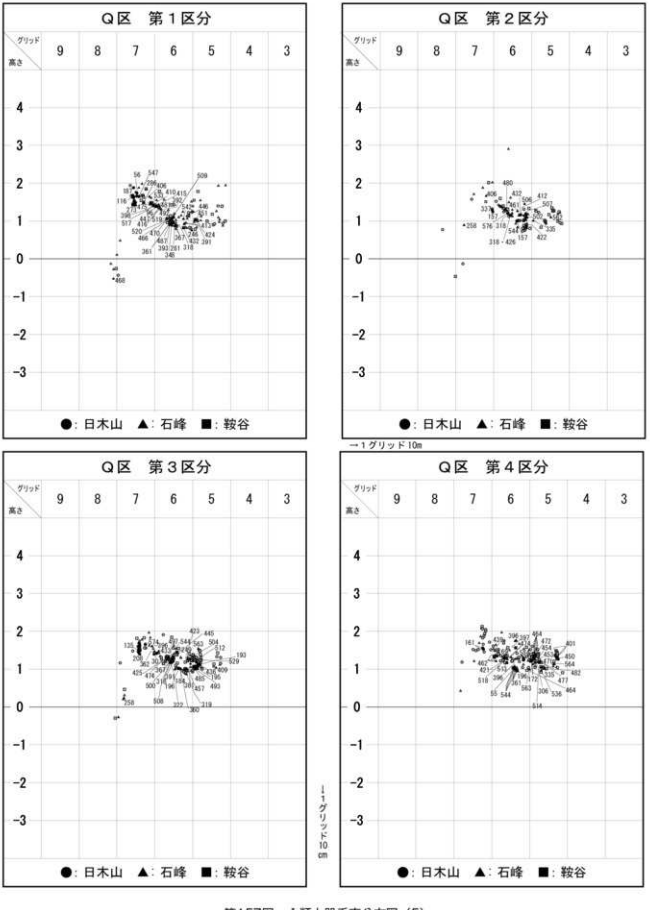
第154図　Ⅰ類土器垂直分布図（2）



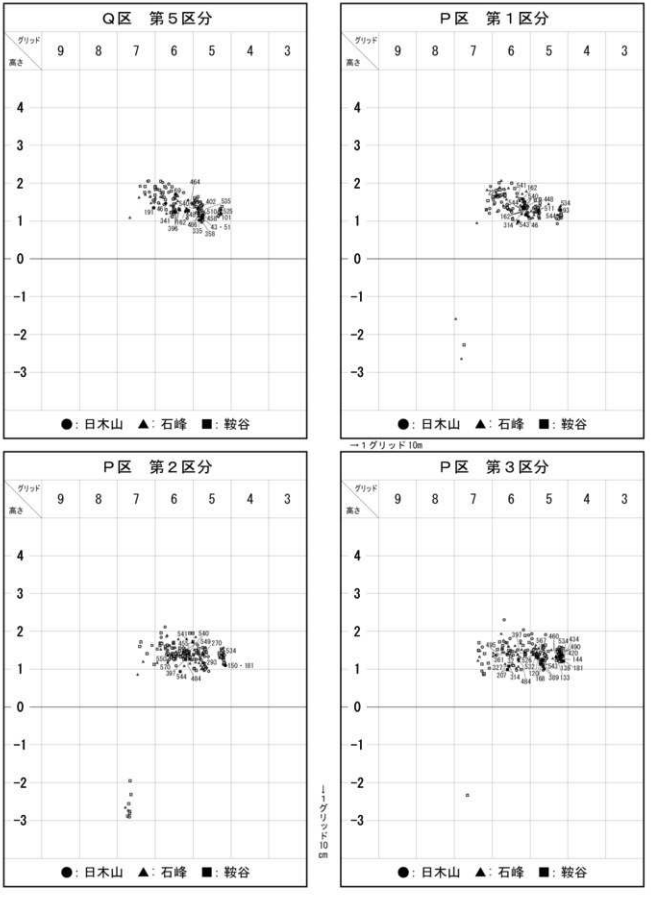
第155図　Ⅰ類土器垂直分布図（3）



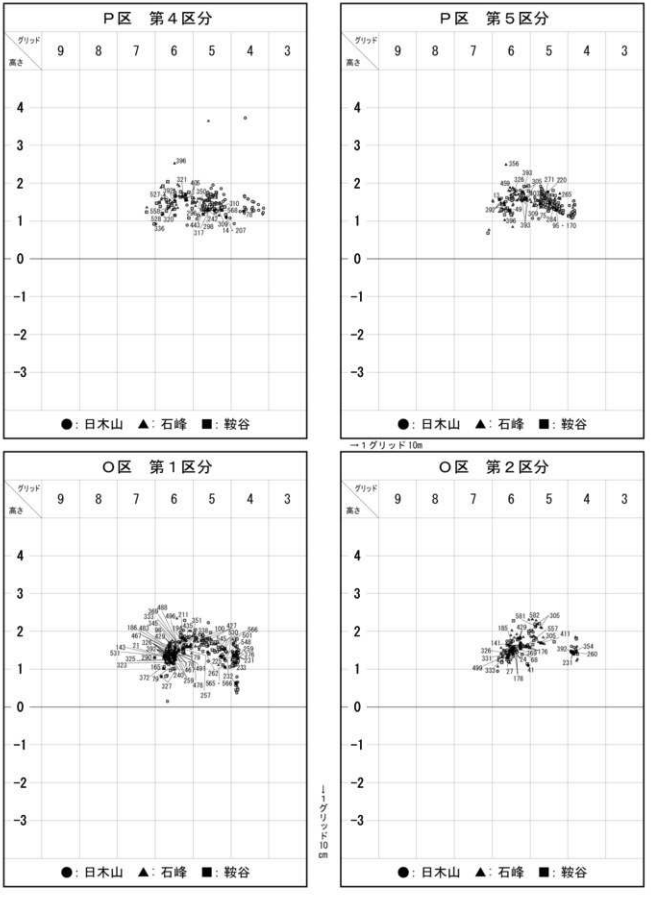
第156図　Ⅰ類土器垂直分布図（4）



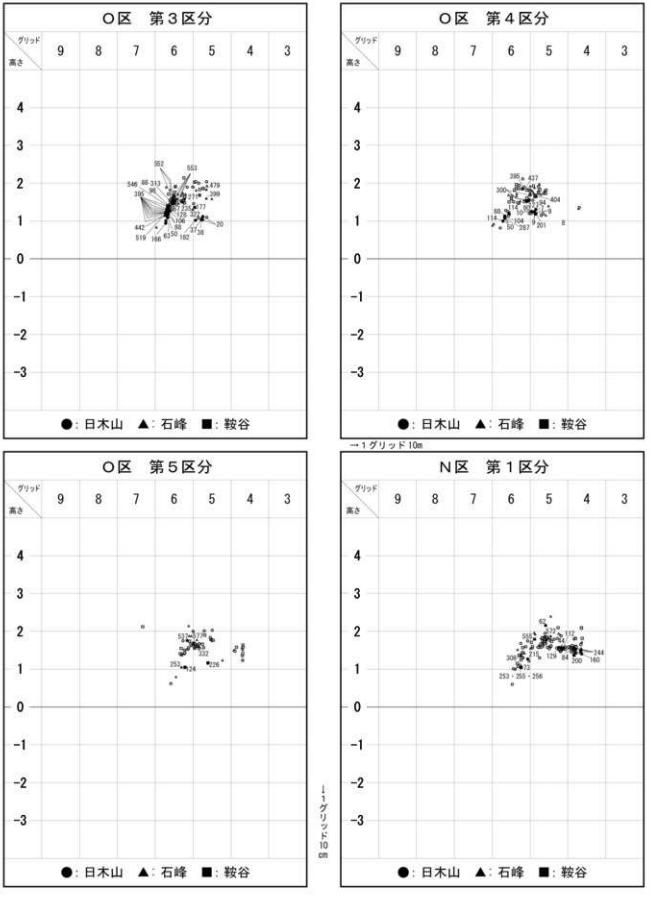
第157図　Ⅰ類土器垂直分布図（5）



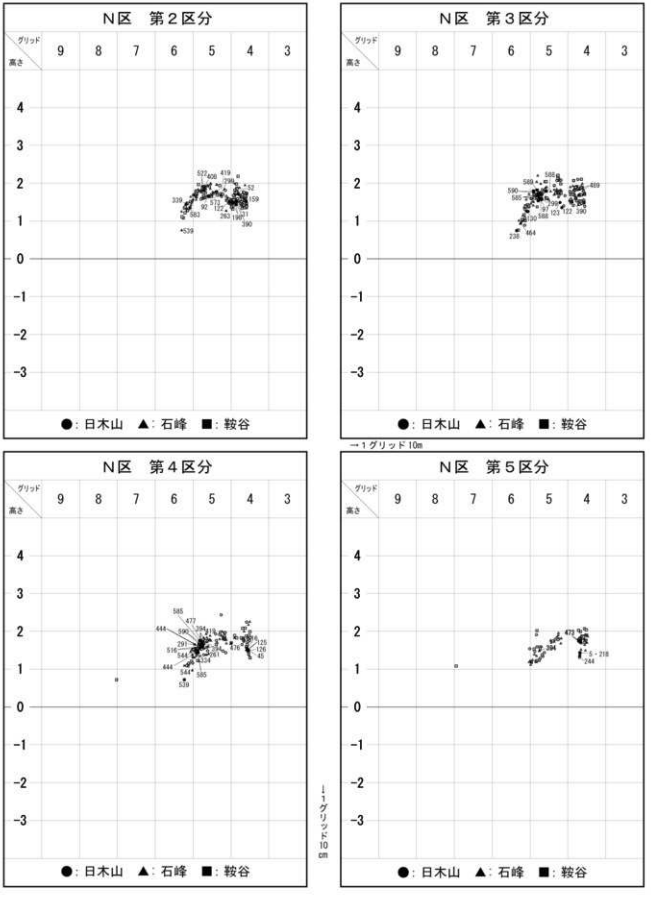
第158図　Ⅰ類土器垂直分布図（6）



第159図　Ⅰ類土器垂直分布図（7）



第160図　Ⅰ類土器垂直分布図（8）



第161図　Ⅰ類土器垂直分布図（9）

2　石器

（1）　概要

Ｖｂ層から出土した石器及び剥片類は総点数1,628点を数える。剥片石器では石鏃が最も多く出土し，礫石器では磨石が最も多い。使用される石材は，剥片石器の場合黒曜石と安山岩が主体を占め，礫石器の場合頁岩と砂岩が多い。

はじめに，石材ごとの分布について述べたい。これらの出土状況図は第162図～第167図に示した。ただし，グリッド一括で取り上げた遺物も多数あるので厳密な分布状況ではない。石材の詳細については，第２章に一括にして示してあるのでこれを参照されたい。黒曜石Ⅰは，上牛鼻系である。調査区全体から出土しているが，Ｏ・Ｐ－５区にまとまりがみられる。この石材の母核および石核が出土してしており，製品もみられるので製作を行っていた可能性がある。黒曜石Ⅴは西北九州系である。Ｐ・Ｑ・Ｒ－６・７区にまとまりが見られる。安山岩では，Ⅰ類とⅣ類が比較的多い。Ⅲ類には，黒色の安山岩で上牛鼻系とみられる石材が数点みられた。

なお，石材分布と器種分布に著しい変化は認められず，土器の分布とも大きな変化はない。遺構の分布にも概ね合致しており，これら全体が一帯となって展開している現像と理解できる。

以下，器種ごとに説明を加えていきたい。

2　石鏃（第179図）

総点数10点が出土し，この内７点を図化した。

全体形状については，正三角形に近い形態のⅡ類（１～４）・長身で二等辺三角形に近い形態のⅡ類（５～７）と大きく２つに分けることができた。

１は，円基形にもみえるもので，側縁部に押圧剥離による鋸歯縁状の加工が施される。主要剥離面を一部に残していることから未製品の可能性もある。２は基部に抉りが施されており脚部の作出が明瞭なものであるが，左脚部の一部と右脚部のほとんどが欠損する。３は基部に広く浅い抉りがみられる。裏面の側辺の一部に押圧剥離が施されないことと，主要剥離面を一部に残していることから未製品の可能性もある。４は基部に三角形の抉りが施され，脚部の作出が明瞭に意図されているものである。５は先端部の一部に欠損がみられる。基部には浅い抉りがみられる。６は，基部の抉りが広めに浅く施されるもので，脚部の作出が浅い。また，中央部にある厚みを除去しきれてない。７は基部に深めの抉りが施されるが，両方の脚部とも欠損する。

3　石匙（第179・第180図）

総点数12点が出土し，この内７点を図化した。基本的には横形と縦形に分類されるので，前者をⅠ類，後者がⅡ類，そしてその他をⅢ類として分類を行う。Ⅰ類は９・10が，Ⅱ類は８が，Ⅲ類には11～14が該当する。

８はめのう系石材（鉄石英）の縦長剥片を加工したもので，つまみ部に関しては押圧剥離によって作出されるが，刃部についてはほとんど未加工に近いものである。９・10は深い押圧剥離によって刃部が作出されるものである。11～14は表裏に剥離面を大きく残すもので，縦形とも横形ともつかないものである。11・13は側辺に刃部加工を施すものである。12はつまみ部は丁寧に作出されるが，刃部の加工は粗い。再加工の段階で放棄された可能性のあるものである。

4　石錐（第180図）

総点数２点が出土し，この内１点を図化した。15は錐部が先端に向かって鋭角になるものであるが，先端は丸みを帯びている。非常に粗いつくりで，側辺部にわずかな加工を施すのみである。断面についても三角形を呈するもので丸形とはなっていない。

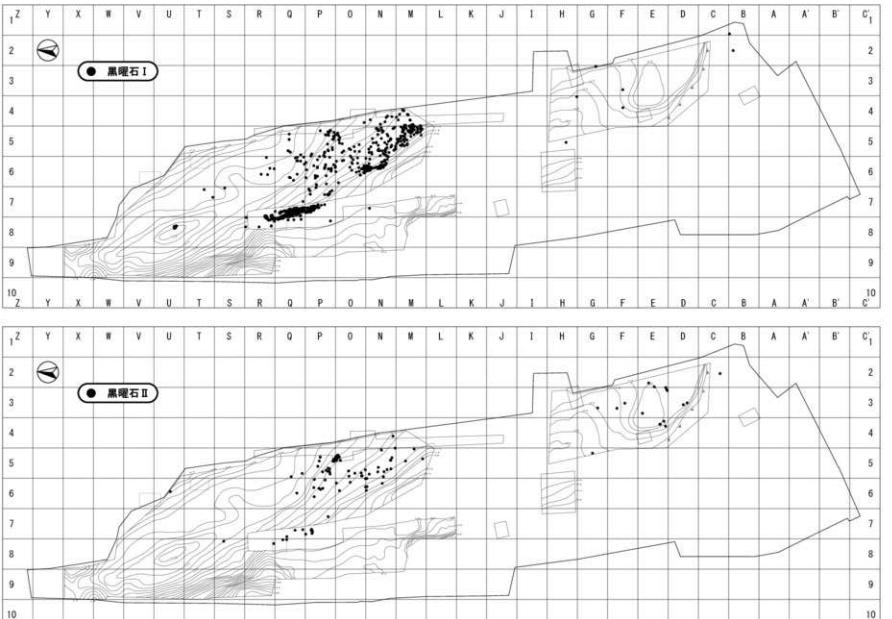
5　スクレイパー（第181～第183図）

素材剥片に対して連続して両面あるいは片側から剥離を施し，刃部を作出しているものを一括した。総点数24点が出土し，その内15点について図化した。石材としては，黒曜石が８点，次いで頁岩が８点であった。16・18～22は横長剥片を用いたものである。このうち16・19・21については片側からの加工によって刃部を作出する。また，17･18･22～29は両面からの加工によって刃部を作出する。

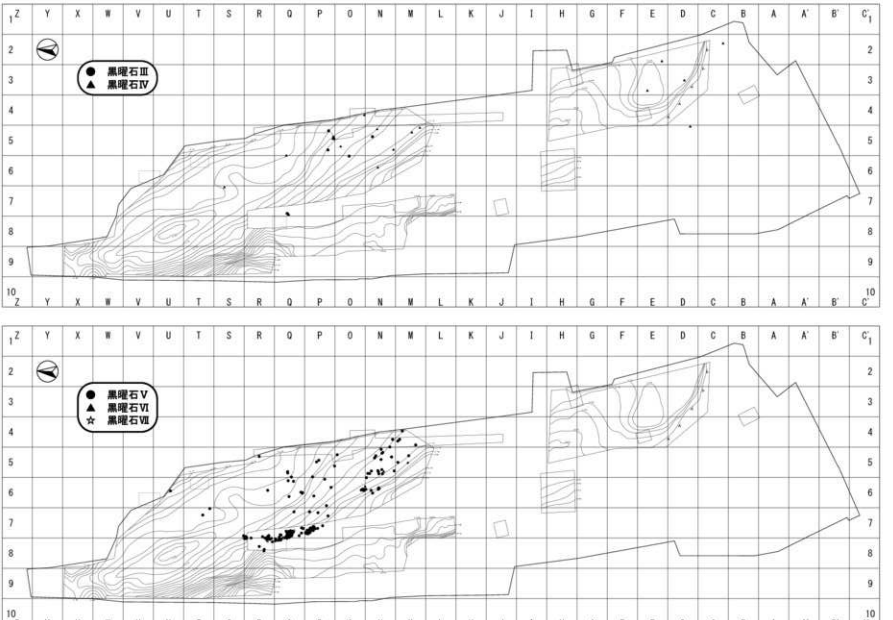
17は尖底状の三角形を呈し，下縁部と左側辺に両面交互剥離による丁寧な刃部形成が認められる。20は楕円状の剥片の下縁部に両面から弱い加工を施すもので二次加工剥片の可能性もあるものである。22は右側辺に両面交互剥離による丁寧な刃部形成が認められるもので，横刃形の可能性のあるものである。23～29は母指状スクレイパーとも呼称されるもので，下縁部や側辺部などには両面交互剥離による比較的丁寧な刃部形成が認められる。特に、23については石斧にも流用できるサイズの剥片を素材とし，縁辺部に簡単な二次加工を施し刃部を形成するものである。

6　二次加工剥片（第184図）

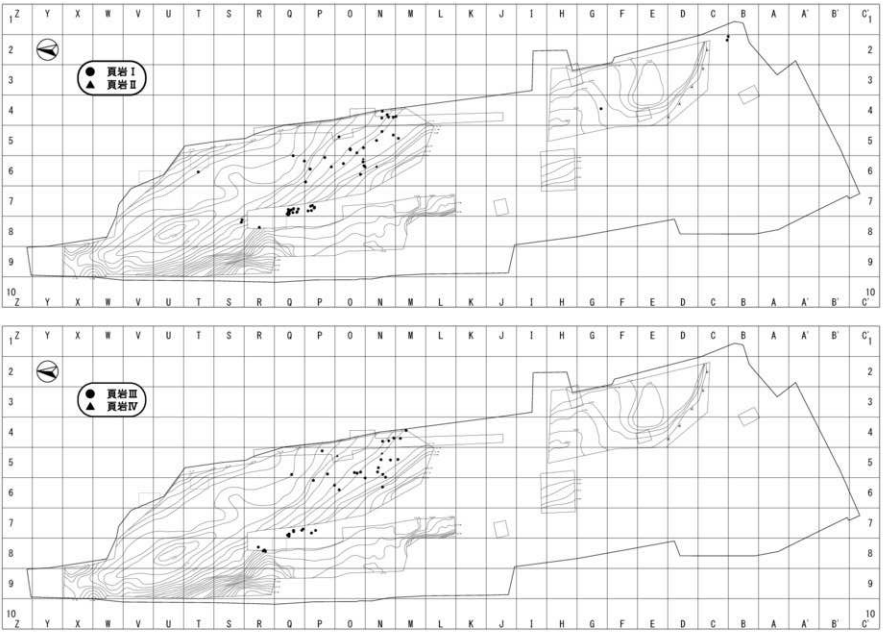
総点数32点が出土し，その内６点を図化した。30は素材剥片の下縁部に粗い加工が施されるものであるが，加工ではなく使用痕の可能性もある。31は右側辺部に両面交互剥離による刃部形成が認められるもので，石匙の可能性もあるが，明確でないため本類に含めた。32は左側辺部に粗い加工が施されるものである。33は上部にはつまみ部に近い形状を有するもので，石匙の可能



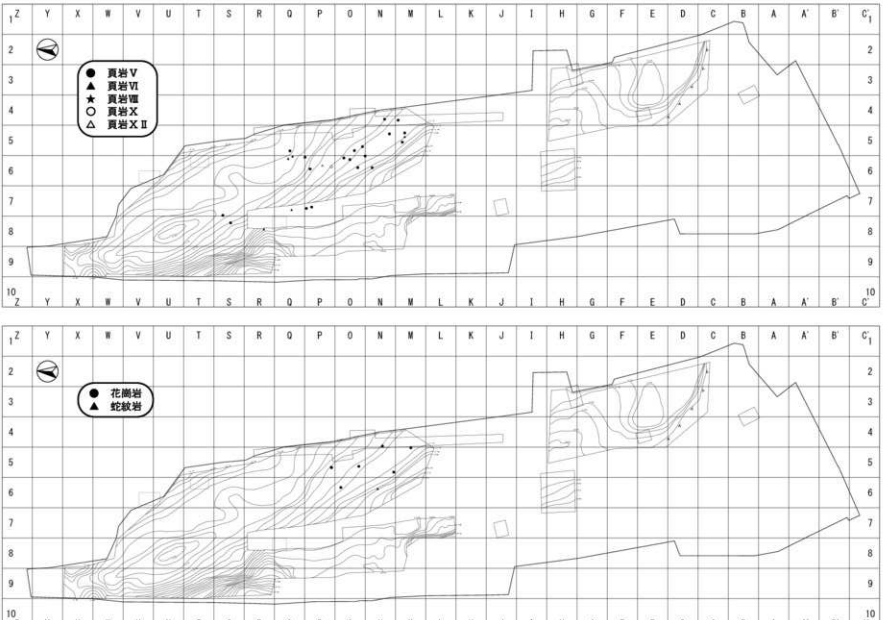
第162図　石材別出土状況図（1）



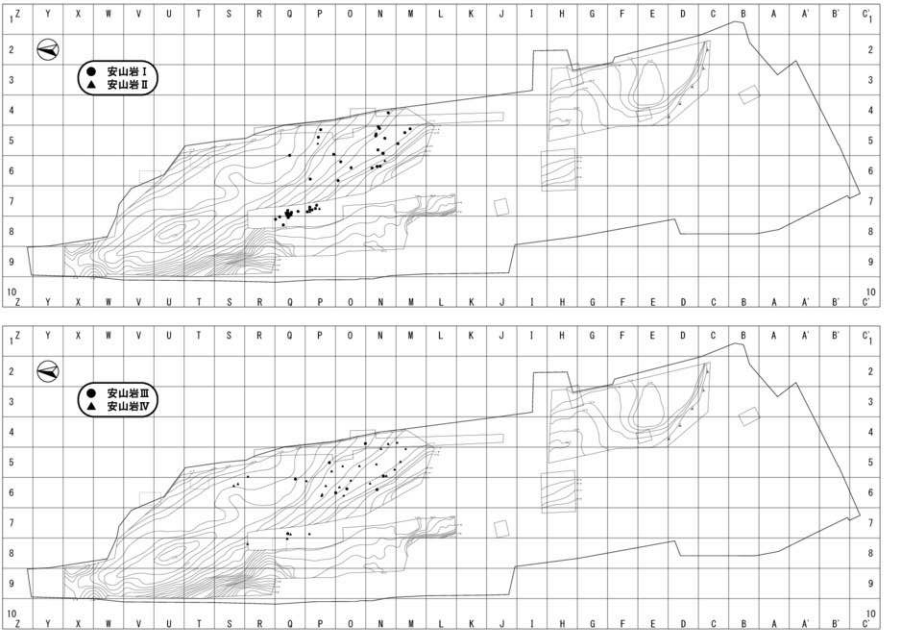
第 163 図　石材別出土状況図（2）



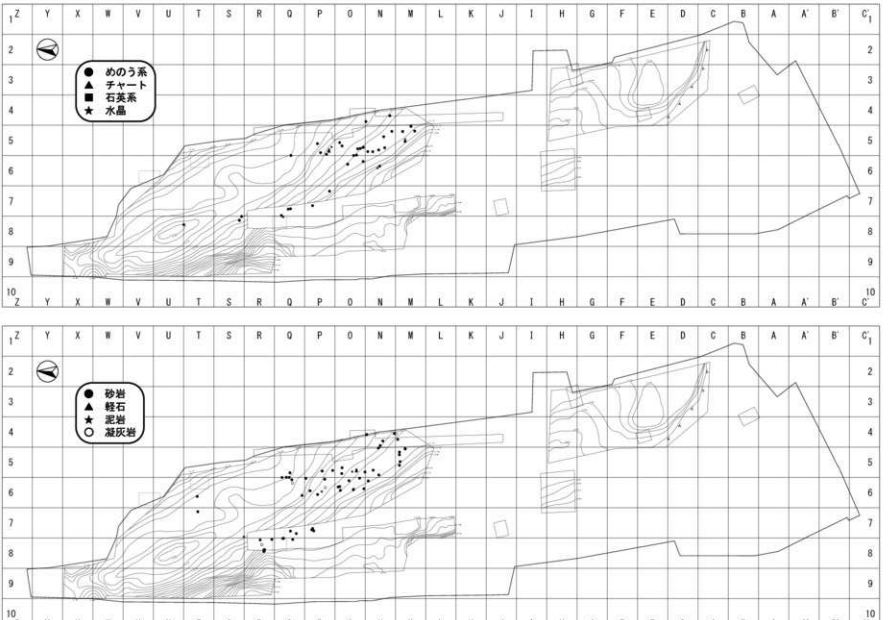
第 164 図　石材別出土状況図（3）



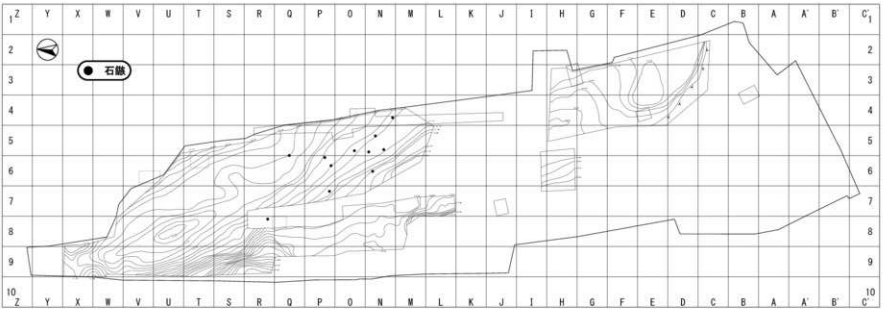
第 165 図　石材別出土状況図（4）

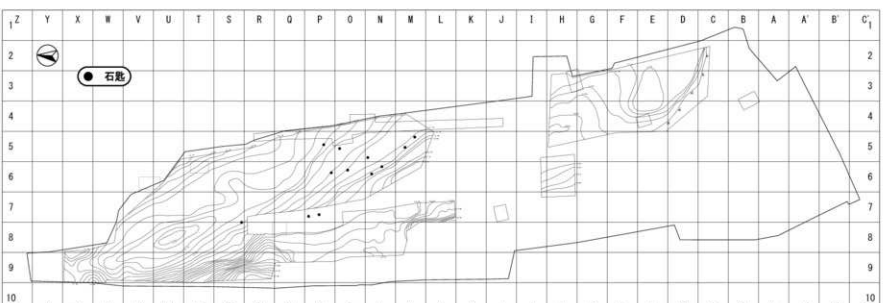


第 166 図　石材別出土状況図（5）

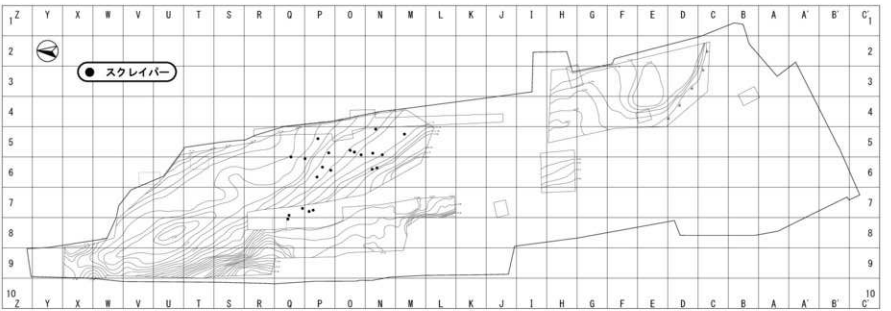


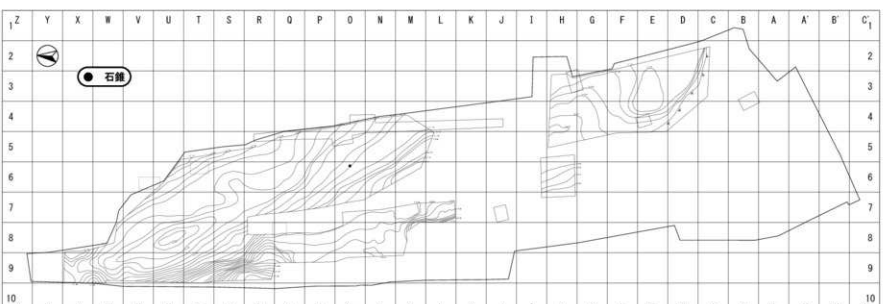
第 167 図　石材別出土状況図（6）



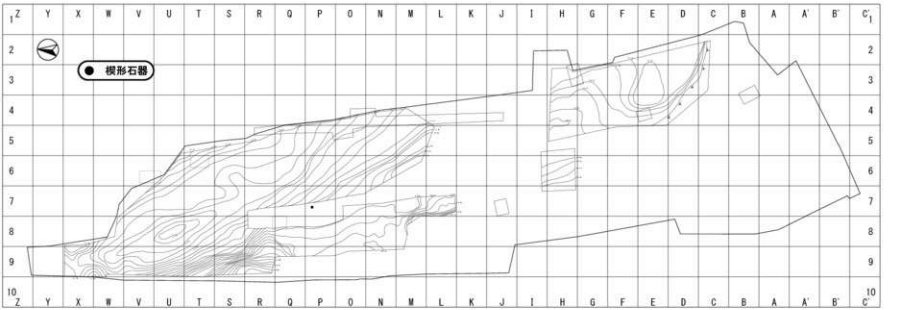


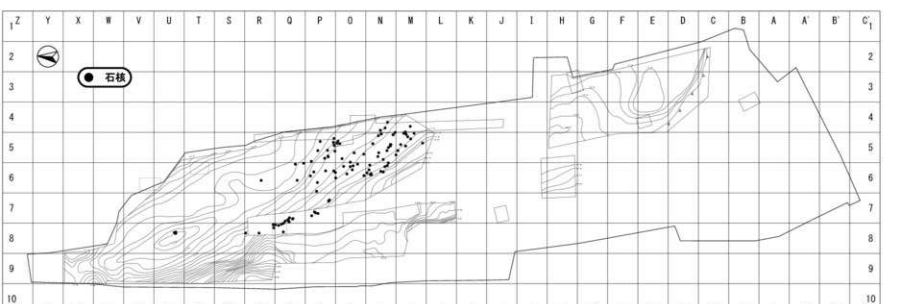
第 168 図　器種別出土状況図（1）



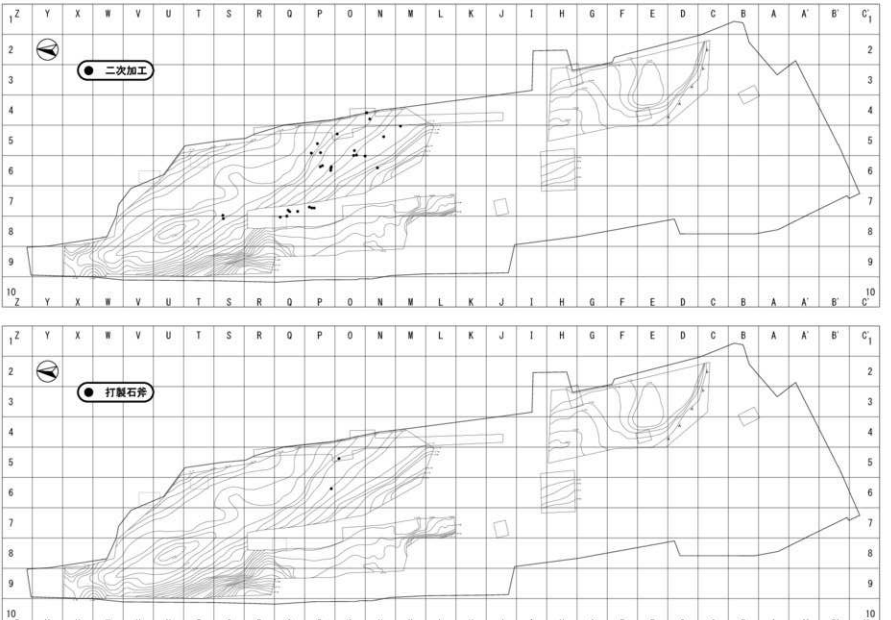


第169図　器種別出土状況図（2）

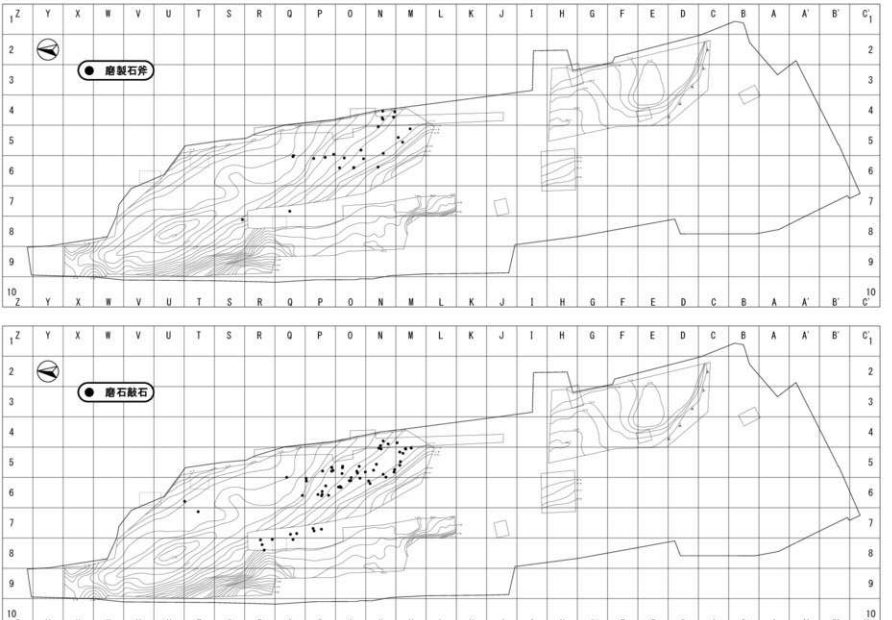




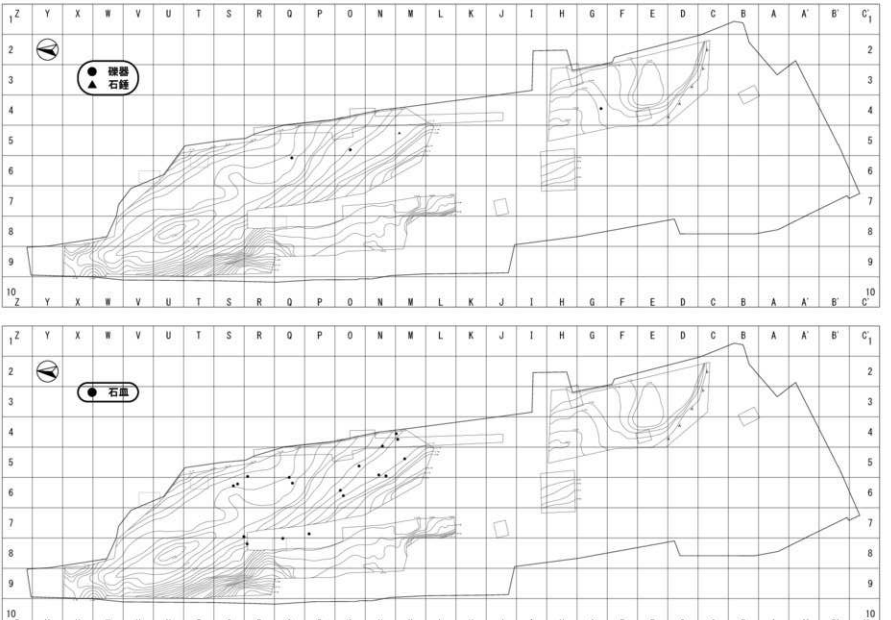
第 170 図　器種別出土状況図（3）



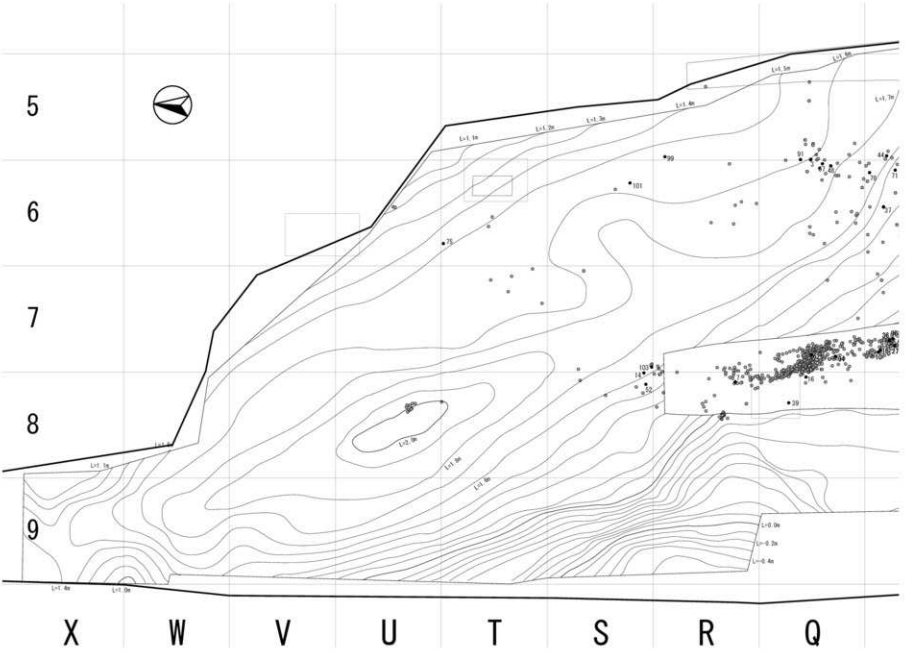
第 171 図　器種別出土状況図（4）



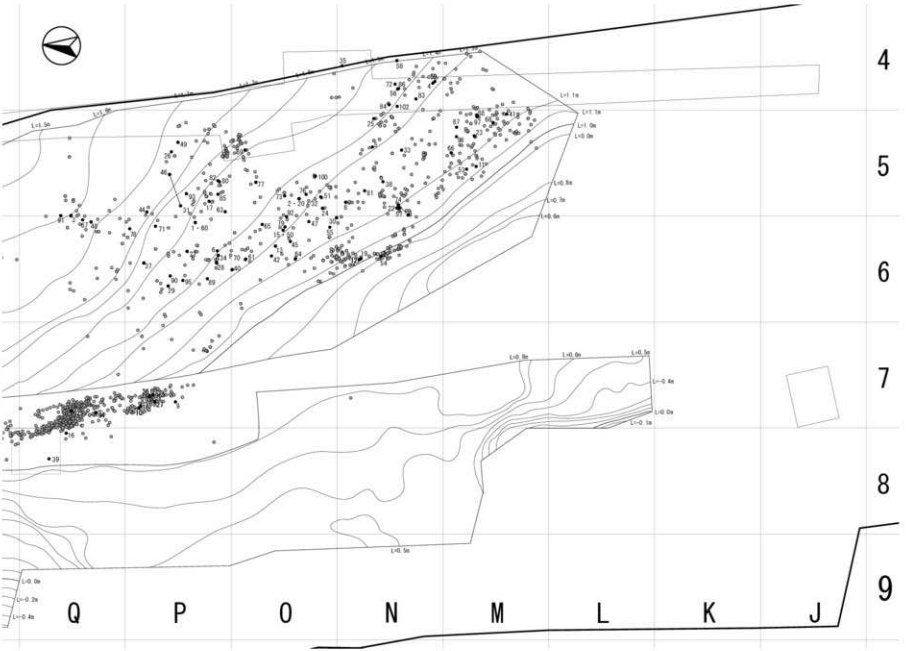
第 172 図　器種別出土状況図（5）



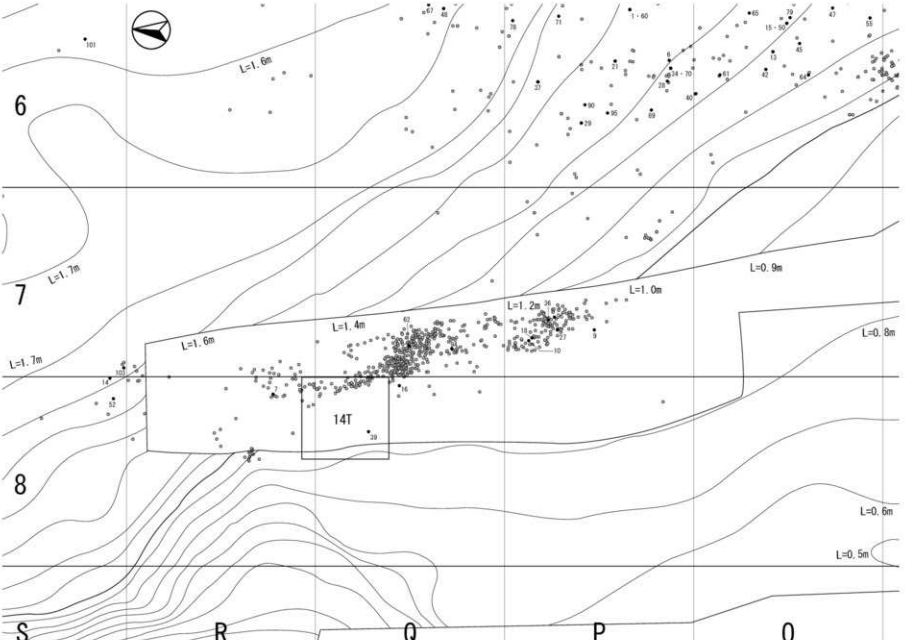
第 173 図　器種別出土状況図（6）



第174図　石器詳細出土状況図(1)

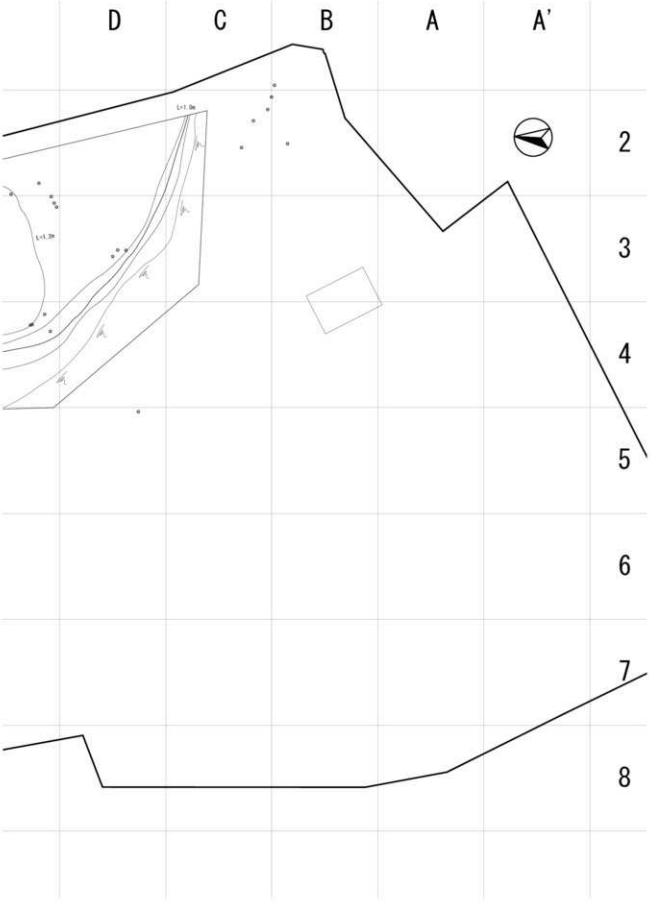


第175図　石器詳細出土状況図(2)

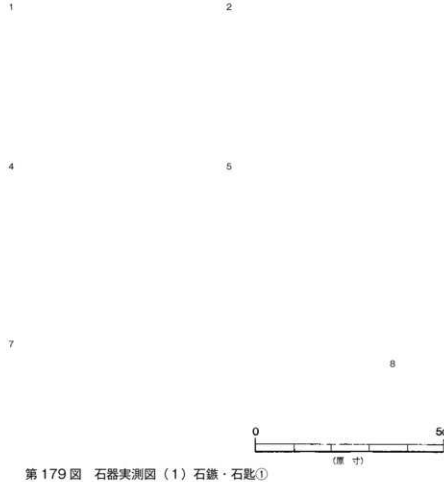


第176図　石器詳細出土状況図(3)

第177図　石器詳細出土状況図(4)



第178図　石器詳細出土状況図(5)



第179図　石器実測図（1）石鏃・石匙①

性もあるが，厚みが除去しきれていないことや刃部の形成が弱いことから本類に含めた。

7　楔形石器（第184図）

総点数2点が出土し，この内1点を図化した。36は断面が方形を呈するもので，上下両端部には使用によると考えられる剥離が明瞭に見られる。

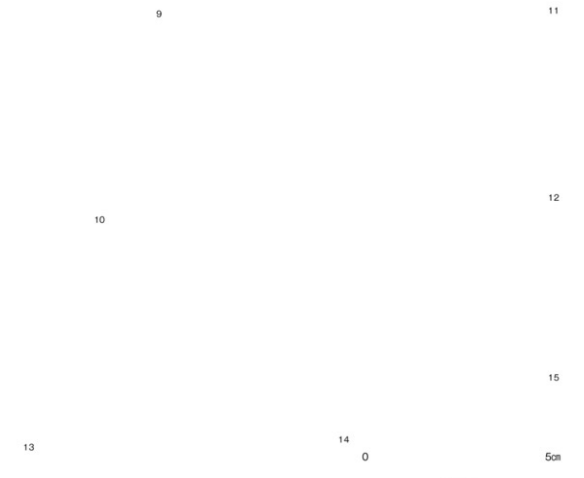
8　石核（第185図）

総点数108点が出土し，この内14点を図化した。この中で黒曜石製のものは黒曜石Ⅰのものが多く，石材集積遺構のものと類似する。元来は集積されていた可能性も考えられる。37は安山岩を素材とするもので，この中でも最も大型である。剥離面は一面で数回作業を行ったのみで，自然面を多く残したまま破棄されたとみられるものである。46～50は黒曜石を素材とするもので，小型のものである。全面に剥離が入り，ほとんどあるいは全く自然面を残していないものと，自然面を多く残すものとがある。

9　磨製石斧（第186図・第187図）

総点数で28点が出土している。全面を研磨したものと，一部を研磨し打製石斧に雰囲気が似るものがある。

51・52は大型のもので，側縁部に著しく再加工の剥離を残す。55～57は刃部が明瞭ではないが，全体的な様相から判断して本類に含めた。58～65は刃部片を一括した。この中で，62は蛇紋岩を素材とする片刃石斧である。67～70は棒状礫を素材として全面に研磨を施したものである。66もこれらと同様の可能性があるが，基部のみの残存であるので明確でない。71・72は剥離面を大きく残すものである。刃部は磨製ではないが，磨製石斧の未加工品か半ば再利用を行ったものの可能性がある。



第 180 図　石器実測図（2）石匙②・石錐

第 181 図　石器実測図（3）スクレイパー①

20

21

0 5cm

（原　寸）

22

0 5cm

（S＝2／3）

第 182 図　石器実測図（4）スクレイパー②

23

24

25

26

27

28

29

30

0

5cm

（原　寸）

第 183 図　石器実測図（5）スクレイパー③

31

32

33

34

35

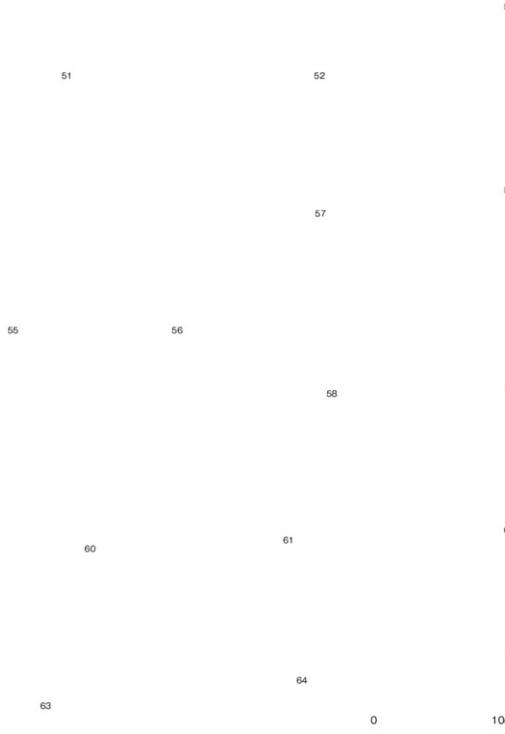
36

0 5cm

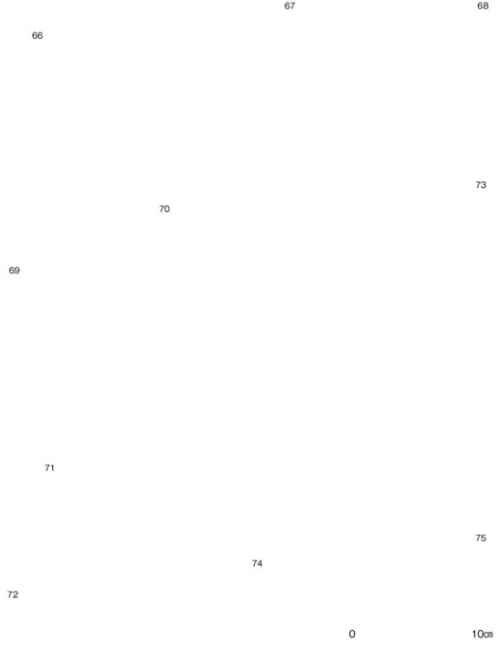
（原　寸）

第 184 図　石器実測図（6）二次加工剥片・楔形石器

第185図　石器実測図（7）石核



第 186 図　石器実測図（8）磨製石斧①



第 187 図　石器実測図（9）磨製石斧②・礫器・磨石敲石①　（S＝1／3）

76

77

78

79

0 10cm
(S＝1／3)

第188図　石器実測図（10）磨石敲石②

第 189 図　石器実測図（11）磨石敲石③

89

91

90

93

92

97

95

94

98

96

0　10cm
(S＝1／3)

第190図　石器実測図（12）磨石敲石④・石錘

99

0　　10cm

（S＝1／4）

第 191 図　石器実測図（13）石皿①

100

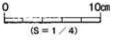
101

102

0　　10cm

（S＝1／4）

第 192 図　石器実測図（14）石皿②



第193図　石器実測図（15）砥石

10　礫器（第187図）

総点数3点が出土し，そのうち1点を図化した。73は長方形を呈する礫素材に対して主に下縁部と右側辺部に加工を施すもので，下縁部が刃部となるものである。

11　磨石・敲石（第188図～第190図）

総点数70点が出土し，そのうち24点を図化した。これらは形態的な特徴から磨石とされるものが多くを占めるが，この中には敲打痕を有するものが多数を占める。ここでは，磨痕だけでなく敲打を有するものについて，「敲石」も含めて扱う。「棒状敲石」をⅠ類，大型の「磨石」をⅡ類、小型の「磨石」をⅢ類、その他をⅣ類として分類した。Ⅰ類が74・75・88，Ⅱ類が76～83・85，Ⅲ類が84・86・87・89・90・94～96，Ⅳ類が91～93・97に該当する。91は明確な磨痕や敲打が確認されないもので，風化によって摩滅した可能性もあるが，自然礫の可能性も残す。92は表面に自然にできた大小の凹みを有するが，磨痕は確認されずに敲打痕のみが下面に確認される。93も側辺に敲打痕のみが確認される。96は表裏面が平坦面とならないもので本類の中でも特徴のあるものである。97は敲打痕が一巡するもので一見すると石錘にもみえるものであるが，表裏面には磨痕も明瞭に残す。

12　石錘（第190図）

1点が出土している。98は左右の対向する側面に敲打を施して抉り部を作出するものであるが，表裏面にも敲打痕が確認されることから，磨石の転用である可能性も考慮される。

13　石皿類（第191図・第192図）

総点数17点が出土し，そのうち4点を図化した。いずれも扁平な板状の石材を素材とするもので，表裏面には磨痕が観察される。101は使用による凹みが確認されるが，99・100・102にはほとんど凹みが確認されない。これは使用方法や目的の違いによる可能性がある。今後，使用痕や残存デンプンなどの分析を行って検討する必要があるといえよう。

14　砥石（第193図）

1点が出土している。103は厚みのある板状の石材を素材とするものである。表面についてはほぼ一方向に，裏面については同様の方向にわずかに向きを変えて数回の磨痕が確認される。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(150)
中小河川改修事業(万之瀬川)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅵ)

上水流遺跡4
【第Ⅱ分冊】

発行日　平成22年3月

編　集　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
電話番号　0995-48-5811

印　刷　イースト朝日
〒891-0122　鹿児島県鹿児島市南栄3丁目30-7
電話番号　099-266-5522